
刹那の瞬間

ドリル男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の瞬間

【Nコード】

N2626N

【作者名】

ドリル男爵

【あらすじ】

防衛省のデータベース、嚴重な警備と監視が施されたサーバールームから一つの重要な情報が盗み出された、それが事件と戦闘の発端だった。

防衛省から忽然と姿を消した日本政府を沈没させかねないデータ、それを奪取した某国工作員達を政府の方針で設立された“特殊部隊”に所属する人間達が血眼になって追跡を行う。

作戦遂行中に目に飛び込んでくる周囲の人間の凄惨な死。

目的の為なら死をも前提とする某国工作員達。

防衛省から奪取された情報が語る『新しい抑止力』の真実。

そして、決して交わる事の無かった人間との人生の邂逅。

特殊部隊において最高の能力を誇る少年は、それらを見て、肌で感じて物語の帰結へと足を進める。

人は短い間しか生きられない

そんな中で一人の人間として輝いていられる時間は更に短い“刹那の瞬間”だけ

貴方はそんな“刹那の瞬間”の中でどんな生き方をしたいですか？

多数の人間、多数の思惑はあるべき終点地点へと進んでゆく。

それが、誰もが望まない結末だとしても……

注意

・この物語はフィクションです、実際に存在する人物、国家、事例とは全く関連性はありません。

序

深い、深いまどろみの中で、最初に像を結ぶのは、どす黒く紅い光、それが吹き出した鮮血だとわかる頃には、血液の鮮烈な匂いが嗅覚を貫いていた。

カーテンが半分ほど閉められ、薄暗い夕暮れ時の部屋に倒れている二人の男女、包丁を持った俺は、強烈な赤色をぶちまけたその二つの死体を静かに見下ろす。

鼻腔を刺激する血液の匂い、背中に形成された包丁の刺し傷、それらが精神を狂気に駆り立てる中、俺は何も口に出そうとせず、硬質で怜悯な目を二つの人間だった肉塊に向けていた。

薄暗く、色彩の少ない部屋に映える黒っぽい赤の水溜り、それを見ながら俺はただ自分に言い聞かせる。

今までの状況を打開するには、こうするしか無かったんだと。

「ひつ……」

そんな中で不意に聞こえた短い悲鳴、それに反応して後方に振り返ると、リビングから短い廊下で結ばれた玄関の扉から、三十代そこそこの女性が恐怖に表情を染めながら震えていた。

「ああ、この“ごみ共”の死体を見て驚いてるんだな」

無機質な目を女性から肉塊に向け直し、数メートル先の女性に聞こえない程の小さな声でそう呟くと、包丁を握り直し、重い足取りで玄関に向かう。

タン……タンと間の空いた規則的な足音、それに目の前で立ち尽くす近所の主婦らしき人の顔がどんどん青ざめてゆく。

「一体どうしたの？、取り敢えずその包丁を置きなさい……ねっ？」

恐怖で震える唇から漏れた細い声、制止を求めるその声を無視し、俺は玄関の扉との距離を詰める。

玄関との距離と自身の距離が一メートルを切った所で、戦慄が最大まで達した主婦は声帯を震わせ、悲鳴を口に出そうとしている。

声帯が振動し、恐怖の悲鳴が空气中に放出されるその瞬間、俺は遅くて単調な足取りを歩んで来た脚部に力を込め、右足を大きく踏み込んで主婦との距離を零まで詰めた。

同時に鋭い突きを繰り出した血濡れの包丁が肋骨の間から侵入し、主婦の右胸を貫き、大量の血飛沫を噴出させる。

焼けた火箸を押しつけられた様に身体を反らせ、顔を恐怖に硬直させる主婦を血飛沫の中から見据えた俺は、包丁を持った右腕を時計回りに軽く捻った。

ためらいも無く突き刺したせいか、肺まで到達していた包丁は回転させた事によつてその切っ先で肺に穴を空け、主婦が悲鳴を上げるよりも速く、その生命を迅速に奪った。

刃物に肺を刺激され、声帯を震わせ悲鳴を出す事無くショック死した主婦は、包丁をその右胸に突き刺したまま肉を打つ音と共に廊下へと倒れ込む。

「黙っていれば生きれたものの……」

そして、自分でも驚くほど伶俐にして冷淡な声が、倒れ込んだ一つの命を終焉へと導いた。

人間の死を見れば、それが他人だったとしても精神に多大な影響を与えるもの。

だが、先程の二人も合わせ、三人の人間を殺したにしては、俺の精神は意外と冷静だった。

それは恐らく、自分が生き延びるにはこの方法しか無かった、そう自身に言い聞かせ精神を欺瞞しているからだろう。

所詮、人というものは一番自分の保身に力を入れる生き物だ。

地位、名声、金銭、そして自分の身の為なら他人の命を奪うことだつて躊躇わない。

それは、どんなに心優しい人間、どんなにプライドの高い人間にも

言える事。

勿論、三体の死体を尻目に立ち尽くす俺も例外ではなく、自分の身を案ずるが故に彼らを殺す事を選んだ。

だが、自分の行った行動が例え人殺しだったとしても、その行動が正しかった、そうするしか活路を見出す事が出来なかった、そうやって自分の考えを正当化してしまえば、冷静に状況を判断し、自分の考えを実行する為にどんな行動も躊躇することもなく行う事ができる。

その結果、玄関で倒れている主婦は助けを求めようとして血の沼に倒れ、リビングに倒れてる二人は俺を忌み嫌い、“一番憎い俺の手”によって殺されたのだから。

玄関で虚ろな目をしながら倒れている主婦だった肉塊、それから目を離し、どす黒い返り血を受けてなお明確に見える無数の火傷の痕と切創の残った左腕を一瞥した俺は、再びあの二人が死んでいるリビングへと足を向ける。

序

お前さえ居なければ……お前さえいなければっ！！

淡々とした調子の足音、左腕に残る消える事を知らない火傷の痕と切創、それらが脳裏に浮かび上がらせたのは、尋常ではない苦痛と憎悪を味わった地獄の様な日々。

苦痛から逃れる事の出来なかった自分の弱さ。

そして、淡々とした足音が伝えた戦慄と、狂気に顔が歪む人間の形をしながら人間でない二体の残酷な怪物。

だが、それはもう過去の話。

自分の親としてでは無く、ただ恐怖の象徴として存在し続けて来た二人は、互いに背中の中に出た刺し傷から鮮血を流し、死んでいる。

彼らとしては望んでない死だったかもしれないが仕方がない、彼らは恐怖と戦慄を人に与える事は出来たが、迫りくるそれから逃れる術を知らなかったのだから。

それよりも問題なのは、自分の保身を一番に考え、自由を手に入れる為にあまりにも高い犠牲を払ってしまった事だ。

三人の人間の死という、一生をかけても払いきれない程の代償を。

「一生掛つても払いきれない代償を負ったのなら、それを踏み倒せば良いだけだ。」

こいつらの屍を背負い、生きて行きながら……」

淡々とした足取りを止め、フローリングに転がる二つの死体に投げかけるかのようにそう呟いた俺は、壁に金具で掛けられた黒色のコートを手に取った。

年季の入ったそのコートは、二体の死体から近い場所に置かれているながら、彼らの汚れた血を避けたかの様に、純粹で綺麗な黒色をしている。

「俺は絶対に負債を踏み倒してみせる、手に入れた自由の為に」

そんな、煙草の匂いが染みついたコートを羽織った俺は、再び淡々とした足取りで、ドアの隙間から夕日の光が差し込む玄関、二度と見る事が出来ないと決め込んでいた懐かしい外の世界に向かい足を進めた。

*

改札口に切符を通し、一日に数えきれない程多い人が駆け上がったであろう階段を登りきった先にあったのは、高層ビルと喧騒、車と人混みで溢れ返った新宿の街だった。

そんな、酔いそうになる程人で溢れ返った駅前を、俺は少し大きめ

のコートを羽織りながら見渡していた。

そういえば、両親がまだ正常だった時、一度だけこの街に買い物に来た事があったな。

確か、余りの人の多さに驚きながらも、初めて見た高層ビル群にはしゃいだ様子で両親の後を追っていた。

昔の事を思い出しながら、暇そうにタクシーの中で雑誌を読み、乗車する客を待つドライバーや、髪を茶色に染め今風のファッションに身を包み、メールを打つ手と友人との会話に応じる器用な若者、そして、夕飯なに作ってほしい？と問いかけながら、互いに笑顔を絶やそうとしない親子連れを一瞥しつつ、俺は駅のすぐ近くにあるスクランブル交差点の信号待ちをする人の波の中に加わる。

人は時として急に変わってしまうものだ。

過去、普通の子ども好きな親の様に笑い、時には叱り、一緒に感情を共有してくれた両親ですら、一つの出来事で大きく変わってしまった。

ただのこども好きで中の良い二人から、互いを嫌い、二人で生み出した物を徹底的に破壊しようとした狂気の化身へと。

だが、今考えると、それは仕方がなかったのかもしれない。

この世の中で、永遠に理念や考え方を変えない人間は恐らく存在しないだろう。

他人の言葉や自分の置かれた状況に左右され、自分、又は自分が関

わる者達の都合のよい行動だけを考える。

それが、それ程経っていない人生の中で掴んだ、たった一つの確信だ。

だから、あの二人は憎い存在である俺を虐待し、彼らの死を望んだ俺は、今日それを行動に移したのだから。

そんな事を考えているうちにスクランブル交差点の歩行者用信号が青になり、周囲の人波達がまるで本当の波の様に歩き出し、人工の波頭を覗かせた。

そこで考える事をやめた俺は、人口の大波に身を任せ、白と黒が交錯した横断歩道をゆっくりとした足取りで進む。

しかし、これからどうするか。

昔の記憶を辿って何とか新宿まで足を運ぶ事は出来たが、これからの事は完全に未定だ。

序

勿論、この辺りに頼れる知りあいも行く宛ても無い。

真顔で他人の事など気にしない人波の中、そう考えながら俺は密かに眉間に皺を寄せた。

金は家からいくらか拝借したが、恐らく節約したとしてももって数日間。

それに、アパートの死体がばれるのも時間の問題だから、明日辺りには警察が動き出すだろう。

警察が動き出したのを気付いたメディアも動き出せば、下手すればニュースや新聞に顔等の情報が出て、潜伏は更に困難になる。

まだ潜伏先はおるか、今後の予定すら決めていないのに……

殺人を実行する前に、もう少し細かな所まで決めておくべきだった。

そう自分を呪っても状況が変わる筈もなく、俺は逼迫した状況に駆り立てられるかの様に、不意にアスファルトを靴で叩く間隔を狭める。

丁度、その時だった。

「本日未明、東京都内のアパートで、男女の刺殺死体が合わせて三
体発見されました。」

まさか、もう死体が見つかったのか！？

不意に聞こえてきた二十代後半の女性の物と思われる無機質な声、それが語った自分しか知らない殺人現場の情景に、俺は耳を疑いながらも音源の方向に鋭い目を移した。

ゆっくりと揺れ動く人の波の先に存在する七階建てのアルタビル、そこに設置された存在感抜群のディスプレイに映し出されたアナウンサーのバストショット。

そして、その下にテロップとして出ている“都内アパートで三体の刺殺死体発見”という文章に、全身に寒気が走り、額に一筋の冷や汗が流れる。

いくらなんでも早すぎる、三人を刺殺して家を出て、電車で新宿まで移動するのに三十分と掛っていない。

そんな短い間に警察が死体を発見し、メディアに情報を伝達できる筈がない。

「警察の調べでは、東京都内のアパートの一室で住人とみられる男女と、近所に住んでいた主婦と思われる女性が何者かに刺殺された様です」

一体どうなっているんだ……

見覚えのある光景を脳裏に浮かび上がらせるアナウンサーの言葉を聞きながら、思わず口に出してしまいそうな言葉を必死に飲み込んだ俺は、平静を装い、何事も無かったかの様に、ディスプレイから目をそむけた。

「現在、現場に残っていた犯人が使用したと思われる凶器から指紋を採取し、警察は殺人事件として調査を進めて行く方針です」

警察の行動が始まる時間、メディアへの情報伝達速度、完全に想定外な二つの要因に、横断歩道を渡りきった俺は、密かに鋭い視線を周囲の人間に向ける。

あの部屋に住んでいたのが、殺した二人と俺だけだという事実が発覚すれば、無論、行方の分からない俺を怪しみ警察はすぐに探し始める。

その時に、殺した二人が俺に行った虐待が明るみに出たとしたらどうだろうか。

虐待に耐えきれなかった息子が、台所にあつた包丁で両親と第一発見者を刺殺。

動機としては十分すぎるその情報は、凶器に残っていた指紋と相まって、俺を容疑者だと確定させる要因の一つになる。

今はそれ程強くない周囲の人間の警戒も、数日経てば名前と顔写真が全国ネットで公開されたことによって最大になり、潜伏がより困難になるだろう。

もしかしたら、早々に俺が置かれていた状況を把握した警察が、容疑者として俺を探しだそうとしているかもしれない。

搜索を始めた、始めてないしろ、俺が容疑者だとわかるのは時間の問題、まずい状況だ。

浅はかな知識、計画性の無い殺人、そんな言葉で自分を自嘲しても、刻一刻と今後の行動の幅は狭まってゆく。

落ち着け、落ち着くんた。

そう自分に言い聞かせ、次にとるべき最善の方法を考えながら、俺は歩道に流れる人の波から外れ、ビルとビルの間から続く路地裏に足を踏み入れる。

いま考えれば、この路地裏に何気なく足を踏み入れなかったら、今の生活は存在しなかったのかもしれない。

*

踏み込んだ路地裏、そこは周囲をビルに囲まれている事もあって、非常に薄暗く人の気配が全く感じられない場所だった。

いくら路地裏でも、表通りよりかは劣るとはいえ疎らに人がうろついているだろうと思っていた俺としては意外に感じたが、今はそんな事を考えている暇は無い。

序

警察が動き出す以上、長い間おなじ場所に潜伏する訳にはいかない。周囲に血縁関係者や親しい知り合いが居たとしても、ニュースや新聞で俺が殺人犯だとわかれば一発でアウト。

やはり、警備の厳しい東京から出来るだけ遠方に逃げ、年齢や住所を偽ってでも、なにか仕事をして生きていくしかないかな。

一先ず駅に戻って、顔がわれる前に列車で東京を離れよう。

そう考えた俺は、財布の残り金額を確かめながら、だいぶ後方に遠ざかった駅前に足を伸ばそうと体を後ろに向ける。

「お前だな、今日の殺人事件の容疑者の天城 纏ってガキは」

小さくも芯がありドスの効いた声が、不意に耳をついたのはその時だった。

まさか、こんなに早く警察が追ってきたのか？

全身に走った驚愕が思考能力を奪ってゆく感覚を覚えながらも、俺は声のした駅前の方に目を向ける。

角刈りに切り揃えられた頭の下から覗く鋭い眼光、ヤグザの様な厳しい顔、三十代後半と思われる顔からは予想出来ない程しつかりと

した体躯、それに合わせ多少の余裕を持たせて作ったであろう大きなスーツ、動揺で密かに揺れ動く瞳に映った男は、そんな容姿を見せながら俺の進路を断つ様に立ち尽くしていた。

お世辞でも警察官とは言い難い容姿だが、俺の名前を知っていると
なると警察官か刑事の類だろう。

だとしたら不味いな、相手が確信を持って話し掛けて来たという事は、この辺の警察官には既に俺の情報が出回っている筈だ。

もし、運良くコイツを撒けたとしても、他の警察官や警察関係者に見つかれば逃げ切れる確信が無い。

やはり、自由を手にいれる為には、三人の人間の命は些か重すぎた。

早くもツケが回ってきたようだな。

そう考え自分を呪い、俺は動揺を必死で押し殺しながら、目の前の大男を睨みつけた。

いつその事、ここで捕まるか？

殺人を犯して捕まったとしても、俺はまだ少年法の適用される年齢だ。

死刑、無期懲役は無く、長くても数年の懲役刑。

それに、裁判で虐待の事実が判明すれば、俺にも弁解の余地があるかもしれない。

ここでこの大男を出し抜いたとしても、後に待っているのは常に周りの目を気にしなければいけない逃亡生活。

精神的、体力的にも厳しいそんな生活に果たして耐えられるのだろうか？

男を睨む目をそのままにし、何気なくポケットに手をつ込むと不意に冷たい感覚が指先に走った。

いや、厳しい逃亡生活に耐えられるかどうかの問題じゃない。

俺は、あの三人を殺した罪を踏み倒すと心に決めた。

自分しか信じられないこの状況下でここでわざと捕まる事は、自分の意思を裏切る事になる。

今まで自分だけを信じて生き、自分の判断で障害を排除した俺は、一番信頼できる自分を裏切る訳にはいかない。

他に頼る者が無い以上、自分を裏切ってしまったら俺は存在意義を失ってしまうのだから。

それに、殺人という罪から逃げ、それを踏み倒すのなら死体が一つ増えた所で然して変わりはない。

「俺が、その天城 纏だったとしたらどうするんだ？」

不自然に口元を歪め、無意味な笑みを浮かべたその口から挑発的な

言葉を目の前の大男にぶつけた俺は、ポケットに突っ込んだ左手の中に冷たく硬質な感触を軽く握る。

数年間笑った覚えが無い自分が、不自然ながらも笑みを形成した事に内心俺は驚いたが、それも一瞬の事で、一拍後には大男の呼吸を読むことに神経を集中させていた。

「もし、お前が東京都内で殺人を犯した天城 纏だとしたら、悪いが俺に同行してもらう」

表情の変わり様から、俺が何か行動を起こす事を悟った大男、彼もまた自分の様に真剣な表情を浮かべながら、だらりと腕を下げ身構える。

序

成程、警官というだけあって、犯人確保の為の手段は心得ているという訳か。

だが、見た所相手は素手。

ポケットの奥に感じる無機質な感覚がある限り、相手が体術を使用したとしても負傷もしくは殺害出来る可能性は十二分にある。

恐らく、相手も集中している事もあって勝負は一瞬、その一瞬の隙を見極めなければ俺は手に入れた物を全て失う。

硬質で虚無を浮かべる眼光と、真剣ながらもどこか加減を見せる眼光、その両者がぶつかり合い、路地裏の一空間を時間の止まった世界に作り替える感覚を感じながら俺は呼吸を読む事に全神経を傾けた。

互いの肩がガソリン機関のピストンの様に規則的な上下運動をする中、俺の呼吸が大男の呼吸と一瞬ずれた、その瞬間だった。

「隙あり、だ」

低く、芯があり、ドスの効いた声と共に、先ほどまで全く隙を見せなかった大男が急に体勢を低くし、想像以上に持ち合わせている脚力で自分との距離を詰め始める。

先に接近を許したか……

そう思う暇もなく、俺は一拍遅れながらポケットの奥にある硬質な物体を取り出す。

そして、鞘から抜かれた重く空気の粒子を切り裂いてしまう様な鈍色の刃をもつコンバットナイフ、金と一緒に家から拝借したそれを大男に向けて逆手で構えた。

体勢を低くし、臓器を刃先から守る様に突進してくる大男に対し、肺に刃先を突き入れ捻り、一瞬で行動停止に陥らせる事は出来ないだろう。

しかし、相手が丸腰だという事を考慮すれば、必ず一撃目を放つ後に隙が生まれる。

先制された以上、その隙を狙うしかない。

大男との距離が近づくにつれ、彼の放つ異様な威圧感を全身に感じ、身が竦む様な感覚を覚えながら、俺は重心を気持ち後ろに移動させる。

それから一秒程遅れ、逆手に構えたナイフに全く臆することなく距離を詰めた大男が、その鍛えられた体躯から、まるでボクサーの様な左ストレートを俺の顔面に向かい繰り出した。

凄まじい速度で接近する大男の拳、それを俺は後ろに移した重心を利用し、バックステップで右後ろに移動して拳を避ける。

そこから、自分の左に大男の大木の様な腕を確認し、男に隙が存在

する事を確認した俺は、今だと言わんばかりに足に力を入れ、大男の懷に身を飛び込ませた。

お前には何の恨みも無いが、死んでもらおう

そう心の中で呟き、俺は躊躇いもなく順手に構えなおしたナイフを大男の右胸に向かい突き出す。

突き出したナイフがそのまま進んでいれば、確実に男の右胸に刺さり、更に軽く捻れば肺に達したナイフが、その周辺に存在する神経群に身を引き裂く鈍痛を与え、血飛沫と一瞬の痛みと共に大男に死を与えていた筈だ。

「危ねえな、ナイフなんて物騒なもん振り回すなよ」

だが、現実には俺の目に映ったのは倒れ行く人体とどす黒い鮮血では無く、ナイフを携えた自分の左腕を凄まじい腕力で掴む大男の姿だった。

まずい、止められたっ！！

そう叫んだ胸の警告灯は既に赤色に点滅し、次に起こるであろう出来事に注意を促していたが、もう既に遅かった。

ナイフを握っている左腕と反対に位置する無防備な右肩、そこに左の手の平を当てた大男は素早く身を捻った。

一瞬何が起こったのかわからなかったが、不意に感じた浮遊感と上

下逆さまになった大男の体、そして背中走った鈍痛と共にアスファルトと曇った空の両者が交互に視界に現れた事で自分の身に何が起こったのか理解出来た、と言うよりは無理矢理に理解させたと言った方が正しい。

「うぐっ……」

全身を何かで押しつぶされる様な長く重い鈍痛、それに呻き声を上げながらも、俺は手元にナイフがある事を確認すると、前方に存在するであろう大男に鋭い眼光を向ける。

そう、俺はナイフを向けた大男に体を腰投げで投げ飛ばされたのだ。

「全く、武器を所持してるなんて聞いてないぞ。運よく腰投げが決まったから良かったものの……」

視界の先に映る綺麗な腰投げを決めた大男、彼は言葉とは裏腹に余裕の表情を見せながら倒れている俺の方に脚を進めていた。

序

俺はまだやれる、こんな所で捕まる訳にはいかない

全身に痛みが走り、まともに体が動くかどうかからない圧倒的に不利な状況、そんな中でも俺の理性は手放しかけたナイフを強く握らせる。

どんなに泥臭くても、卑怯でも良い、こいつを行動不能に陥らせ逃げ延びてやるっ！！

そして、自分でも驚くほど血が上っている脳裏が確固たる信念を叫んだ瞬間、まだ痛みの残る両足が跳躍し、接近しつつある大男に大振りのナイフが襲いかかった。

「うおおああああああっ！！」

魂の底から絞り出された大通りにまで聞こえてしまうほど大きい雄叫び、それと共に順手で構えられたナイフが大男の首筋に向かって一閃される。

これが恐らく、男を行動不能にし逃げおおせる最後のチャンス。

外せば攻撃のチャンスは残されていないだろう。

この一撃を外せば二度と行動不能に陥れるチャンスが残されていない、正に背水の陣という状況に置かれている事もあり、一閃され

た鈍色の刃は大男の頸動脈に向かい、正確に接近する。

よし、これなら確実にこいつを行動不能に出来る。

ナイフが迫っているにも関わらず、冷静な様子でその軌跡を確認する大男に一抹の不信感を抱いたものの、今さらナイフを握る腕を止める必要も無い。

俺はナイフを向ける方向をそのままにして、左腕に更に力を入れて振りぬく。

確実にナイフが大男に直撃した、そう確信した瞬間だった。

冷静な表情で固められていた大男の口元が不意に歪み、一切の行動を止めていた巨体が後方に流れ、迫り来る大振りのナイフを紙一重で避ける。

そして、その流れで一閃された巨木の様な腕がナイフを持つ左腕に直撃した。

しまった、そう思う暇も無く左腕に走った衝撃と共に、強く握られたナイフが乾いた音を立てアスファルトに落下する。

「まさか……避けられるなんて……」

耳を貫く様な無機質で硬質なナイフの音、それが自分に完全なる敗北を理解させ、同時に全身に落胆の感情を走らせた。

痺れる左腕を押え、思ったより冷静な理性は次にとるべき行動を考えるが、逃亡するにしても大男に対して何か行動を起こすとしても、彼の体術の腕を考慮すれば成功率は極端に低い。

それに、警察がこの男だけしか派遣していない事は考えにくく、恐らく路地裏の周辺には数人の警察官が待機しているだろう。

呪うべきは自分の知恵の浅はかさか……。

先ほどまでとは違い、逃げ延びる事の出来る確率が微塵程しかなく、絶望しか残されていない状況で、俺は何もできない自分を静かに自嘲する。

だが、微塵でも逃げ切れる可能性が残っているのなら、その可能性に賭す他はない。

何時までたっても可能性を捨てようとしない俺は、目の前で不敵な笑みを浮かべる大男を見据えつつ、すぐに後ろを振り返り、逃げだせる体勢をとる。

「三人の人間をいとも簡単に躊躇無く殺した事だけはある、判断力、行動力、身体能力、何より目的を達成する為なら迷いや焦りを見せない強固な精神力を持ち合わせている。確かに”当局”の言う通り良い人材だ」

当局、人材、一体何の事だ。

俺の事を知っている所から警察関係者と考えた俺の予想は外れてい

たのか？

男の隙を見つけ出し、その瞬間に全ての力を逃げる事に使おうと決め込んでいた両足だが、男の放った“当局”という不可解な言葉にその行動は止められた。

「お前俺を刑事か何かと勘違いしてたのか？」

動きを止め硬直した俺を見た大男は、笑みを形成している口元から、まるで自分の心中を察している様な言葉を漏らすと同時に、アスファルトに落ちたナイフを蹴飛ばしながら自分の方に向かって歩み寄る足を向ける。

「もし、そう思っていたのなら、お前のその予想は外れている。俺が刑事の類だとしたら、子どもとはいえ殺人犯を相手にするのならそれなりの武装も応援も用意しておく筈だ。それに、この国の警察は数十分で殺人事件を察知してメディアに伝える程の能力は持ち合わせていないからな」

自分の心中に浮かび上がった問いに歩きながら答えた彼は、スーツのポケットから煙草の箱とジッポライターを取り出すと、それに慣れた様子で火をつけて銜えてみせた。

序

「刑事じゃないだと、じゃあお前は何の為に俺を追って来たんだ？」

逃げる足を完全に止め、思わず漏らした疑問の声に、銜えた煙草を吸い白煙を吐き出した大男は「ああ、そういえば説明がまだだったな」と静かにその口を開く。

「まず初めに説明しておくがな。俺はデカでも、しがない安月給で冷や飯食いの巡査でもない。これでもれっきとした防衛省に所属する政府関係者だ」

先から白煙を噴き出す煙草の灰が落ちると同時に、大男は一息にそう並びたてた。

「政府関係者だと、お前みたいなヤクザみたいな面の奴が防衛省にはわんさか居るのか？」

一瞬の静寂の後に一息に並びたてた言葉を冗談混じりに否定した瞬間、大男は眉間に皺を寄せ「わからない奴だな」とため息交じりの言葉を発したが、俺からすれば、この男の言っている事は真実だとは考えづらい。

大男のヤクザの様な風貌からは彼が防衛省の職員とは到底思えない、

どちらかと言えば陸自か海自の隊員といった風貌と図体だ。

それ以前に、この大男が自衛隊員だとしても、防衛省の関係者だとしても、どのみち俺を執拗に追い回す理由は無い。

ナイフを携行している殺人犯とはいえ、犯罪者に対して対処するのは警察の仕事で自衛隊や防衛省は全く関係を持っていないのだから。まあ、俺がテロリストかその類だったら話も違ってくるだろうがな。

「百歩譲ってあんたが防衛省職員や自衛隊員だったとしよう、俺みたいな犯罪者をニユースまで流し追い回して一体何が目的なんだ？」

だが、大男は俺の質問に全く答えようとせず、ただ煙草を口から離し白煙を吐き出すだけ。

今の彼には先ほどの様な隙の無い動きは見られず、ナイフを拾い上げる事も逃げだす事も可能だったが、脳裏に浮かび口にだした疑問が妙に引っ掛かり、足を動かそうとはしない。

「なあ纏、お前はこの国の現状をどう思う」

そんな中で、不意にぽつりと置く様に放たれた言葉に俺ははっと落としていた視線を大男に向ける。

「この国の現状って、日本の現状の事か？」

不意に問いかけたにしては実に大きく、考えづらい、それに馴れ馴れしい口調で放たれた大男の問いかけは、急に話の内容が変わったにも関わらず不思議と違和感を感じない物だった。

俺の返した言葉に「ああ、そうだ」と短い声を漏らした大男は、口から離れた煙草を軽く払い、乾いたアスファルトに灰を落とす。

この国の現状……、世間話にしてはかなり壮大な話題だな。

さつさと自分の素姓を明かし、さつさと自分のとるべき行動をとった方が賢明なのに、何故こいつはそんな事を聞くんだ？。

そんな大男に、いきなりそんな事を聞かれても答えられるはずがないと睨む目を向けると、彼は吸いつくした煙草をアスファルトに投げ捨てると、新しい煙草を箱から取り出しながら静かに口を開いた。

「韓国、中国の急速な軍事化、北朝鮮といった何をしでかすか想像のつかない国家の出現、急速な変化を遂げているアジア諸国の中で日本は憲法という名の鎖と無能な政治家、凄まじい額の国債により独り取り残されている。常に変化し、その構成を変えようとしているアジアでもし大規模な戦争が発生すればアジアの版図は大きく変わり、下手すれば“この国”がその戦争に巻き込まれ、第二次世界大戦で経験しなかった本土への上陸や、もしかしたら再び核兵器の炎を被ることになるかもしれない。そんな中で頼みの綱の在日アメリカ軍はそもそも冷戦時のソ連を牽制する為の一拠点として確立していただけで、冷戦が終結し核抑止力が成立した世界においては当

然ただの余剰戦力となり下がり、当然米国としては余剰戦力に予算を回す位なら早々に撤退させ余った予算を他の事につぎ込みたい所だろう」

そう言ったところで大男は煙草に火を点けようとライターを煙草を銜えた口元に近づけるが、ライターオイルが丁度切れていたせいか、煙草の先からは小さな炎や白煙は一切見られない。

「くそ、オイルが切れてやがる」

火の点かないライターをスーツのポケットにしまい代わりに煙草の箱を取り出した大男は舌打ちをしながら銜えていた煙草を箱の中に戻す。

「だが、現実には現在の米国は沖縄海兵隊を撤退させる予算は大きな負担だ。予算を度外視したとしても本国へ撤退させた“余剰戦力”は解雇を余儀なくされ、解雇された海兵隊員は世論に働きかけ政府に多大な影響を与える。それを恐れて米国は海兵隊の撤退を渋っているが、その中途半端な考えでは軍事化の著しいアジア諸国を相手にするのは難しい」

「なら、自衛隊はどうなんだ？」

序

完全にだんまりを決め込んでいた俺が急に言葉を発した事に驚いたのか、大男は片眉を吊り上げながら続けようとした言葉を止める。

そんな彼に何を黙る必要があると目で伝えるが、彼の話は聞くだけにとどめようと考えた理性からすれば長口舌を遮った言葉は自身でも不思議なものに聞こえた。

「自衛隊は確かに他国の正規軍には劣るものの自国を防衛するには十分な戦力を保有していると思う、それだけで十分じゃないのか？」

煙草を吸い一服をしている隙の多いこの状況ならば、この男から逃亡を図るのが一番賢明な判断だろう。

しかし、大男の不可解な質問に理性は逃げるという選択肢をとらず、数年前ニュースや本で知った臆げな情報を記憶野から引っ張り出し、さらに言葉を続けていた。

そんな俺に対し、煙草の箱をスーツのポケットにしまい込み、先ほどまでの余裕と隙を不意に消した大男は表情をすぐさま真剣な物に変える。

「確かに自衛隊は空軍力、海軍力においてはアメリカ以外の国と対等、いやそれ以上に戦える能力を持っている。だがそれは防衛力の観点から見たときの話だ。いざ戦争となれば相手の核ミサイル基地

や重要拠点を破壊する事が必要になるが、憲法で防衛力の保持しか認められていない日本の航空機はどれも他国を攻撃しに行けるほど航続距離が長くは無いし、海上自衛隊のイージス艦については対艦攻撃性能が十分に備えられているから恐らく問題無いだろうがイージス艦の主要な目的はミサイルから艦隊を防衛する事であって、もし相手国が空母を基幹とした艦隊を保有していた場合は少なからず被害が出るだろう。あと、陸上自衛隊に関しては90式戦車などの主力となる戦闘車両を保有しているが日本の橋では戦車の重量には耐えられない所から、迅速な展開能力は皆無と言っている。そんな所から自衛隊の防衛力で迫りくる相手国を退けるのは難しいだろう」

防衛省に所属しているというステータスのお陰か、単に大男の話の方が説得力がある物だったのか、彼の話す言葉は知識の乏しい十代になってまだ数年と経っていない脳裏に根強く残っていた。

と言うよりも、大男の話す言葉が印象的に聞こえたのは彼の選択した国防の欠陥という話題に少なからず俺の興味が向いていたせいなのかもしれない。

「なら、この国は国防に対してどのような態度をとればいいとお前は思っただ？」

そんな事実もあつての事か、俺は逃げるという選択肢を忘れ教師に好奇の目を向ける小学生の様に大男に疑問を投げかけ、それを聞いた彼は待ってましたと言わんばかりに厳つい口元を開く。

「俺はさっきまで自衛隊や在日米軍の戦力を指摘してきたが、実際に戦争の勝敗を分けるのは核兵器を基幹とする優秀な大量破壊兵器をどれだけ保有しているかどうかに依存している面もある。どんなに優秀な軍隊を保有していても核兵器とミサイルを発射するボタンを押すための人差し指が与える抑止力は非常に大きい。大量破壊兵器が強大な師団や巨大艦の進行を防ぐ事ができる事実。それが核抑止力という平和を維持する為の最悪なシステムが安定している所以だ。だが、核抑止力には大きな利点もあるが、同時にいくつかの弱点がある。現代の核兵器は技術進歩と共に性能が向上し、たった二発で地球の生命をほぼ奪えるようになったが、それだけ威力が高ければ自国の放射能の影響も深刻だし、敵拠点を無傷で奪い取るという戦略兵器としては核兵器は威力が高すぎる。さらに、歴史上に大量破壊兵器を用いた最悪の殺人者と刻まれる事と自分が大量の同胞をゴミ虫の様に殺す事を考えれば、そう簡単には発射スイッチを押す事は出来ないだろう。しかし、その事を考慮したとしても核兵器は非常に優れた兵器であり、強力な核を大国同士が保持する事で発生する核抑止は今日まで大規模な国家間戦争を防いできた」

大男はそこで震わせっぱなしの声帯を止め、咳払いで一度話を切った。

「その途方も無い破壊力と、広範囲に拡散する死の灰により実戦というよりも抑止の為の兵器という意味合いが強い核兵器、それを基幹とした陸海空軍を整備すれば強大な軍事力が完成する。今のアジアにはそんな強大な軍備が備えられた国は数えるほどしか存在しないが、今後そんな国が増える可能性は非常に大きいだろう。それに、核兵器は輸送手段とセットで持つ事で他の軍備を疎かにしたとしても情勢と地政学によっては大きな脅威と抑止を周囲に与えることが

できる。そのいい例が北朝鮮だ。ただえさえ貧困に悩まされている国民を余所に、あの国は核軍備こそが富国強兵への道と信じて核の開発と生産を続けてきた。このまま軍備拡大を続ければ間違えなく北朝鮮は財政破綻を起こすだろうが極限状況に陥った国というのは何をしでかすかわからない」

序

「近い将来、国家の存続という極限状況に置かれた彼らは停戦しているだけでまだ戦争状態の韓国に侵攻するかもしれないし、周囲の国々に見境なく核弾頭をばら撒きだすかもしれない。失う物を無くした人間、死を前提とした人間の集団というのは非常に恐ろしい、何故なら彼らは時に大国すら沈める程の力を持つ場合があるからな」

大男の話す言葉はあながち間違えでは無かった、背水の陣という言葉が物語るように失う物を無くしたり死を前提とした人間は場合によつては非常に大きな脅威を与える。

過去、旧日本軍の神風特攻隊が圧倒的優勢に立つ米海軍に非常に大きな精神的打撃を与えた事実や、核抑止の中において核保有国同士が武力衝突を起こした場合、劣勢国が優勢国に向かい核発射を断行する可能性がある事実が核抑止の弱点として数えられてる事がそれを裏付けているからだ。

「核保有国の増加、アジア諸国の急速な軍事化、そして政治的、財政的に追いつめられている核保有国の脅威、そんな中でこの国は国防の一部を保護者であるアメリカ合衆国に委ねて、考える力を残しながら十二歳の子供へと退行し、外界から身を守る術と確固たる抑止力を同時に失った。今の世界情勢なら、そんな状態でもこの国は抑止力を確立してアジアの中で繁栄を続けられるかもしれないが、数年後、十数年後はどうだろうか？。急速な軍事化を行う中国や核の保有を進める北朝鮮、そしてそれらの後方に立つ大国の陰、それらを考慮すれば今のままの防衛力では下手をすれば日本という国が

アジアの版図から姿を消しているかもしれない。“世界情勢は常に変わりゆき不変な物ではない”、その事を考慮した時この国に必要な物は核の保有でも同盟国アメリカからの抑止力の援助でも無い、外界から身を守る確固たる力、“新しい抑止力”という確立された力だ”

自身の声が路地裏に低く響き渡り、その音響が静かに消えてゆく様を真剣な面持ちで確認した大男は、スーツのポケットに手を突っ込みながら俺の方にゆつくりと進む足を向ける。

「実を言うとその新しい抑止力の構想は防衛省によって実現されている。対歩兵、対陸上兵器、そして最後には対核兵器といった兵器や人間に対する対応力に富み、それでいて他国からの借り物では無い絶対的な防衛力である“新しい抑止力”。それを確立した物にする為に俺は今日、わざわざ時間を割いて殺人を犯したお前に会いに来たんだ」

「抑止力を確立する為に俺に会いに来た？、一体どういう事だ」

ポケットに突っ込んだ手をそのままにして鋭い眼光を携えた目で見降ろす大男に対し、それに負けないように睨みつけた俺は目の前に立ちただかる長身にそう問いかける。

大男の腕が電撃的に動いたのはその瞬間だった。

大木のような拳が素早くポケットから出現すると同時に腹部に鋭く、そして重い鈍痛が走り、臓腑が押し上げられる感覚を味わったと同

時に俺は硬質なアスファルトに倒れ込んだ。

腹部に大きな力と衝撃を受け取った瞬間は自分の身に一体何が起ったのかわからなかったが、胃から食道を伝って逆流する胃の内容物と全身から噴き出す脂汗、そして右の拳を前に出したまま不敵に笑う長身が全てを自分に理解させた。

自分が大男に腹部を殴られ、冬の冷気を孕んだ風に冷やされたアスファルトに倒れ込んだという事実を。

「確立された防衛力を実現するためには現在の自衛隊の人員では到底不可能だ。何故だかわかるか？」

うめき声を上げ、腹部に迸る痛みにも死で耐える俺に向けて大男は驚くほど怜悧で鋭い声で問いを投げかけるが、無論、痛みにも耐える事に全神経を集中させる俺にはその声は届かない。

「わからないのなら教えてやろう、彼らは人間の死という人間の精神に最も影響を与える出来事を経験していない。実際に戦争に参加した狙撃手の中には数十人も殺せば精神が崩壊し、自分の口に銃口を挟み引き金を引いて自殺する者もいたと聞く。そんな生半可な精神力では人を殺すという特殊で人の理念に反する行動を躊躇無く行う事は出来ない。そこで国家は殺人を犯した少年少女、その中でも躊躇なく、そして効率的に生命を奪った者だけを特殊戦闘員養成プログラムに参加させるという法案を国会に通さずに成立させた。つまりお前は殺人犯として服役する義務を免除される代わりに防衛省の非正規戦闘員として兵役のような物が科せられる」

一体、こいつは何を話しているんだ……？

腹部に拳を受けた事により極端に能力を低下させた五感でも大男の
声は疎らに聞き取ることが出来たが、痛みを受けた局部に精神を集
中させる脳髄では彼の話の趣旨は理解できない。

そんな中、機械的に噴出した涙で霞み行く視界に腰のベルトに右手
を持つてゆく大男の姿が映った。

序

「何を……する気だ？」

途切れ途切れでも強く声を絞り出した俺を無視し、大男はベルトに装着されたホルスターに装備された金属の塊を静かに引き抜く。

トカレフTTT - 33

本来必須な筈の安全装置すら省略した徹底単純化設計で、生産性向上と撃発能力確保に徹した拳銃であり、過酷な環境でも耐久性が高く、かつ弾丸の貫通力に優れる旧ソ連製の自動拳銃。

この時俺には拳銃の種別を判断する知識は無かったが、大男がホルスターから抜いた拳銃に見られたスライド側面の精巧な滑り止めは正にトカレフのそれと判別出来た。

「何って、少し眠ってもらっただけだ」

笑みを浮かべる顔をそのまま俺の問いに答えた大男は、トカレフの銃身を握り、俺の頭を押さえながらその場にしゃがみ込む。

「安心しろ、悪い様にはしねえよ」

そして、そう言い放ったと同時に大男は手に握ったトカレフを振りかぶり、俺の首めがけてそれを振り下ろした。

抵抗する暇も無く、肉を打つ鈍い音と強烈な衝撃が同時に走り、急速にアスファルトとビル群の足元を見る視界が暗くなる。

「こいつを車に運び込め」

視界が完全にシャットアウトし、聴覚も続いて機能を停止させようとしている状況で、大男が他の人物に言い放ったであろう無機質なその言葉がまどろみの中で聞いた最後の言葉になり、俺の意識は現実へとゆっくり引き戻されていった。

*

深い深い泥沼の様な意識の中、最初に像を結ぶのは白く強い光。それが天井に張り付いている電灯の光だと分かる頃には、寝起き特有の倦怠感が全身を支配していた。

完全に覚醒しきつてない朧げな聴覚を貫いた重厚なエレキギターの音に、天城 纏は重い瞼を静かに開ける。

しかし、ずいぶん昔の夢を見ていたようだ。

そう感傷に浸ってられるのも数秒の間、キレのいい渋いイントロが終わわり有名スラッシュメタルバンドの特徴的なボーカルの声がり

フに乗り始めた事を認識した体は反射的に布団から飛び起きていた。普段なら全身を支配する倦怠感に負け、再び布団をかぶる筈だったが今回はそうはいかない様だ。

何故なら、久方ぶりに直視した光に細めた目が直視した先に、目覚ましの音ではなく“勤め先”からの着信音を振りまく携帯電話が存在していたからである。

「今日は非番の筈だろ……」

布団のすぐ近くに鎮座しているテーブルの上でテクニカルなギターと特徴的なハスキーボイスが混ざり合い、一つの芸術とも呼べる音響を発している中、纏はそう短く呟き左手を伸ばして携帯を手に取り通話ボタンを押すと「はい」と一言電話口に吹き込む。

（指標アルファ、地点は防衛省正面玄関から200メートルのビル屋上、地点に向かう時にはゴルフバックを持参しろ。あと、迎は十五分後に寄こす。以上だ）

ここ数年、週に一回は聞いているであろう低く、どすの効いた男の声はそれだけを告げると電話をすぐさま切った。

当局からの緊急招集。

この“勤め先”に世話になってからは嫌というほど経験している休

日出勤でも、急に叩き起こされて仕事に出向くのは自分に合っていないらしい。

大きなため息をつき、折りたたんだ携帯電話を軽く布団の上に放り投げた纏は洗濯物の山の中から皺の少ないトレーナとジーンズを引っ張り出し、今は塞がっている左手の代わりに右手でテーブルに置かれた緑茶のペットボトルを驚掴みにする。

薬指と親指でペットボトルの蓋を開け中の緑茶を口の中に流し込み、反射的に時計を見ると既に午前一時を回っていた。

現在時刻は一時、報告書を書かなければならない事を考えると今日は朝方までかかるか。

そう内心で呟き舌打ちをした纏は渋々ジャージを脱ぎながら、再び蓋をしたペットボトルの代わりに握ったリモコンでテレビの電源を入れる。

序

主電源が入ってから数秒のタイムラグの後に徐々に画面に現れたのは深夜のバラエティ番組の物であるう芸人の驚愕した表情で、同時に聞こえてきた大声でのツツコミに対しさらに苛立ちを感じたのか、チャンネルを変える事無く速攻で主電源のスイッチを切った。

「この時期じゃプロ野球のダイジェストすらやってないか……」

仕事先にも機械にも急かされ、今の自分には余裕がない事を再認識すると壁にハンガーで掛けられていたコートを手に取り、それを一息に羽織った。

背中への刺し傷からどす黒い液体を流し、恐怖に表情を固められながら死ぬ二つの肉塊。

年季の入った黒色のコートを羽織った瞬間、鼻腔を刺激した煙草の香りが不意に数年前の殺人現場の情景を思い出させる。

あの日から俺は一切の情を撤廃し、自己を正当化する為に今日まで生きてきた。

だが、虐待に耐え自立する好機を待つ道も、普通に少年刑務所に服役し贖罪の道を歩む事も出来た筈だ。

そんな中俺は両親を殺し、その罪を被る事無く必死で負債を踏み倒す事に徹して来た。

今考えると俺の選んだ道は正しかったのだろうか？

「まあいい、さつさと予定地点に向かうか」

今さら選んだ道は変えられない、もし自分が間違った道を歩み失敗したとしても俺は自身の信念と一緒に心中するだけだ。

まるで脳裏に浮かんだその情景に駆り立てられたかの様に纏はそう吐き捨てると、壁に立て掛けてあったゴルフケースを背負い玄関へ続く扉に向かって踏み所のないくらい整理されていない部屋を慎重に歩んでゆく。

*

それにしても、先ほどの夢と言いコートに染みついた煙草の香りと言い、今日は妙に昔の事を思い出す日だ。

そう心中で呟き“雇い主”から与えられた寂れたアパートのドアを開くと、そこには満天の星空が広がっていた。

想像以上に冷たい冬の風を浴びながらも夜空に輝く星空は力強くその光を夜の帳に包まれている地上に振りまいている。

纏の目線の先に広がる光景、これを見た人間は殆どが知らず知らずのうちに幻想的な星達に目を奪われ、“美しい”と心中で呟く事だろう。

「思ったより寒いな……」

しかし、吹き付けられた物体を全てを凍てつかせてしまうのではないかと心配してしまうほど冷たい冷気に、丸出しにした両手をポケットに納め、星空を見上げていた顔を俯かせた纏はやはり無機質な目を露にしていた。

数秒後、顔星空に微塵の興味すら抱かない無機質な目はコンクリートで造られたアパートの塀の切れ目から覗く一台のワゴン車を注視する。

夜陰に紛れる黒く鈍い光を反射するハイエース、それが“勤め先”が寄こした迎だと気付いた纏はゴルフケースを背負い直し、黒塗りのそれへと足を進める。

ここ最近、妙に“勤め先”からの緊急招集が多い、それも今日みたいな深夜にばかり呼び出される。

全く、上層部には少し現場で働く人間の苦勞を知る必要がありそうだな。

顔を顰め、言葉に出来ない愚痴を漏らしているうちに、ハイエースとの距離は数メートルまで縮まり、ゴルフバックを背負った纏の存在に気付いた車内の男がウィンドウを開いて顔を覗かせる。

「識別番号00番、天城 纏」

顔を覗かせた四十代前半の男に自分の顔写真と識別番号、それに特殊なICチップが埋め込まれた手帳を差出し、そう抑揚の無い声を放つと、車内から顔を出した彼は特殊な端末を手帳のICチップに翳し、何やらボタンを操作し始めた。

傍目から見れば夜陰に紛れて車内の人間と麻薬を取り引きしてる哀れな中毒者に見えなくもない。

実際に事情を知らない警察官に数回ほど職質をかけられた事もあったが、ここ最近“勤め先”が警察にまで介入してきたのか仕事をする時には警官の姿すら珍しくなった。

その事を考慮すれば、上層部の連中も治安組織に圧力を掛けるだの仕事の為の道具を調達するだの色々と苦労があるのかもしれない。ボタンを操作し始めてからほんの数秒、本人と識別できた証拠である短い電子音と端末に表示されているであろう認証の二文字を確認した中年男性は「乗れ」と一言だけ呟くと、外を吹き荒れる冷風から身を隠すかの如く車内へ顔を戻す。

パワーウィンドウが作動し、中年男性の顔が半分ほど隠れた事を確認した纏は、大きなため息をつく。ハイエースのスライド式ドアを開け、車内ラジオの音がうつすらと聞こえる後部座席へと乗り込んでいった。

序

*

ハイエースの車内に入った瞬間冷たい外気が肌を突くのを止め、全身を温かい暖気が急激に包んでいった。

流石に車内は暖かいみたいだな。

纏はその様な外気との急激な温度差にひっそりと片眉を吊り上げたがそれも一瞬の事、車内には暖房が備え付けられているのだから当然だなと一人で納得した彼は静かに溜めた息を吐き出した。

そんな温かい車内に身を潜り込ませた纏は先ほどまでポケットに突っこんでいた両手を外に出し、荷物も小物も置かれていない殺風景な後部座席に静かに座り込んだ。

それと同時にアクセルが踏みこまれ少しずつ加速を始めるハイエースの後部座席で、座った彼は肩に掛けていたゴルフバックを慎重に足元の床へ降ろす。

ゴルフバックを置く為に上体を折り曲げた時に鼓膜を揺らしたガソリン機関の音、スピーカーから無意味に流されているカーラジオの音、現在車内に流れている音響はその二種類で、纏も運転を担当している中年男性も一切声を震わす事無く、先程から沈黙が車内を支配していた。

そんな沈黙は纏にとって会話により発生する無駄なコミュニケーション

ンが無い分、仕事をするにおいて好都合だったが、運転席の中年男性はそうでも無い様だ。

パワーウィンドウから顔を出した時は表情を一切変えなかった運転手だが、バックミラーに薄らと映る今の彼の表情は恐怖と背信感により引き攣つてる様にも見える。

恐らくこの中年男性は“当局”に新しく雇われた新人、当然、纏を迎えに来る前に今回の業務内容についてしっかりと説明が施されているだろう。

そうでなければ、引き攣つた亡霊の様な顔をせずに、能天気な様子で世間話でも持ちかけている所だ。

彼は目的地に纏とゴルフケースを送り届けた後に起こる惨劇を想像し、心を耐えがたい戦慄に浸食されているのだ。

バックミラー越しに運転手の顔を一瞥した後にゴルフバックを床に置き座席に上体を預けながらふと横を見ると、真っ暗な住宅街を背景に街頭の光という人工の光と自然が生み出した星の輝きがそこに一枚の巨大な絵画を創りだしていた。

そろそろ季節も冬、また一年が過ぎるか……。

玄関を出た時に身体に吹き付けた冷風、それに車内にかかっている強めの暖房、そこから秋も終りに近づいている事を理解した纏は窓の外に広がる巨大な絵画を何となく眺めている事にした。

何処か薄黒いウィンドウに映りだす巨大な絵画はハイエースがアスファルトを走るに従ってその姿を徐々に変化させてゆく。

この仕事を始めてからというもの、時間が過ぎるのが早いな。

星と街頭の光をそのままにして先程まで何処か優しげな絵を創りだしていた住宅街は徐々に姿を潜め、高層ビル群とそこから漏れる強い明かりが上空から降り注ぐ優しい光を蹂躪する攻撃的な絵画に姿を変える。

そんな窓から見える光景の急激な変化は纏の脳裏に一つの感傷を浮かび上がらせた。

（今日は11月15日月曜日、時刻は午前一時半を回りました）

今まで聞き流していたカーラジオからなじみ深い日付が聞こえてきたのは、丁度その時だった。

深い戦慄や思い入れの深い出来事を感じた日が脳裏に染みつき、毎年その日になるとその出来事に関する夢を見たり、無性に何かが引っ掛かる感覚を覚えたりするのは講談本の中の話。

そう思っていた纏にとって今日見た夢や車内から見える光景から感じた感傷は、非常に意外な物に感じられた。

だが、カーラジオから電波を介した先に居るアナウンサーが言い放った日付は確かに脳裏に浮かんだ感傷を増幅させ、そして記憶野の奥深くに眠る一つの記憶に手を伸ばしていた。

血に濡れた三体の死体を照らす夕陽の光。

会社から自宅へ帰るサラリーマンや買い出しに来た主婦で埋め尽くされた満員電車。

自身の目の前に立ちはだかる大男。

アスファルトに落下して硬質な音を立てる大振りのナイフ。

腹部に走る鈍痛と、まだ見ぬ事実との邂逅。

そう、六年前の今日十一月十五日は彼が大男により現在の職業に就いた日であり、自分の両親と第一発見者になる筈だった主婦を殺害した日だ。

人間の記憶は不思議なものだな。

理性では必要ないと思っている出来事すら記憶として記憶野に溜めこみ、その出来事が鮮烈で印象深い事であるほど色濃く記憶してしまう。

序

強烈な血の赤色に染められた六年前の11月15日のように。

高層ビル郡が建ち並ぶ都心部から降り注ぐ人口の白い光を受けながら疾走するハイエース。

ほぼ無音の車内に響き渡るカーラジオに駆り立てられる様に、纏いは記憶野の奥に睡る記憶を脳裏に引き寄せていった。

*

まず初めに感じた感覚は割れそうになるほど強烈な頭の痛み、そこから目を開けると霞みかかった視界と全身にのしかかる倦怠感が自身の全てを支配していた。

「うつ……」

それから数秒後、腹筋周辺の鈍痛と胃の内容物がかき混ぜられた事によって発生した不快な気分により、短い呻き声が覚醒しきっていない聴覚にこだました。

不敵に笑う大男の太木の様な腕が拳を放った瞬間。

腹部に走った、内蔵を破壊するほど大きな衝撃。

ホルスターから放たれた死を運ぶ黒い鋼鉄の塊。

そんな中で急速に脳裏にフラッシュバックした数刻前の出来事に、
どうやら記憶だけは正常らしいな、と俺は一先ず胸を撫で下ろし、
頭痛が残る頭に手をやりながら状況の把握に力を傾ける。

コンクリート製の壁に貼り付けられた真っ白な壁紙に包まれた四畳
半の部屋に、よく一般企業で使われそうなありふれた執務机に自分
が座っている椅子、俺が意識を戻した場所は異様に殺風景な一室だ
った。

まるで何処かの留置所や収監施設の様なその部屋に存在する三十セ
ンチ四方の曇りガラスは六本の鉄格子で覆われ、外界との繋がり
殆どを奪い取っている。

そんな中で唯一、部屋と外界との繋がりを保持させていたのは執務
机の後方に位置するドアだった。

普通の住宅で使用される木製やプラスチック製のドアと違い、冷た
く硬質な金属元素で構成された重厚な扉は、やはり刑務所や留置所
といった収監施設を連続させる。

更にその異様な威圧感を放つ扉は俺に数刻前耳にした大男の言葉を
思い出させた。

“お前は殺人犯として服役する義務を免除される代わりに防衛省の
非正規戦闘員として兵役のような物が科せられる”

数刻前に耳を貫いた鋭い大男の言葉、そこから考慮すれば目の前に
存在する硬質な扉は防弾性能や耐衝撃性能を考慮したうえで設置さ
れたものだろう。

そこから更に、自分が隔離されているこの施設を詮索しようとした俺だったが、その行動は無駄だという事がすぐに分かった。

何故なら、鋼鉄の扉を一枚隔てた先からでもこちらに歩いて来る機械的な足音がはつきりと耳に聞こえたからだ。

恐らく現在聞こえている足音は先程俺と対峙した大男の物、そうであれば自分を隔離した彼は俺を追った理由や現在の所在地を話し始める筈だ。

それならいちいち余計な詮索をする必要はない。

そう自分に言い聞かせた俺は、痛みは少し衰えたものの未だに脳髓を刺激する痛みに悩まされながら鋼鉄の扉から目を執務机の中心に向け直す。

その直後、規則的に聞こえていた足音が消え去りパソコンのキーボードを叩く様な音が聞こえてきたと思ったのはつかの間、直ぐにそれは電子ロックの解錠音と金属が僅かに軋む音に姿を変えて行った。

「入るぞ」

短い考察の後に聞こえてきた野太い声、その声の主を知らながらも先程前に向き直した体を後方に向ける。

「なんだ、さっきと比べて随分とおとなしくなったな」

そこにはやはり、数十枚にも及ぶ書類とボールペン等の筆記用具の類が入っているであろう革のケースを手にした厳つい顔が悠然とした目で此方を見据えていた。

「まあ、気絶から意識が戻って間もないから仕方ないか」

一体誰が気絶させたと思っているんだ……

口元を緩めながら執務机の裏手に回る大男、自分と違い余裕に満ち溢れている彼にそう言葉をぶつけてやりたかったが、あの時の俺にはそんな気力は残されておらず、精々横目で睨みつける事で手いっぱいだった。

そんな本調子ではない自分をよそに、大男は手にした書類の束とペンケースを雑に執務机の上に放ると何処からともなく、いや執務机の裏に立て掛けてあったであろうパイプ椅子を開き、巨大な体軀をそれに鎮座させる。

序

「さて、纏だつたかな。さっきは手荒い方法を使って悪かった、一先ずそれについて謝っておこう」

巨体を鎮座した後、大男は悠然とした表情を崩し、そう言いながら申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

その行為は恐らく俺の心情を少しでも落ち着かせるために行った表面上の行為だろうが、二、三秒後に上げられた大男の顔からはしっかりと謝罪の念が滲み出していた。

「曇りガラスと鉄格子、それに電子ロックの掛けられた鋼鉄製の扉。さしずめこの部屋は防衛省内部に設けられた収監施設といったところか」

頭を上げた後に脇に放られた書類の束を掴み手元に引き寄せる大男、彼が思うよりずっと冷静な理性は謝罪以外に何も語り出そうとしない長身に一瞬の詮索で得た答えをぶつける。

「状況の飲み込みが早いな」

そんな俺の言葉に対して大男は少し驚いたような声色で返答を寄こすと同時に、紙の束の中から一枚目の書類を執務机の上に滑らせた。

「そう、お前の言う通りこの部屋は防衛省内に設けられた収監用の一室だ。まあ、俺の様な限られた人間しか知らない施設だがな」

更にそう続けた大男は読めと言わんばかりに人差し指を俺の目の前で静止する書類に向ける。

大男の指示した通りに、俺は目の前の書類を手に取り細かな文字で構成されたその文書に目を向けた。

書類上部には細かな文字、そして下部には氏名と捺印を押す枠で構成されていたそれは何かの同意書にしか見えなかったが、目を配ったのは最上段に書かれている書類の名目と、そこから数行読み進めた先にある規約の一文だった。

P S F 加入同意書。

書類上部に色濃く印刷された何かの略称であろう三文字のアルファベット。

そして……。

「入隊者は戸籍上の記録を完全に抹消され、入隊以前に関わっていた全ての人間との関係を失う」

数行の文で構成されていた入隊規約の文章、その中で最も鮮烈で強烈に脳裏に食い込んだ一文、それに少しの動揺を覚えた俺は強張ら

せた表情を一瞬崩し、思わずその一文を口ずさんでいた。

戸籍上の記録を完全に抹消し、家族や親戚、親友との繋がりを完全に断ち切る、そう理性に投げかけた無機質な文字が望む事はただ一つ。

今まで歩んできた人生を抹消し、それに後腐れを作らず新しく特殊な人生を歩む人間を生み出す事だ。

自分がトカレフの銃床で殴られ、意識を失う前に大男が話した簡単な防衛論、核抑止力消失の可能性、そして現在進行形で構成を進める“新しい抑止力”。

まだ記憶に新しいそれらの情報と自身の目に映る文字を考慮すれば、この同意書と腰に可動式の金具で取り付けた携帯灰皿を取り外す大男の言いたい事がすぐに理解できた。

「つまり、自衛隊より装備と戦闘能力で上回っている特殊部隊、
“新しい抑止力”に俺を取り込む。そういう事か？」

狭い収監室に響き渡った冷静な声、それにより携帯灰皿の蓋をスライドさせる大男の手が一瞬止まった。

なにくわぬ顔で携帯灰皿を取り出し、一服を入れようとした瞬間に響き渡った硬質な言葉。

それにより生じた一瞬の動揺。

まるでそれを境としたかの様に自分と大男が存在している四畳半程のスペースから主旋律とも言える会話が消え、代わりに収監室を取り囲んでいるであろう防音壁が彼との間に静寂をつくりだした。

防衛省周囲を取り巻いている都市の喧騒を遮断する完全防音の収監室。

その中で全く音響を発しようとせず鎮座している椅子や執務机。

互いに沈黙を決め込んだ二人の男がつくりだす音響が消失した世界、それはその空間に存在する者に重圧を与え、口を開く事を許そうとしない。

「少し話をしよう」

だが、実際に凄まじい圧力を誇っていた静寂が収監室を包み込んでいたのは、ほんの数秒の話。

蓋が開き中の吸い殻を露出させた携帯灰皿を執務机の上に置いた大男は、静寂のつくりだす重圧を気にする事なく口を開いていた。

序

そんな彼が放った一言と彼の表情に浮かび上がってきた不器用な笑み、それが俺が先程放った問いの答えだった。

厳つい顔で不器用な笑みは、書類に目を戻し難しい顔を浮かべる俺に対し静かに口を開き、淡々と語り始めた。

「第二次大戦中広島と長崎に落とされた二つの原子爆弾、現代社会における核抑止力の確立はそこから始まった。少量のウラン、プルトニウムから成る原子爆弾は同量のTNT爆薬とは比べられない程の威力で広島、長崎を壊滅させ窮地に立たされているにも関わらず降伏を申し入れようとしないうちに日本の首脳陣に対しての決定打を発揮した。米国が投下した二つの怪物は膨大なエネルギーで人間、建物を溶かし尽くし、発生させた爆風で都市に大きな爪痕を残した挙句、自身の持つ放射能という見えない病原菌で生き残った人間を片っ端から殺しにかかった。そんな事実から日本国民、いや全世界の人類に戦慄を与え同時に根絶を願われている核兵器だが、終戦後の列強各国からすれば相手国に圧倒的な損害を与える超兵器、つまりは全世界を支配しかねない究極の力だ。大戦後の世界を二分した、アメリカ合衆国を盟主とする資本主義・自由主義陣営と、ソビエト連邦を盟主とする共産主義・社会主義陣営はその究極の力を研究し威力を更に高め、確実に仮想敵国を叩き潰せる量を揃えにかかった。これが歴史上で冷たい戦争と言われているアメリカとソ連の大幅な軍事拡張だ」

そこで大男は話を一度切ると、ポケットからまたもや煙草の箱とラ

イターを取り出し、火をつけた煙草を口に持つていく。

「核兵器の研究、増産を皮切りに朝鮮戦争やベトナム戦争を引き起こしたアメリカ合衆国とソビエト連邦、その対立は戦力増強を繰り返す毎に深まり、ソ連の大型爆撃機をアメリカのジェット戦闘機が執拗に追い回す事も珍しくはなくなった。そんな中、戦争で破壊された戦車、戦闘機の修理や、これから前線に送りだす兵器の製造をアメリカは敗戦から復興に向かい始めた日本に一任した。それにより、まだ復興途中にあった日本は高度経済成長を迎える糸口である朝鮮特需が起こり、経済水準が凄まじい勢いで戦前レベルまで回復した。そんな事実もあり冷戦は対峙する二対の戦闘国家に大きな利益と技術革新をもたらす筈だった。しかし、実際には大幅な軍備拡張による莫大な資金によりソ連とアメリカは徐々に疲弊し、最終的には冷戦に終止符を打つに至った。これが何故だかわかるか？」

二都市に落下した巨大なエネルギー、その威力に目を付けた二頭の巨人、対峙する戦闘国家と巻き込まれる隣国、そして冷戦の終了。

長口舌の中で不意に投げかけられた問いに対し脳裏の中で今まで聞いた複数の単語を反芻する俺が答えを考え出す時間はそう長くはなかった。

「簡単な事だ、普通、戦争という物は兵器の膨大な需要と供給を繰り返す事によって生まれる特需景気、更に戦勝国は敗戦国から賠償金や領地を奪う事により人員や兵器の損失を埋め利益をつくりだしている。だがソ連とアメリカ間で起きた冷戦は核兵器を基幹とした軍備の増強による国庫の損失に対し、主要な戦争は朝鮮戦争とベト

ナム戦争くらいしか見当たらない。つまり供給ばかりが先走りして生産した兵器を消費する事が無いうえに戦争による収入が支出より明らかに少ない。そんな状況では膨大な支出を伴う冷戦は続けられないだろう」

先の問いかけから数刻と経たない内に返された返答、それに対し大男は再び歪めた口元から煙草の白煙を噴き出しながら、その厳しい顔でこちらを見据えていた。

「成程、ご名答だ。お前の言う通り冷戦は互いに張り合い軍備を増強させるだけで実際に行われた戦闘は二度行われた世界大戦には到底及ばない。これにより需要と供給、戦闘による損失の関係が完全に崩れ、対峙する戦闘国家は需要と供給だけが先走りするバランスが崩れた状態をつくりだしてしまった。更に両国の頭を悩ませたのが核兵器の移送手段の開発だ。旧世代の核爆弾はマサチューセッツ工科大を出ていない普通の工業大学生でも設計図と材料さえあれば製作可能という簡易的な代物だったが時代が進むごとに小型化が進み、1950年代には単座の爆撃機に搭載可能なまでに小型化された。しかし、当時のソ連とアメリカは核兵器こそ持っていたものの核兵器を相手国上空に運搬する手段は、攻撃目標に選定されやすい空港から離陸し、戦闘機の直掩がなければ対空戦闘能力が無に等しく目標到達時間が必然的に長くなる大型の爆撃機での投下しかなかった」

序

「第二次世界大戦後よりも機体の剛性や速度が上昇しているとはいえ長距離を移動し目標に核爆弾を投下して戻ってくる爆撃機には戦闘機の直掩はつけれないし、航空技術と同様にレーダ技術も向上している訳だから攻撃されていない飛行場、又は海上の空母から発進したとしても敵国のレーダーに機体が探知されれば瞬く間にジェット推進の迎撃機が飛来して機体ごと核爆弾が撃ち落とされる。それは一撃必殺を前提とする核兵器にとって大きな問題であった。いくら強力な兵器であっても敵国の上空に到達しなければ粗大ゴミの価値にすら満たない。その事を理解していた両国が、安定した核の輸送手段を探し求めて目をつけたのが第二次世界大戦中ナチスドイツで開発・運用が行われたV2ロケットだ。強力な推進力で大気圏を突破し宇宙空間までその巨体を上昇させるロケット。それを応用すれば大気圏飛行を行い、戦闘機の迎撃を受ける事無く敵国上空に迅速に核爆弾を送り届ける事が出来る。すなわち核爆弾搭載の弾道ミサイルと登場だ。ロケットに小型化された核爆弾を搭載する事で生まれた核弾道ミサイルは非常に的確で優秀な核攻撃方法として当時の大国に受け入れられた。何故なら発射後凄まじい速度で大気圏まで上昇し、その後、慣性を利用しながら高速で目標に突入する弾道ミサイルは迎撃が非常に困難であり、更に迎撃率が非常に低いからだ。そういった優れた面をいくつも見せる核弾道ミサイルは冷戦が生み出した最大にして最高の兵器だと言えるが、いくつかの問題を抱えていた」

そこで話を切った大男は三分の一ほど吸った煙草を携帯灰皿の縁で軽くはたく。

「核爆弾自体はモノさえ選ばなければ普通の工科大学生にでも製作できる。だがその核爆弾を小型化したり派生させて行くには巨額の研究資金を必要とするし、核を搭載する弾道ミサイルや原潜の維持費や老朽化した装備の更新費もその中に含まれてくる。具体的な核戦力の維持費は国家機密だが恐らく年間数兆単位の軍事費を必要とするだろう。そんな極めて手がかかる核兵器を相当数揃えていたら国庫の負担は莫大な物になり、財政破綻までは行かなくても国庫の占める軍事費の割合は相当な物になる。この事からアメリカとソ連間に生じた冷戦が終結した陰には膨大な軍事、核軍備拡大による国庫の負担が両国にのしかかっていた事がわかる。だが、そんな国庫の疲弊を度外視してまで両国は核兵器を量産し続け、大量の弾道ミサイルや核搭載原潜の製造を行い、今日では核実験を成功させ核兵器を保有するに至った国は八ヶ国に増え、さらに核兵器の保有疑惑をかけられている国まで出てくるようになった」

大男の話す様に、核兵器を保有する国は年々増え、当時でも北朝鮮やイラクの核保有疑惑をメディアが報じたりもしていた。

国内の貧困を度外視したとしても核開発を続ける北朝鮮や、冷戦時に核兵器が大量生産された事実、そして現在も外交から抑止力にまで多大な影響を与える核弾道ミサイルの存在を考えれば、資金面の問題を差し引いたとしても釣銭が戻ってくるほど核は優秀な兵器だと理解できる。

しかし、一度話を止めて煙草を吸う事に意識を傾けた大男を見据えていた俺は一つの疑問が頭に思い浮かんでいた。

核兵器は小国ならば一撃で敗戦まで持つていく凄まじい威力と後に

残る放射能の影響で生物を焼き尽くし、広大な不毛の地を創りだすほどの力を秘めているし、開発や保持に莫大な資金を必要とする弱点も持っているが保持しているだけで外交面で役に立つカードにもなりゆるなど、軍事的な利点の他に政治や外交にも大きな影響を与える事が出来る。

だが、あの時機に置かれていた一枚の書類、“新しい抑止力”へ参加する為の同意書は核抑止力を完全に否定し、それに代わる新たな抑止力の可能性、すなわち対人、対陸上兵器戦に特化した特殊戦闘部隊が核兵器の与える影響を超えるというこの国の見解を表わしていた。

核兵器もそうだが自衛隊より装備と戦闘能力で上回る戦闘部隊の創設、恐らくそれは当時、いや現在の日本の置かれている立場からしても到底無理な話だ。

第二次世界大戦終了後、天皇の立場を守るかの様に武力抵抗と軍事的抑止の撤廃を盛り込んだ日本国憲法を施行し、世界一平和的で同時に他国に蹂躪される可能性を飛躍的に上昇させた日本。

序

今でもその“一国平和主義”を守り続けるこの国は、自衛隊の装備一つでメディアが大騒ぎし、今まで通りの平和な生活が永遠に続く信じ込んでいる国民は政治に目を向けようとしないし、世界情勢を知らない熱心な似非平和主義者は頑なに今の体勢を守ろうとし、他国へ対して唯一の防衛力となる自衛隊の装備すら縮小を訴えている。

百歩譲って秘密裏に自衛隊を超える戦闘部隊の創設や核武装を進めていたとしても、その事が外部に漏れればメディアやインターネットから情報が電撃的に伝わり、世論は大いに荒れ、国会に法案を持ちだした者は軍国主義者と揶揄され煮えたぎった世論は政府を一挙に倒しにでるかもしれない。

そのような大きく同じリスクを被るなら自衛隊と別に特殊戦闘部隊を新設するよりも核武装を施した方が他国の軍事水準により近づく事が出来る。

それなのに何故、この日本という国のトップ達は核兵器より特殊戦闘部隊を選んだのか。

「このように純粋な破壊力に優れ、価格の面に問題があっても的確な外交に与える多大な影響などの価格に十分見合う能力を持っている事により一見使い勝手の良い風に見える核兵器だが、実はその裏には一つだけ大きな問題が存在している。」

軍事や世界情勢に関しての知識を専ら親が二人で食事をしてる中、一人離れた所から何となく眺めていたテレビのニュース映像から取り入れていた、まだ幼かった脳裏に浮かび上がった疑問。

吸いきった煙草を携帯灰皿に押し込んだ大男が次に持ちだした話題がその疑問の答えとなっていた。

「それは核兵器が抑止の為に存在している兵器だという事だ」

核抑止力という平和を維持する為の最悪なシステム。

ナイフを叩き落とされ丸腰で大男と対峙した時に聞かされた彼の言葉が不意に脳裏に脳裏をよぎったのは、恐らく核兵器という人類の開発した兵器史上、最強で最悪の兵器が平和を保つ一端を担っていた事が幼い自分にとって衝撃的な事実だったからだろう。

でもそれは仕方がない事なのかもしれない。

社会や歴史の教科書に載っている屋根を吹き飛ばされた広島県産業奨励館や、膨大な熱量で溶かされた皮膚が流れ落ちる悲痛な人間の写真、それらをつくりだした元凶である核兵器という強大な悪魔が世界の中心となっている大国に渡り互いに牽制しあう事で、仮想敵国の兵士に小銃で撃ち抜かれる事も、空爆で焼き尽くされる事も無く平和な日常を送れている事実を知れば誰でも嫌気や衝撃が走る物なのだろう。

何に関しても冷静で怜悯な目に対応していた俺でさえ、寒気と衝撃が同時に全身に進ったのだから。

「通常、兵器という物は敵となった目標を殺傷、破壊するためや、敵の攻撃から防御するための機械装置として存在している。その為、各国は他国よりも優れた兵器をつくりだす為に国内の技術の粋を集め、より強力で扱いやすい銃や、より高速で飛行できる戦闘機を開発し戦線に投入してきた。このように、兵器とは戦闘に参加して多くの人間や兵器を殺傷する為に常に進化し、存在意義を世界に見出させている。それに対して核兵器はより威力を求める事や使い勝手の良い兵器に進化させる事では無く核を持っているという事実に存在意義ができる。何故かという、どんな形でも良いから敵国に持ち込み起爆すれば多大な損害を与えられるという核兵器の特性上、たとえ旧式の核爆弾しか保持していないとしても、それだけで世界各国に十分な恐怖と警戒心を与える事が出来るからだ。つまり、核兵器はどんな形でも良いから物と移送手段を整えれば敵国を滅亡まで追いやる事の出来る巨大な力として存在できる。そうなると核兵器を持った国を危険視した他の国はその国に対してどのような態度をとるべきか」

携帯灰皿の蓋を閉めつつ放った大男の問いは、今までの話を聞いていれば知識の無かった俺でも容易な事だった。

「核を持った国に対抗する為に自国も核を持つ、そういう事か？」

目には目を、歯には歯を。

かつて古代の文明に存在した法律がそうであったように、相手と対

等な位置関係をつくりだすには自分が相手と同じ立場までのし上がるか、優位に立っている相手を自身の基準まで引きずり降ろすしか方法が無い。

つまり、核兵器を超える力がこの世に存在していない以上、核を持つ国家に対抗するためには自身が核兵器を持つしか方法が無いのだ。

序

「正解だ。現在、核兵器を超える破壊能力を持った兵器はまだ開発されていない。その為、核兵器に対抗するには核兵器を開発し、配備する事により『お前が核兵器を撃つたらこつちも核兵器をお前の国に向けて撃ち返すぞ』という明確な意思と実行力を示す方法が、核に対抗する術の中で非常に高い効果を持っている。実際に現在の核保有国の全ては核兵器を使用せず開発、実験、配備を行う事で互いに圧力をかけ牽制し合う事で均衡を保っている。こうして互いに核を持つ事で相手の核兵器を封じる事を核抑止力と一般的には呼んでいる。人類を滅ぼすかもしれない力を互いに持つ事で国家間の戦闘を防ぐ。一見、下手をすれば核戦争という最悪な結末を生み出しかねない核抑止力だが、核の力を超える物が無いという現在の科学力の実情、核が誇る破壊力と災厄の権現である放射能、何より歴史上に大量破壊兵器を用いた最悪の殺人者と名を刻まれ、言葉や肌の色こそ違うが大量の人間を一瞬で殺害する事を考えればどんな平和論よりも核抑止力の方が確実に国家間の調和がとれる。そんな事実もあり、核兵器で核戦争を抑止するという考え方は全世界に広まり、現在の核保有国は自国の核保有を正当化する事になった。だが、先に話した通り核抑止力には大きな弱点がある」

そう述べた大男は一度そこで話を切り、咳払いをして喉の調子を整えると、少し難しい顔をしながら話の続きを語りだす。

「まず一つ目の弱点としては敵国の先制攻撃で自国の報復能力が失われた場合だ。例えば二つの国家間の関係が非常に劣悪になり、A国がB国に向けて核弾道ミサイルを発射したとしよう。普通なら弾

道ミサイルは様々な迎撃を受けながらも大概は撃墜される事無く敵国で起爆する。そうした場合、B国がとる行動は核抑止力に基づく。とA国に向けて報復としてミサイルを撃ち返すという事になる。しかし、A国の核弾道ミサイル攻撃でB国のミサイルサイロや核搭載原潜、ミサイル基地が全て破壊されてしまえばB国は完全に反撃能力を失い、敗戦する。この様に核抑止力というのはこちらが核を撃てば相手も核を撃つという互いに牽制し合う事により核戦争のリスクを最低限まで下げて、核戦争が起こったとしても両国で使用される核の量を抑制する効果があるが、どちらか一方が報復能力を失ってしまうえば核抑止力の意味は無くなる」

そこで再び話を切り、少しの間黙りこむ大男。

それを不審に思った俺は煙草を吸う事無く普通に椅子に座りこんでいる彼に目を向けた。

路地裏で対峙した時から嫌というほど目にしていた厳ついヤクザのような顔と無骨な骨格はそのまま、安物のパイプ椅子に納められた不釣り合いな体躯の動きからも特に変わった所は感じられず、俺はただ意味も無く話を切っただけかと視線を再び適当な位置に戻そうとした。

だがその時、難しい表情を浮かべている大男の顔、その中で不自然に底が揺れ動く瞳に気付いた俺は、後ろの無機質な壁に向けようとしていた目で、彼のその瞳の奥を注視した。

厳つい面構えの中で不自然に揺れ動く眼球の根底。

そこには自分が次に発しようとしている言葉に対する動揺、いや、

どちらかという恐怖や畏怖に近い感情が滲みでていた。

がっちりとした体躯と厳つい顔、今も腰のホルスターに納まってあるであろうトカレフ拳銃が語っている通り自分より長く特殊な人生を歩んできたであろう大男でさえも畏怖を感じ動揺を押し殺すような言葉を、まだまだ人生経験も知識も足りていない自分が予想出来た筈もなく、あの時の俺は一抹の動揺を必死で押し込める彼に早く話せと目で伝える事くらいしかできなかった。

そんな目に気づいていたのか、そうでないのか分からなかったが、俺が視線を適当な位置に戻した頃には大男は数秒の沈黙を自らの声で破っていた。

「そしてもう一つの弱点、これは現実に起きたとすれば世界のパワーバランスが完全に崩れ、抑止力の全てを無効化した後に大規模な戦争が起きる事になるだろう。鮮烈な威力を持つために忘れがちだが核兵器は既に半世紀前の兵器となっている。現在も核兵器は兵器の頂点として君臨しているが、その間も技術の進歩と革新は続いていて、光学兵器、つまりは収束した光で弾道ミサイルを迎撃する実験が行われたり、艦載砲として電磁砲の搭載が検討される時代となってきた。木を削り出した棍棒や黒曜石を加工した石器から鉄を溶かしこんで製造された刀剣、その鑄造技術に火薬が相まって銃や大砲が生まれたように技術の進歩と革新は必然的に現存する兵器を古い物へと変えてしまう。無論、今現在辛うじて王座に鎮座している核兵器も例外ではない。冷戦時のアメリカ合衆国に約二万七千発も存在していた戦略核兵器だが、現在はだいたい六百発弱にまで大幅に削減されている」

序

「これは冷戦により疲弊した国家予算で巨大な核戦力を保持しきれなくなった事や、世界が核兵器廃絶を訴え始め、核保有に関するさまざまな条約が生まれた事が理由として挙げられるが、この国の首脳陣は核軍縮が進み始めた主たる理由をそうは考えなかった。何故なら核兵器という世界のパワーバランスを握る強大な力、戦争を抑止する力となりうる兵器をそう簡単に手放したり削減を行う訳が無いからだ。そうにも関わらずアメリカやロシアなどの核兵器を大量に保有する国が核廃絶に向けて動き出したり、今まで開発を行っていた国が急きょ開発を取りやめるのには必ず裏がある」

沈黙を破った大男の声色は重大な事実を俺に伝えようとしていたせいか、トーンが少し落ちていているように聞こえていた。

しかし、彼の芯の通った声はまだ健在で、どすのきいたそれは確かに俺の耳に届き、自分に世界各国が行い始めている核軍縮について考えさせていた。

大男の話した通り、核兵器は兵器としての威力も外交のカードとしても非常に優秀で、いくつか数えられる問題点を考慮したとしても他国に大きな力を誇示できる事は変わらない。

それにも関わらず、核兵器が廃絶に向けて歩み出したのは、日本への原爆投下や冷戦中に幾度も行われた核実験が国際世論を動かし、核廃絶を訴える人間たちが核保有国の首脳陣を動かしたのか？。

いや、それは否だ。

核兵器は互いに保有する事で牽制し合い核抑止力を生み出して世界の平和を保つ一役を担っている、核兵器を保有したい国の首脳は国民に対し「核兵器は仮想敵国との間に抑止力を生み出し、仮に核戦争が起こったとしても被害を最小限に抑える事ができる平和を保つ手段だ。それに、歴史上に核兵器を使い世界を破滅へと導いたゴミ野郎と名前を刻まれない人間などこの世にはいない」と主張すれば、核保有におけるある程度の正当性は認められるだろう。

その事を考慮すれば平和を望む人間たちが核保有国の首脳陣を揺り動かし、核廃絶に向かわせたとは考えにくい。

だとすると、核廃絶にあまり乗り気ではない核保有国と核廃絶を求める人々、両者の利害が一致した所に核保有国が核廃絶に賛同した理由が隠されている。

核を手放したくない核保有国を核廃絶に向かわせる要因……。

「核保有国が核廃絶を掲げ、自国を守る鎧でもある核を削減する理由であり、核抑止力のもう一つの弱点。それはもしかすると核保有国が核兵器を超える“新しい抑止力”の出現を危惧したからではないのか？」

本来なら核廃絶に非協力的になる筈の核保有国が核廃絶に乗り気になる理由、それを考え始めた瞬間、数刻前に話した大男の言葉が稲妻のように頭の中を駆け巡り、今まで頭の中ではばらばらに飛び交っていた情報のかけらが一つの確立した答えとなっていた。

「核兵器の廃絶、それは核保有国にとって非常にリスクの高い行動だ。何故ならとある国家がもし核戦力を縮小、または廃絶するとなれば自国と核保有国との間にあった核兵器で牽制しあうという関係は完全に崩れ、もし外交的、軍事的に核保有国と対峙する事になったとしても自国を守る手立ては無いからだ。でもお前の言う通り世界の軍事力や技術力は不変の物では無く、時が進む毎に世界各国の技術者たちは新しい技術や兵器を生み出している。つまり、核保有国はおよそ半世紀前の技術が生み出した最高の兵器である核兵器を超える兵器を現在の技術で製造可能と予測し、それを製造するために半世紀前の遺物である核兵器を廃絶に向けた。これを国民に核無き世界の実現という形で核に代わる兵器の開発に関する事を伏せて発表すれば平和主義者だけでは無く一般市民からも多くの賛同を得る事が出来る。そうする事で政府の利害と国民の望みの向く方向が一致すれば核保有国が核廃絶を唱えてもおかしくない」

まるで身を乗り出すかのように大男に向けて自身の考えをぶつけた俺、今考えればあれほどまでも自分の感情をむき出しにして話したのは歩んできた人生を省みてもあれが最後かもしれない。

別に特段、国防や核抑止力等の軍事論に関して興味があつた訳ではない、恐らく限られた情報を組み立てて自分なりの考えを出すという、それまで生きてきた中であまり体験する事の出来なかつた行動と答えを出す事で感じられる達成感、それらが冷静であろうとする理性を黙らせて、それまで何事に対しても斜めに構える事を決め込んでいた小さな体躯を突き動かしたのだろう。

そんな俺の考えに対し、聞き手となった大男は「驚いた。必要な情報は与えたが、そこから答えが出せるとはな」と眉を吊り上げ少し

驚いた様子を見せながら低い声を返していた。

序

「お前の言っている事は正解だ。この国の首脳陣は核保有国が核を削減するという事は核を超える兵器の開発が既に構想、実験段階という実用可能という判断が出せる段階に來ていると考えた。もしそれが実用化まで漕ぎつけたとしたら全世界で牽制し合い平和を保っている核抑止力の関係が完全に崩れてしまい、“核を超越する新兵器”を保持した国が全世界の覇権を握ってしまう。“核を超越する新兵器”を保持しているのなら、それを敵対する国家に撃ちこんでデモンストレーションしてしまえば全世界に核を超える兵器の存在を脅威としてアピールする事が出来るのだからな。半世紀ほど昔に起きた広島と長崎に対する原爆投下の時のように。軍事大国であるアメリカやロシア、高い技術力を誇るドイツ、急速に工業化と軍事化を進める中国、そして、物事を水面下に隠し通しながら計画を成功させる隠密性を持つ北朝鮮。これらの国にかければ核を超越する脅威となりゆる兵器の創造と開発にはそれほど時間を要さないだろう。それらの国に対抗するには日本も核を超える新兵器の開発に取り掛かるべきなのだろうが、残念ながら戦争の放棄と交戦権の否認、さらには戦力の不保持をうたった憲法9条という枷が存在している限りよほど秘密裏に事を進めない限り新兵器の開発は不可能だし、開発が他国に漏れたとすれば中国や朝鮮は勿論の事、新兵器開発を目論む国々と国内世論から総スカンを食らい、新兵器開発を断行した政権は倒れ、国内は大いに乱れるだろう」

核という軍事国家が互いに牽制する為に必要不可欠なピース、それぞれの国の防衛論を考えればそれを簡単に廃絶に向ける筈がない。

それは、核が現状で判断すれば最高の戦略兵器である事が理由とし

て考えられるからだ。

たとえ調達した物が旧式の核兵器だったとしても移送手段が確立してしまえば全世界の国々に自国の真上に核の炎が降り注ぐという純粹な死への恐怖を与える事が出来る核の兵器的な特性上、現在開発されている迎撃兵装の迎撃率が低いうちは、核に対抗するには自国も核戦力を持つ他方法はない。

だが、今現在でも核の削減は続いている。

その要因としては核の高性能化で大量の核を保有する必要が無くなった事や、そもそも核保有国に巨大な核戦力を保持する為に割く軍事予算が少なくなった事、核を嫌う国民と核廃絶を求める組織が増え、それに対し核を制限する条約の締結を決断する他なくなった世界情勢が挙げられる。

でも、それらが全世界の人々や軍事評論家たちが勝手に導きだした幻想だとすれば話は大きく違ってくる。

核という巨大な力を廃絶に向けるという事実、それを国民に公表すれば核保有は平和を保持する事ができると核抑止力を信じる一部の国民以外は核廃絶に賛成する事だろう。

巨大な力を捨てるという事実で世界の平和に本気で貢献していると考える国民と、核を捨てて平和な世界を創りだすという事を目標に掲げる国家体制を作りだす事ができれば、核廃絶という事実国民を酔わせる事に成功すれば核廃絶というハリボテの裏に醜惡な事実を隠す事ができる。

それはつまり、核戦力を削減しているという一つの結果だけを国民

に見せておけば、例えそれが虚偽だったとしても国民に信じ込ませる事ができるという事であり極端な話をすれば核廃絶という事実を見せて裏で行っている事を漏らさない絶対的な自信さえあれば、核廃絶とは裏腹に核戦力を増強する事や、核より最悪な能力を持つ新兵器の開発を進める事もできるという事なのだ。

“ 大衆は、小さな嘘より大きな嘘にだまされやすい。”

“ なぜなら、彼らは小さな嘘は自分でもつくが、大きな嘘は怖くてつけないからだ。”

独逸第三帝国に突如として出現し、圧倒的なカリスマで独裁者として君臨したアドルフ・ヒトラーがそう述べたように、小さな嘘はすぐに発覚するが、大きな嘘はいずれ真実になる。

半数以上の人間が虚偽を支持すれば残り半分の人間が納得してしまう、一人ひとりが考えを確立できず周りに流される日本のような国家は特にその性質が強い。

そんな事実もあり、この国でも秘密裏に核武装や新兵器開発を行う事が可能だと思うが、そこで問題になってくるのが世界中から派遣されて来る各国の間諜^{スパイ}である。

序

真実を見極める国家首脳陣と名の頭脳、それに判断材料となる実像を送り続ける眼球である彼らに、核の調達や新兵器開発の情報が渡ればどうなるかは大体予想がつく。

情報の公開、過剰戦力への問題視、そして国連での決議、予想される事は全てが最悪な結末。

さらに、日本の場合はそれだけでは済まず、憲法9条という戦力制限の足枷がある以上、情報を公開された場合の他国からのバッシングの嵐の他に、平和が当たり前になった国内からの痛烈な批判はこの国を根本から揺さぶり、政権を持つ与党は当然の如く退陣を余儀なくされるだろう。

「そこで、この国の首脳陣は新兵器を新しい抑止力とするのを諦めて、そう遠くない未来に開発される筈のそれに太刀打ちできる別の抑止力を模索し始めた」

そう言った大男は、執務机に置かれた書類の束の一番上にあった新たな書類を手に取ると、それを俺の方に向けて滑らせた。

「そうして政府が苦悩の末に考え出した核兵器に代わる“新しい抑止力”、大量破壊兵器といった巨大な力と違い、小回りや機動性、対応力に重点を置いた特殊な戦力、それがSpecial personal fighting forces、特殊対人戦闘部隊

だ」

書類を受け取り、それに軽く目を通す前に放たれた大男の言葉により、数刻前に渡された同意書に印刷されていた何かの略称であるSPFという三つのアルファベットの意味、そして、それが国防という巨大な組織の中でどのような役割を担うのかが一瞬で理解できた。

「この対人特殊戦闘部隊は自衛隊とは別に対兵士、対陸上兵器戦を想定して新設された部隊だ。全国から資質のある者を選抜し、一人の適性に合わせた戦闘兵育成プログラムを与え、一人の確立した兵士を作り出すのがこの部隊が新設された目的だ」

渡された二枚目の書類、この国の“新しい抑止力”となりゆる特殊戦闘部隊について簡易的な概要が書かれた紙に大男の話を聞きながら目を通していた俺は、下方に書かれていた入隊資格に目を向けていた。

「入隊資格は三つ、まず年齢が18歳以下である事、これは人体の持つ能力を最大限まで引き出す為にできるだけ低年齢の内から技術を叩きこんだり体力強化を行う必要があるからだ」

「次に二つ目は社会に後腐れが無い事、つまりは両親が存在していないかったり、町のチンピラやヤクザの下足番として生きている奴の方が社会との関わりが少なく、社会から隔絶された部隊の情報を漏らす事が無いので、他国の間諜や国民に存在を悟られにくいという利点がある」

と言った所で、大男は再び携帯灰皿のスライド式の蓋を開け、煙草を箱から取り出すと今日で数回見たジッポライターでそれに火を点けた。

そんな大男の姿を、俺は「また煙草か」と呟きながら横目で見ると、特殊部隊の概要が印刷された書類に再び目を戻した。

「そして三つ目、自ら凶器又は暴力を使い人間を殺した経験がある事だ。先程も話したが、これは対人戦闘を行うにおいて最も大切な資質だ。何故なら連続した対人戦闘を行う事が予測される部隊では人を殺した事によるシヨックでの精神的な影響は大敵だからだ。錯乱状態で他の構成員に向けて射撃してしまえばそこから綻びが広がって部隊の戦闘力を落としかねないからな」

自衛隊より優れた装備を与えられ、より確立された戦闘能力を持つ人間を作りだす事や、存在そのものが隠匿されている組織である部隊の情報を外部に漏らさない為には大男の話す入隊規約は理に適っていた。

人間の体力は20代でピーク値を迎え、そこからは緩やかに体力が落ち込んでゆく。

その事を考えれば若いうちから体力を鍛えるにこした事はないし、戦闘技術を同時進行で叩き込めば有事の際に円滑な対応を見せる事ができるだろう。

それに、自衛隊とは別に新たな戦闘力を新設した事が他国や自国の国民にばれば先程も大男が述べたように、憲法9条という一国平和主義を作りだす元凶ともなった足枷により、新部隊の設立を疑問視する他国と平和を望む国民から圧力や声が発生し、現在の政権は間違えなく倒れ日本国内は大いに乱れる事となる。

それを抑えるのに、社会との関わりの少ない人間を構成員とする事で情報の流出を最低限まで抑える方法は非常に有効なやり方だ。

そして、人の死という精神の根本部分に多大な影響を与える出来事に対し耐性の無い人間を部隊内に置いておけば、いざ有事の際に戦闘に参加した時に精神的ショックで味方を誤射したり、携行武器を使用して自殺しかねない。

序

怜悯で何事にも動じる事の無い、例えば自分が放った銃弾が人を撃ち抜き殺したとしても平静を保っていられる強靱な精神は、人を殺すという“特殊で人の理念に反する行動”においては強靱な肉体や緻密な計算力を差し置いても必要となってくるスキルだ。

「実を言うと、その書類に書いてある入隊規約の全てを満たしている人間は全国をくまなく探したとしてもごく少数しか存在していない。何故なら上記の二項目を満たしている人間なら探せば十分見つかるが、殺人の経験がある人間となると話が大きく違ってくるからだ。存在が秘匿された組織であるがために警察の協力すら求められない俺らは全国から条件を満たす人間をリストアップし、そいつらに人員を送って直接部隊に勧誘したり今日のお前みたいに拉致つて来たりして構成員を増やしている。だが、お前のように政府が定めた三つの条件をクリアしている者は殆ど存在しておらず、仮に見つけたとしても刑事共が既に逮捕した後だったり、人を殺したという事実で精神が崩壊して到底使い物にならなくなってる事も珍しくない」

死に対する耐性という異能ともいえる力を持つ人間、彼らを警察を差し置いて、なおかつ隠密を貫き通して勧誘するのは非常に難しい事だ。

それは、人の死を目の当たりにしても揺るがない精神を持つ人間は絶対数が圧倒的に少ない事が理由として挙げられるが、最も主要な要因は、あの時大男が述べた一見、効率の良さそうでは無い、

耐性を持つ人間の判別方法と集め方にあった。

大男が述べた通りに強靱な精神力を持つ人間は訓練で作りだせる物ではなく、元々精神の強い人間を雇うしか方法がない。

しかし、強靱な肉体や異常発達した視力等の見た目や検査で確かめられる能力とは違い、人を殺したとしても平静を保てる強靱な精神力というのは見た目で判断する事は難しい。

従って、見分ける方法があるとすれば強靱な精神力を持つと仮定された人間に誰かを殺させて経過を観察する事くらいしか無いだろう。だが、自然な環境で候補者に殺人を犯させる事に成功したとしても、殺人が露呈すれば候補者は全国の警察と情報を浸透させる事が身の上のメディア、そしてメディアから情報を受け取った国民の目という三者から追われる事になる。

せめて、警察に流れる情報を統制する事ができればもっと安全かつ円滑に候補者の勧誘を行えるのだろうが、当時、組織としては創設間もない部隊の幹部達は警察関係者、それも相当高位な場所に座っている者とのパイプを形成してる訳も無く、警察に流れる殺人犯の情報を統制する事はほぼ不可能だった。

仮に警察の包囲網を潜り抜けて候補者との接触到成功したとしても、人を殺したという事実を正面から受け止めて自殺を行ったり、部隊への勧誘を断った事により情報を漏らさない為、処理される候補者も存在していた。

これは纏が部隊に入隊してから聞かされた話だが、部隊の創設から今日に至るまで三つの入隊資格を満たしていた者は部隊創設から数

年後に除名された男と纏との二人で、その他の者は全て三番目の入隊資格を満たしていなかったらしい。

異常に優れた嗅覚や視力を持った人間等の常人の規格を圧倒的に凌駕する人間が存在し、調香師などの職業として彼らを企業がバーゲンセールに群がる主婦よろしく争奪戦を繰り広げると同じように、強靱な精神力を持つ人間は少なく、獲得につぎ込む労力も人員も従って多くなる。

平和を気取ってる国の中で彼らを獲得するのはやはり難しく、“新しい抑止力”といえども幾分かの妥協も必要なのだろう。

「そんな中で入隊資格の三項目を全て満たしたお前が転がり込んできた。上層部としてはお前を是が非でも部隊に引き込みたいようだが俺は強制はしない、ここは民主主義の国だから」

そう言つて大男は煙草の灰を灰皿に落とすと顔を歪めて笑みを浮かべて見せたが、黙って彼の話を聞いていた俺は到底笑えなかった。

他国にも、まして自国民にも秘匿されている対人特殊戦闘部隊の存在を教え、その部隊には社会に後腐れの無い者たちが集められている。

そんな事実の中で大男は俺を部隊に誘い、さらに部隊への入隊、“新しい抑止力”へ組み込まれる事を拒否する選択肢も与えてきた。

だが、実際に選択肢として存在していたのは“新しい抑止力”の礎となる選択肢、ただ一つだけだ。

入隊を拒否した候補者を社会に戻す事になれば、その候補者から社会に部隊の情報が漏れる可能性が出てくる。

そうなった場合、P S Fは存在を秘匿されてる部隊という特性上、存在が知れ渡った場合には部隊は壊滅、すなわち構成員の粛清へと直結する事になってしまうだろう。

序

もしそんな中で強引に候補者を勧誘し部隊に引き入れたとすれば、犯人の消えた事件として警察はさらに捜査網の大きさと密度を強化し、遺族側はメディアを通じて国民に犯人確保へ協力を求める事になり、それらが候補者の尻尾を掴まれてしまえば部隊の存在を悟られるのは確実。

憲法9条により戦力を持つ事を禁止されたこの国で、他国の脅威となりうる集団が表に浮かび上がって来たとするれば、まず疑惑の目が向けられるのは一体誰だ？

そう考えた時に真つ先に思い当たるのは国民達に知らせず秘密裏に法案を可決させ、核に代わる“新しい抑止力”を創造するにあたって一番関係が深く部隊の実権を握っているであろう日本というこの国の首脳陣であろう。

ならば、露呈した事実により国民、メディア、さらには他国の国民や首脳陣から疑惑の目を向けられ、真実を求める声を浴びせられたこの国の首脳陣がまず一番に実行しようとする行動は一体何か？

潔く部隊の存在を認める事？

国民や他国に違憲であることを謝罪する事？

自分自身のとった行動の責任をとって辞職する事？

どれも違う、だが答えは簡単だ。

全世界の平和主義者、各国の首脳陣、そして自国民からも疑惑と追及を受け、完全に追いつめられた政府首脳陣と関係者達を選ぶ道。

それは、安全な場所から下界を見下ろしながら巨大な権力を振りかざしていた彼らを選ぶにふさわしい選択肢。

そう、巨大な権力という至高の玉座から一部を除く全人類からの批判という針の筈に引きずり降ろされる事を阻止するべく、彼らが一番に思いつく事は証拠の隠滅、つまりは部隊の存在と構成員の抹消だ。

メディア、国民達がどんなに真実を追い求めたとしても、求めるべき真実が消え失せてしまえば全てが闇に葬られる。

どんなに理不尽な情報操作を行ったとしても、帳尻さえ合わせていれば大概の虚偽は真実へと変化する。

その事を一番分かっている首脳陣は、P S Fの構成員と関係者達の粛清を断行し、部隊に関わる情報を全て抹消するだろう。

勿論、P S Fの構成員も粛清が行われる事が分かれば国家に背く事になったとしても、生きる為に、自分の命を守るために武器を取り、行動を起こす事が予想される。

所詮人間というのは自分の保身に一番力を注ぐ生き物。

どんなに醜い争いになったとしても、首脳陣は至高の玉座を守るため権力を振り降ろし、部隊の構成員は手にした武器と戦闘技術でそれに立ち向かう、正に地獄絵図が日本国内に体现される事になる。

そうなった場合、政府首脳陣もP S F構成員の両者の間に発生するのは不利益という負の連鎖だけ。

そんな、最悪の場合を考慮した政府首脳陣はP S Fに関して最大限の情報統制を行い、またP S Fの幹部達は絶対に情報を漏らさないシステムを考え出している筈だ。

完全防音の収監施設、大男が所持していたトカレフ拳銃。

それらを見てしまえば、P S Fへの入隊を断った者の末路はだいたいの予想がつく。

駄をしても親の思惑通りにいかない子供と同じように、口封じをした候補者に限って部隊の情報をすっかり漏らしてしまうかもしれない。

そのような候補者に完全な口封じをするとすると、方法は二つ。

完全に話す事も考える事もできない廃人にしてしまつか、一思いに始末する事。

その二つで始末する方法が採用されたのは、一生精神病院に收容されるよりも死んでしまった方が本人にとっても楽だと考えた部隊の粋なはからいなのだろう。

それを理解していた俺は、部隊に入隊しないという選択肢を選ぶ愚は犯さなかった。

せっかく自由を手に入れても、みすみすと溝に捨てるような真似をしても意味がない。

それに俺はあの日、自分自身に誓った。

三人の命という大きな負債を踏み倒し、手にした自由で一個人としての生活を取り戻すと……

本来なら服役し、反省の意を表す事で初めて消える罪を、人を殺し、罪を重ねながら踏み倒すのも悪くはない。

椅子の背もたれから背中を離し、執務机の脇にあつたペンケースを手に取り、中からボールペンと朱肉を取りだした俺は、目の前で静止していた同意書にサインし、それを大男へ向けて滑らせた。

「契約成立だ」

サインと自分の指紋がくつきりと浮かび上がった同意書、それを受け取った大男は不意に椅子から立ち上がると携帯灰皿に吸いきった煙草を押し込んだ。

「そついや自己紹介がまだだったな、俺は永川 義人、階級は三佐だ。歓迎するぞ天城 纏一曹」

さらにそう続けて口から息の苦しくなる白い煙をたなびかせた永川は、何故か俺を見て昔を懐かしむような目をしていた。

いや、あれは俺の勘違いだったのだろうか？

序

勘違いだったにせよ、そうでなかったとせよ、あの誓約書を永川に渡した時点で俺は“新しい抑止力”として防衛装置の部品として国家の枠組みに組み込まれる運命が決まっていた。

そんな運命を俺は受け入れ、負債を踏み倒すために今日まで行動を起こし続けてきた。

そして、今日も、歩むべき明日も例外ではない。

俺は、手に入れた自由を行使する為に前へと進み続ける……。

速度を緩めた黒のハイエース、死の執行人を乗せた漆黒の馬車は人気がない歩道を一瞥すると、靖国通り沿いに立てられた一棟のビルの手前で停車する。

車が止まり、全身に軽い衝撃を受けた事でふと我に返った天城 纏、彼は車内の床に鎮座するゴルフバッグを一先ず座席に移動させると、ハイエースのスライド式ドアを一息に開いた。

車内に渦巻いていた暖気を押しのけて侵入して来た、冷たく鋭利な冷気。

それを肌で感じた纏は、自分の居るべき場所は温かく安全な土地では無い事を改めて悟った。

そう、今の彼が存在を許されるのは、冷たく危険な夜の闇の中だけ。

安全地帯から身を乗り出し、夜風の冷気を吸収した凍土のように冷たいアスファルトに両足で立った死の執行人、彼は自身の武器が納められた巨大な鞘を背中に背負うと、ゆっくりと夜の帳の中へと消えていった。

＊

命を燃やしながら輝く夜空の恒星、太陽の光を反射する事によって生まれる月光、それだけが唯一周囲を薄暗く照らすビルの屋上で纏は独り地上を見下ろしていた。

現在の時刻は深夜二時前。

都会というだけあり、たとえ深夜だったとしても数える程の人間と道路には少なからずの車両が存在しているのであるが、纏の見下ろす靖国通りはまるでゴーストタウンのように人の気配も車のエンジン音も聞こえない。

それほどまでに一切の音響がなく、深海のように深い深い静寂が続いているのは、しかるべき機関がこれから“事件の現場”となる防衛省前の交通量を統制しているからだろう。

部隊の創設から十数年ほど経ったであろう今、常に入れ替わってきたPSFの幹部達と警察をはじめとする各機関へのパイプが形成され、今日のように流血前提の任務でも幹部の人間が様々な機関に情報統制を要請できるようになった。

それは、部隊が創設初期に発生した国家の大きなミス、それを当時

のP S F構成員が大規模な作戦を行い完全に闇へ葬った事で、部隊の評判が他の機関に知れ渡った事が起因となっている。

状況さえ整えれば知ってはいけない情報を知った人間の始末等の普通では行動に移せない事が指示を飛ばすだけで可能になる、自身の権力をつぎ込んだとしてもなかなか行う事の出来ない完全な口封じは大物政治家や官僚達にも、察庁をはじめとする各省庁の上層部から見れば魅力的な力。

少々の情報を捻じ曲げるだけでその力を行使できるなら安い物だと彼らは判断し、P S Fとの協力体制を喜んで受け入れたそうだ。

各機関との協力体制は部隊にとってプラスになったのかはまた別の話し、効率主義を基本とした部隊幹部の人間からすれば隠密性と効率を高める事ができる嬉しい誤算でも、部隊で実務を行う人間から見れば所詮、自分達は各機関の道具だという考えにしか繋がらない。

要は立場に合わせた考え方の違い、どんな社会にも存在する事だ。

それにいちいち文句を垂れていても何かが変わる訳でもないし、変えようと努力しても確立したシステムの前では当然徒労に過ぎない。

どんなに行動を起こしたとしても、それが無駄だと分かれば結局は自分の置かれている立場を理解してそれを受け入れていき、変えようとしていた意思是他人を蹴落としたとしても少しでもいい立場になりたいという闘争心が変わる。

ビルの屋上に設けられた腰ほどの高さに達するコンクリートの壁にゴルフバックを立て掛けかけた纏にはそれがよくわかっていた。

部隊に依頼を寄こす政府高官、各省庁の官僚、財政界のトップ達が皆そうであり、自分自身も犯罪者という立場を踏み倒す為に彼らの行動に加担しているのだから。

身を切るような鋭さと、少々もの哀しげな冷たさが同居する夜風の中で、纏は立て掛けたバックの上部に設けられたファスナーへ静かに指を掛けた。

（本部から識別番号00へ、指標アルファが機密情報取得の大詰めに入った。作業はあと五分程度で終了する。至急、地点で準備を進めろ）

自身の耳に取り付けられた無線式のヘッドセットに小さなノイズ音と無機質な男の声が流れる。

序

バックに掛けた指をそのまま、いつものように「了解」と一言だけマイクに吹き込むと耳を密かに刺激していたノイズ音が途絶え、名前も知らない男の声が再び聞こえる気配も無くなった。

その事を確認した纏は指でつまんだままのファスナーを引っ張り、バック上部の蓋となっている部分を開くと、月光で照らされてうっすらと中身に見えるゴルフバックの中に手をつ込んだ。

数秒後間バックの中に納められた物体の形状を手で探り、それがいつも使用している仕事道具だと確認した手と一緒に、夜の闇に溶け込むようなダークグリーン色の物体が露となる。

八十センチ程ある全長の三分の一を占めている機関部が納められているであろう銃床、その先に取り付けられた握りやすさが重視されているのか複数の湾曲が見られるフォアグリップ、そしてそこから延びる冷たく細く黒い鋼鉄の銃身。

ステアー AUG

シユタイアー・マンリヒヤー製の正規品とは違い、ドラグノフ狙撃銃の高倍率スコープが転用され、銃身の先には通常時には装備されていないサプレッサーが取り付けられているそのフォアグリップを右手で握ると、纏は左手を引き金に掛けて正面の防衛省に銃口を向ける。

排英方向を左に設定したAUGの高倍率スコープを覗きこむと、レンズの向こうに存在している防衛省の正門が映し出された。

スコープの向こうの防衛省正門を確認した纏は、狙撃にとって隠密性や射撃精度を高める上でも重要な伏射を^{ブローン}とらずにAUGを構えたまま屋上に直立している。

スコープを覗き込んだまま微動だにしない纏、その脇を身を切るような鋭い風が吹き抜けた瞬間、彼の目から鋭さが消え、代わりに何処か不安げな表情が浮かんできた。

それは、強靱な精神力と理性で緊張の糸を保っていた纏に、一時ではあるが人間らしい隙が生まれたという事になる。

降ろされた夜の帳と完全な交通統制、それらが生み出す何処か落ちて着いた静寂が纏は好きなのだ。

誓約書にサインしたその日から社会に存在しない人間として扱われ、常に緊張が生活を支配する中で与えられたゆったりとした時間。

それが銃の引き金を引いて銃弾を射出し、数百メートル先の目標を殺害するまでの待ち時間だったとしても、人間はやはり落ち着いた時間を精神のよりどころとしてしまうのだろう。

防衛省正門を射るスコープ越しの鋭い眼光が、そこに現れる人物を殺害するのは少し先の話。

それまでの間、纏は空を埋め尽くす綺羅星と全ての音響を貪欲に取り込む静寂に自身の身を預けるのだった。

＊

一国の省庁とあつても深夜となれば今までパソコンを叩いていた職員達も消え失せ、照明から発せられる光が照らしだしていた正面玄関も現在では夜の闇に染まっている。

そんな中で、前面に張り巡らされた硝子の窓から差し込む月光が床を静かに照らしだし、何処か幻想的な雰囲気醸し出していた。

唯一の光源である弱い月光を目指して玄関のホールをペンライト片手に進む男、斎藤 宗雄の姿がそこにはあつた。

四十代後半とは思えないほど老けこんだ顔とたつぷり脂を溜めこんだ体、高級そうな生地が使われたスーツを着込んだ彼の姿は防衛省の職員というよりも、長年職を全うしてきた政治家といったほうが当てはまつてるかもしれない。

歳以上に老けこんで見える彼は、顔を若干の戦慄で塗り固めつつ脂汗を全身に浮かべながら闇と月光の入り混じったホールを早歩きで移動している。

本来なら何時間も前に仕事を終え、今の時間帯は晩酌などを終えて既に床についている時間だったが、ここ最近の彼は何年も続けてきたその生活を大幅に崩していた。

今まで続けてきた生活を変えて五十代間近の体に鞭を打つ理由は、彼が焦燥の表情を浮かべる要因にもなっている胸ポケットに入れた一つのUSBメモリ、そこに納められた情報にあった。

防衛省職員、それも防衛大学を出たキャリア組に位置する斎藤がここ最近になって関わり始めた最高機密であるとある事案。

今、彼が大切に所持しているUSBメモリーには、その事案に関する重要な情報が書き込まれている。

序

傍目から見れば、暗いホールを歩く彼は、残業をした上に家に仕事を持ち帰る仕事熱心な男に映るかもしれない。

だがそれは、現在の時刻が午前二時を目前にしている事と、事案に関する一切の情報の持ち出しが禁止されている事を考慮しない場合、情報の持ち出しが完全に禁止されている防衛省、それも職員が一切存在せず、セキュリティシステムだけが起動している夜の闇の中からUSBを所持した男が現れたとなれば、考えられる可能性は二つ。

防衛省が関わる重要な事案の情報を外部の人間に売り、利益を得る可能性。

もしくはメディアに流し国民に公開する、一般企業における内部告発のようなものを行う可能性だ。

彼の場合は情報を流し見かえりを求める前者では無く、全くメリツトの無い後者だった。

前者の場合は外国の諜報機関等に情報をたれ込めば相応の報酬を得る事が出来るが、後者の場合は一個人の良心が満たされるだけ。

内部告発を行い、自分だけ聖人面をしている一個人の裏には、企業が倒れた事により路頭に迷う人間、頭が消えた事で足掻かない限り消えゆく運命にある下請け会社等の苦しむ者達が存在している。

それに、防衛省の場合は扱う事案が国家の最高機密に達し、一つの情報漏洩が国家を大きく揺るがす可能性もあり、一個人の良心を満たす為に払う対価も官僚や職員だけでは済まず、彼らを頭として経済活動を行い、普通に生活している国民にすら何らかの影響が出るかもしれない。

頭脳という全身を統括する器官が破壊された場合、体を構成する細胞が生命活動を停止するのを余儀なくされ死滅するのと同じで、国家に関しても頭脳にあたる首脳陣が崩壊してしまえば国に住む国民にも大きな影響の波が押し寄せる。

頭脳を破壊し、全身の細胞に大きな危険をあたえるとしても情報が納められたUSBを持ち出そうとしているという事は、斎藤の盗み出した情報は他国、そして自国民にすら知られたくない重要な情報だという事が考えられる。

その場合、いくら秘密裏に情報の持ち出しを計画し実行に移したとしても、無論、防衛省のサイバースペースの守りは強硬。

表には目立った変化は表れていないが、既に情報が持ち出された事を警備システムがしかるべき人間と機関に伝えている可能性も大いにある。

そうなっていれば、防衛省周辺のビルに自分を止める為の刺客、“あの部隊”の実働部隊が潜んでいると斎藤は考えていた。

高層ビル郡を吹き抜ける夜風よりも、全てを薙ぎ払う旋風よりも低く鋭い、空を切り裂く音。

それと共に歩き出そうとした斎藤の後頭部から、ぱつと血の花が咲

いたのはその刹那だった。

突如迸った鋭い灼熱に一瞬驚いたのか、もしくは頭蓋を突き破り、脳細胞に達した異物が内部で暴虐の限りを尽くした事で思考回路が弛緩したのか、斎藤の体は一度のけ反り、先程まで確かな光を発していた目は一瞬にして虚ろな瞳に豹変する。

血飛沫の中に破壊された脳細胞の欠片や脳漿が混じり合った液体、それがすぐ後方に位置するタイル張りの床を染めると同時に、斎藤は霧散しそうな思考回路の中で二つの事を悟った。

自分の前頭部に遠方から飛来したライフル弾が突き刺さり、それが自分の脳細胞を暴力的な力で破碎した事。

そして、脳を完全に破壊された自分は、たとえ神の手を持つ医者をもつてしても助からないという事だ。

自分は何も成し遂げられないまま死ぬのか？

元々覚悟を決めていたせいか、驚くほど静かな嘆きは指揮系統を破壊された声帯からは出ることが無く、減少の一步を辿る脳裏に沈んでゆく。

脳裏の奥深くに消えた嘆きは、もう動かすことの出来ない筋肉や細胞の隅から隅へと染み込み全身を冷たくさせる。

そんな中、対抗する余地もない不可視で強大な力に見出だされた斎藤と名の人間は、血の尾を頭部から流しながら凍てつく程冷たい夕

イル張りの地面に身を打ち付ける事になった。

鈍い肉を打つ音と共に、斎藤は霧散しそうな意識の中で必死に自分の全てを一瞬にして奪った死神の目を探した。

だが、周囲ある物といえば都心には不似合いな樹木に、時間が止まったかと思うほど車両の存在していない靖国通り、そして夜陰の中から見下ろす長身の高層ビル……

遠方から一方的に狙撃されたのだ。

今から探した所で見つかる筈もないし、仮に狙撃手が見つけれられたとしても既に時は遅い。

そう言い聞かせ、自己完結させた斎藤は自分の額に形成されたであろう大穴について考える事を止めた。

代わりに考え始めたのは、必死に勉強して防大に入学し、並み程度の成績から国防に関わりだした自分の人生。

人生も終盤に差し掛かろうとした時に自身が足をつ突っ込む事になった狂気の計画。

序

そして、「貴方とは初めから性格が合わなかった」という言葉と離婚届けだけを残して家を出た、もう数年も会っていない家内と、まだ離婚の意味も知らない程幼い娘の顔。

結局俺は何も成しとける事が出来なかったみたいだな

内部告発による“国家の恥”を暴く事も、離婚して別居している家族にも何もしてやる事が出来なかった……

冷たい冬の冷気を吸収した地面に身を預けながら嘆く斎藤、彼は空を埋め尽くす弱くて小さな光の群れに一つの優しさを見出だした。

赤っぽい光や青白い光、それぞれ違う様々な光を放つ夜空の中から彼が見つけたのは、数年前までは毎日目にしていた優しい妻の眼差し、それに似たオレンジ色の恒星。

ああ、こんなに情けない自分にも、こうして送り出してくれる人がいるのか……

頭上天高くから優しい光を放つ眼、それに看取られてた事に気づいた斎藤の意識はそこで霧散し、静寂を保つ暗い大空へと飲み込まれていった。

長いようで凄まじく短い刹那の瞬間。

その中で、禁忌を持ち出そうとした一人の男が倒れ、引き金を引いた射手は更に罪を被ることになった。

だがそれは、ルールが決まっていないこの国の裏の顔からしてみれば当たり前的事。

それを証明するかのように、今まで保たれていた静寂がパトカーのサイレンで途絶え、再び都市圏の喧騒が靖国通りを包んでいった。

一章

遙か上空に広がる巨大な空、そこから降り注ぐ他の色彩を取り込み無に帰すような圧倒的な力を持った夜陰が、地上の全てを支配していた。

同時にコンクリート製の埠頭に叩きつけられた潮の流れが物悲しい音響を無に染まった世界に発し、圧倒的な夜の闇と相まって何処か寂しげな夜を演出している。

さらに、海上から陸地に向かって吹き付ける冬の寒さを孕み始めた夜風が、現実世界での寒さを静かに実感させた。

そんな、人気の無い夜の敦賀港、その中に存在するコンクリート製の埠頭に厚めのコートを羽織った一人の中年男性が立ち尽くしていた。

彼の見せる百八十二センチ、七十八キロの体軀は四十台の中では比較的長身で大柄な部類に入るが、目を配るのはそれだけではない。

付くべき所に筋肉がつく事によって、少し痩せ気味でもまだ全盛期に劣らずとも勝らない力を出せる図体。

睨んだ者を凍てつかせてしまふのではないかと思うほど冷たい二つの瞳。

彼の外観、それに全身から滲み出る戦慄を与える雰囲気は、寂しげな埠頭によく似合っていた。

その男の瞳が見据える先には、藍色に染まる大海、そして、夜陰を裂く事の出来る唯一の光源である月光が、夜陰の支配する海上を静かに照らし出している。

目線の先に存在する大海、その上に降り注いだ月光は、表面の藍色を白金を思わせる白い光に変え、波打つ海を一種の幻想へと変化させていく。

男の眼下に広がる光景、これを見た人間は殆どが知らず知らず美しいという感想を残すであろう。

月光で濁った水面下を隠す大海。気のせいか、これに似た光景を何処かで見た事がある……。

だが、ただえさえ冷たい空気を2、3 下げる様な冷淡な男が心中で呟いた感想、それは誰もが思い浮かべる一般的な物から何処か逸脱していた。

彼はその言葉を脳裏から波がひくように消え去った後に、視点を遠方に映える水平線から自身の下方に存在する埠頭と海水の境目に向ける。

そこには、白金を思わせる光の波がコンクリート製の埠頭に激突し、白い波頭を覗かせながら元の藍色に帰ってゆく光景が存在していた。

波頭が現れる瞬間、スーパーのレジ袋や波に揉まれ朽ち果てる寸前のプラスチック容器、表面におびただしい錆びを見せるスチール缶の残骸がその姿をぼんやりと明るみにさせるが、それも一瞬の出来

事で、それらはすぐに深い深い藍色の海と一体化してゆく。

幻想を体现した光の波と、現実を忠実に再現したかのような波頭と朽ちかけの人工物の波、そんな光景を男は黙って静観していた。

まるで、そこで誰かを待つかのように。

「水面下に沢山の秘密を隠しこみ、その表面を幻想的な月光で覆い隠す夜の水面。」

私もそれに似たような光景を目にした事がありますよ」

漸く来たか、寒い中数十分も待たされたこっちの身にもなっただいものだ。

男は不意に放たれた自身の心中を察したかのような落ち着き払った言葉に、多少の違和感を感じながらも、声のした後方に体を向けなおす。

体と一緒に前方に存在していた光の波を見るのを止めた目は、自身の後方から声をかけた一人の男を暗い闇の中で視認した。

男性には珍しい肩にかかりそうなくらい長い長髪から覗く彫の深い顔、帽子を目深にかぶっていてもなお夜陰の中で映える柔和な笑みに、細いがつくべき場所に筋肉がついている体、それに不釣り合いなゴツイ陸上自衛隊の迷彩服。

迷彩服の彼はそう言うスーツ姿の男に向かってゆっくりと歩み寄る。

陸上自衛隊の迷彩服を身に纏っている所から単純に考えれば、目の前の迷彩服の男は陸上自衛隊の曹士か尉官と予測出来る。しかし、彼の首からストラップで吊り下げられていたドイツのH & amp; K（ヘッケラー&コツホ）社で開発されたアサルトライフルであるH & amp; K X M 8、それが自衛隊の装備目録に記載されていない事も、アメリカ陸軍が次期制式アサルトライフルとして調達しようとしていたそれが、一個人の裁量で調達できる物では無い事も男は知っていた。

「暗く濁った表面を月光によって幻想的な光の波に変え、水面下に存在する物を隠し、人の目を欺瞞する大海。それは、汚職や外交、政治の問題を、報道管制や事故に見せかけた殺人によって国民からその事実を隔絶するこの国によく似ている。そう、この日本という国にね……」

さらに、一息に並び立てられた表情とは裏腹に、伶俐な男の声と彼の放つ凄まじい威圧感が、そんな考えを一瞬にして否定してしまった。

相手の身長や顔立ち、物腰や話し方によって人間は相手の第一印象を決める。

それは、埠頭に立つスーツ姿の長身の男も例外ではなく、目の前で愛想のいい笑みを浮かべる男に対して一定の第一印象を持っていた。

一章

にこやかな笑みの裏に隠れる伶俐な声と異様な存在感、そして、すらりと伸びたしなやかな姿勢が迷彩服の男が自身と同じような境遇に置かれている人間だという第一印象を。

「そういえば自己紹介がまだでしたね」

歩み寄った迷彩服の男は柔和な笑みを表情筋に再び浮かべなおすと、そう言って自身の右手を差し出す。

「今回、この敦賀港に到着した『荷物』の搬入と組み立てを指揮している中西龍一という者です。以後、お見知りおきを」

階級と所属を答えなかった事により、迷彩服の男、中西龍一が自衛隊の尉官や曹士の類では無い事は判断できた。

何故なら、普通ならば公開しても差し支えない階級を口にしないという事は、中西が階級すら公開できない場所に身を置いている事が予想でき、『荷物』に関わっている人間の中でそんな場所に身を置いているとすれば、自身の同業者か“あの国”の人間しか考えられないからである。

階級章の無い陸自の迷彩服に装備目録に載っていない新型アサルトライフル、そして、絞られてくる所属の可能性から余計な詮索は無

駄だと思ったスーツの男は中西の右手を握り返すと、一応は相手も名乗ってきたんだ、自分も名乗るべきかと心の中で呟きながら口を開こうとする。

「吉田浩介一等海佐、ですね？」

だが、浩介が放とうとした言葉は踵を返すかの如く放たれた中西の声に遮られる事になった。

「確か、防衛大学を歴代最高の成績を持ちながら主席で卒業、防衛省の官僚になるためのエリートコースを歩んで行く事を期待されたが、当の本人は海上自衛隊第一潜水隊群所属の潜水艦おやしおの水測士に就任。防衛大学校始まって以来の天才であり、変わり者」

恐らく、軍属の身で浩介の年齢まで生きていれば、嫌でも苛立ちを苦笑いで償却する術が身に付くのだろう。

自身の言葉を無理矢理に遮られた事と、言わなくてもいい過去をわざわざ掘り返す中西に対して、浩介は心の中でかなりの苛立ちを感じている筈だが、表情に浮かぶのは自然な苦笑이었다。

「あと、周囲の期待を裏切って末端から国防に携わる人生を始めたものの、かつての天才ぶりは健在。特にソナーの扱いや潜水艦の運用術に長けていて、当時の司令官に時代が時代なら即、潜水艦の艦長に就任していると絶賛されたと聞いています」

冷たい夜風に当たり、スーツ越しに身体を冷やしている浩介は、寒い中で中西の長話に付き合わなければならぬ苛立ちを感じていた反面、彼が自身の素性をよく調べている事に若干の尊敬の念を抱いていた。

「それに、今回の件でも貴方の作成した航路や、『荷物』の輸送に潜水艦を使用するという案は非常に役に立ちました。お陰で『荷物』を誰にも知られることなく秘密利に輸送することができましたよ。それに関しては、とても感謝していますよ」

中西の話す『荷物』という単語、それを聞いた瞬間、浩介はただえさ難しい表情を浮かべているのに、さらに眉をつり上げて険しい表情を見せる。

『荷物』という単語が浩介の関わっている重大な事案の中で最重要機密に設定されている事、それが彼が険しい表情を浮かべる大きな要因となっていた。

「それは良かった。それで、私を呼び出したのには何か理由があるのだろうか？」

元々、合理的な行動を信条としている浩介にとって、中西の無駄な情報の混じった話はスーツに吹き付ける冷気と最近の職務による疲れと相まって、癢に触る物になっていたのだろう。

この酷い寒さの中でよくこんなに話す気力があるな、と半ば呆れ気味の浩介は業を煮やして苛立ちの混じった声を放っていた。

「ああ、そういえばそうでした。本題を話すのをすっかり忘れていましたよ」

そんな浩介の苛立ちに気づいているのか気づいてないのかどうかは無意味な笑みが支配する能面から読み取れることは出来なかったが、彼の目に入ってきた中西からは浮かべていた笑顔が不意に消え去り、代わりに中西の物とは思えない真剣な目が見られた。

無意味な笑みの仮面の裏に隠れた中西という男の本心、それを彼の真剣な表情を見る事によって少し触れた気になった浩介は、心の読み取れない相手と会話をする違和感を無くそうとしながらガラス玉のような双眼に目を合わせる。

「それでは本題に入りましょうか」

そう言つて中西は一瞬だけ再び無意味な微笑みを浮かべるが、その一拍後には真剣な表情をその能面に貼り付けていた。

「貴方の作成した航路、そして今回の輸送の為に日本政府が提供してくださった特務潜水艦いそしおにより『荷物』の敦賀港への搬入は秘密裏にして迅速に成功させる事ができました」

一章

「そして、横須賀港に運び込まれた後の『荷物』の組み立て作業も最終段階に入り、順次、器の方に搭載される予定でした。しかし、そこで重大な問題が発生したのです」

その瞬間、凍てつく程寒い外界の夜風と中西の言葉の中にある“重大な問題”という単語が、浩介の表情を凍りつかせた。

部品の納期の遅れや欠損なら技術者の増員、情報の漏洩ならしかるべき人間の始末と、通常の問題程度なら様々な方法で十分に解決できるが、今、中西は重大な問題が発生したと言った。

現在進行形で進んでいる『荷物』の事案、それは迅速かつ秘密裏に進めなければいけない特殊な事案であり、工期の遅れや情報の漏洩一つが致命傷となって最悪事案は破綻する。

『荷物』の事案は完全に秘密裏に行え、もし工期の遅れや他の要因が原因で情報が漏洩した時は“清算”の嵐に巻き込まれる事を覚悟しておいてくれ。

ふと脳裏によぎった数ヶ月前に上司から聞いた『荷物』の事案に関する説明、彼の話した言葉から予想すればもし、『荷物』の事案が破綻という帰結を迎えたとすれば自分も含め、事案の関係者達は清算という破滅的な被害を被る事になるだろう。

「問題だと？、一体どのような物だ？」

一発で今までの計画の全てを破滅に追い込む“重大な問題”の内容を、浩介は顔を顰めながら恐る恐る問いかけた。

「わかりました、説明しましょう」

そんな浩介の問いかけに対し中西は不敵な笑みを不意に浮かべると、その不自然に歪んだ口から印象的な低い声を漏らし始める。

「横須賀港に搬入された動力炉、動力伝達系、電子機器等の各ユニットはドックの方で組み立てられ、もう少しで動作試験を始められる段階まで進みました」

そこで言葉を切った中西は、埠頭から覗く海面に目を向けると一拍後に再び口を開き始める。

「しかし、日本国内で作成されている完成していない部品が『荷物』にありました。それも、『荷物』の核となる重要な部分です」

耳に嫌でも入って来る事の真相に、やはりかと言わんばかりにはかれた溜め息。

「国内で制作されている部品の完成の遅れ？それ位ならそれ程問題ではない。人員を増員して早期に完成させればいいだけだろう」

その後、浩介は少々焦った様子で問題への対策を講じるが、彼とは正反対に落ち着いた様子を見せる中西は、講じられた対策を黙殺して浩介に数枚の紙をクリップでまとめた資料を渡した。

数枚にも及ぶ長ったらしい文字列、その文字列を避けるように張られた顔写真、中西が何処からともなく取り出された資料を引手繰る様に奪い、静かに素早く見落としの無いように目を通す浩介。

すると、無造作に並んだ文字の列に目を通した彼の顔色が急激に変わり、本当なのか？と中西の目に問いかけた。

「確かに部品の納期の遅れくらいなら、人員の増員等で容易に解決できます。しかし、貴方に渡した資料にもある様に、問題は別の所にありました」

問題の真相を目で問いかける浩介に、冷静な表情で淡々と話す龍一。

彼は問題の核心部分に迫る前に、咳払いで話を一度区切る。

そして、心の準備は良いか？と問いかけるかのように一瞬だけ目を合わせた中西に、浩介は小さく首を縦に振り、答えた。

それを確認した中西は、こわばった表情を浮かべ、真剣な目を浩介

に向け直した後に、閉ざしていた口を開いて冷淡な声を発した。

「『荷物』の核となる部品、その製作にあたっていた製作者がつい先ほど部品と共に姿を消しました」

やられたか……、と彼は心中でそう呟いた。

資料に目を通した時に“重大な問題”の中身に関して薄々予想はついていたのだろう。

だが、資料に書かれた文字で理解するよりも実際に言葉で聞いた方が言葉に重みがあったらしい。

龍一の口から漏れた伶俐な声、それが伝えた事実には、そう言わんとはかりに溜め息を吐いた浩介の眉間に一層皺が寄った。

『荷物』の搬入に感づいた各国の諜報機関の間諜が彼を連れ去ったのか、それとも彼自身が自分の意思で姿を消したのかわからないが……いや、過程なんてどうでもよかった。

『荷物』の事案は存在が明るみになった時点でこの国に大きな動揺を与える。

その事を考慮すれば、製作者の彼が『荷物』の部品を製作するにあたって精神的な苦痛に耐えれずに自分の意思で逃亡を図ったとしても、『荷物』の情報を嗅ぎつけた各国の間諜達が彼と部品を拉致していったとしても、結果だけが重要になる今の状況の中ではそれら

の過程は考えるだけ無駄。

どんなに過程を推測したとしても『荷物』の部品を製作者が持つて姿を消したという事実は今更変わらない、それならば無駄な推測を続けるより解決策を講ずる方がはるかに時間の有効活用になるのは猿でもわかる事だった。

一章

そう、今一番重要になるのは製作者の逃亡先に繋がる手掛かりがいくつ残っているかという事。

「それで、現在の状況は？」

『荷物』の部品と製作者が姿を消した事によって動揺していた浩介だったが、それは一時の事で、そう言った彼の声は驚くほど冷静だった。

「現在、私の仲間数人が製作者の自宅や周辺から手がかりを探しています。ですが正直な話をしますと当方の人数では製作者を探し出すことはほぼ不可能です」

そんな浩介の言葉に対して返された中西の声、それが伝えた状況は最悪だった。

製作者が自主的に逃亡し、『荷物』の情報をメディアへと提示しようとしているにしても、『荷物』の事案の存在を察知した某国の間諜が製作者をさらって情報を奪い取ったとしても、まず一番優先すべき事項は製作者の確保、場合によっては殺害。

それに行動を移すには、製作者が消えた先の手掛かりがどれだけ残されているかによって難度が変わってくる。

だが、現状では製作者へと繋がる手がかりは中西の話では零。

『荷物』の事案の情報が流出するまでというごく短いタイムリミットのの中で、手がかりの無いまま闇を進むというのはあまりにも無謀で難易度が高すぎる。

情報の流出の危機という逼迫した状況の中でできる最良の選択、それは製作者を捜す人員を増やす事。

そんな考えに一瞬で行き着いた浩介の脳裏には、現在の状況を解決する事ができる最良の選択肢、“あの部隊”の存在が浮かび上がっていた。

「そこで、できる事なら貴方の指揮する“部隊”のお力を借りたい
と思い、今回、この敦賀港まで呼ばせていただきました」

どうやら中西も浩介と同じ考えに行き着いていたらしい。

「あなたの部隊ならば情報戦部隊の偵察能力と、他国の間諜が相手でも作戦を遂行できる戦力を保持しています。今動かせるだけ的人员で結構ですので製作者搜索に力を貸していただけないでしょうか？」

先程の説明にそう付け加えた中西の冷静な目が、しっかりと浩介を見据える。

そんな中西の視線に目を合わせると、その目の奥、眼球の根底部分で揺れ動く不安定な光、冷静さに入り混じる戦慄が現れている事がわかった。

それもそうだろう、彼は『荷物』の敦賀港への搬入と組み立てを指揮していると自身で話していた。

『荷物』の搬入と組み立てを指揮しているという事は、事案の内容を多少なりとも説明を受けている事が予想される。

そんな立ち位置に立ちながら、もし、『荷物』の事案の情報が流出したとすれば、組み立ての指揮という中間管理でありながら重要な職に腰を据えている彼も恐らく清算の対象とされて相応の処理が行われるだろう。

「わかった、うちの部隊の精鋭を製作者搜索、及び確保に充てよう」

『荷物』の事案に関して計画段階から携わっている浩介にとって、重大な失態を犯した人物や、情報を漏らす可能性が高い人物に適用される処置である“清算”という言葉は聞きなれた単語でもあり、この事案に身を置く中で一番の恐怖を感じている帰結でもあった。

だからこそ彼は、自身が指揮する部隊の精鋭を送り込む事を決意した。

『荷物』の事案を穩便に済ます為。

濃く濁った水面下にある秘密を秘匿し続ける為。

何より、清算という戦慄から逃れ、この先もこの国の闇の中で生き残る為に。

浩介の快諾を聞いた中西は「ありがとうございます」と言い深く一礼する。

「では、ドックの方で詳しく説明を行いたいので私について来てください」

その一礼から、続けて数刻前を思い出させる笑みを浮かべた彼は、後方を向いて埠頭の先に見える真新しい大型艦船用の格納庫式ドックに足を向ける。

しなやかな、まるで猫科動物を連想させる中西の姿が遠ざかることに夜の夜陰に溶け込んでゆく。

「この国を冷たい外界から守る為の術、一騎当千とも言えるそれが、まさか両刃の剣だったとはな……」

そんな中で、波の音に掻き消されるほど小さく呟いた浩介は、一定の速度で規則的な安全靴の音を響かせる中西の後を追う。

そして彼もまた、中西と共に深い深い夜の闇に姿を消していった。

暗くて濃い、この世界の汚濁の中へと。

一章

コンクリートで塗り固められた壁と天井が回りを囲う閉塞感のある廊下。

そこは装飾品や壁紙、さらには窓すら見つける事の出来ない窒息しそうな空間だった。

空気を循環させるための空調設備は働いているであろうが、灰色だけが無限に続く廊下は自然とその場の空気を澱んで見せている。

纏は空気の粒子が全て鉛の原子に置換されたような重い雰囲気が漂う廊下を、ゴルフバックを背負い、A4サイズの茶封筒片手に機械的な足取りで歩いていた。

彼が今いる場所は市ヶ谷、防衛省付近の五階立ての古びたビル……正確に言えばそのビルの直下、即ち地下に設けられた施設の中だ。

数十年前、“新しい抑止力”を創設するにあたって青木ヶ原の樹海に設立された戦闘訓練所、それと共に当時の政府首脳陣は全隊員を指揮する為の参謀本部となる施設を防衛省近くの地下に建設した。

遥か上空、軌道上に位置する監視衛生との通信を可能とする大出力の通信装置、人類の頭脳では到底計算しつくせない数式を一瞬で処理するスーパーコンピュータ、そして万が一の時の為に様々な種類の武器が収められた武器庫。

秘密惻に国庫から調達された資金をふんだんに使用して造られたこの地下施設も、年による劣化で所々老朽化が始まり、最近では施設

移転の話も出ていたが、近年始まった世界規模の不況でその話も芥へと還ってしまった。

それでも、数十年前の最新技術を投入されて建設された地下施設はまだ普通に使用する分には差し支えは無く、スーパーコンピュータ等の電子機器は古い物を新しい物に更新すればいい話だから、この地下施設は今でも十分に指揮系統の要として機能している。

纏を含めたP S F構成員は、そんな地下指令部に事案が終了したと共に足を運ぶのが通例となっていた。

狙撃時の姿勢や環境条件等の数十項目にも及ぶ記述欄が並ぶ報告書を提出するためだけに毎回纏はここを訪れているが、数年も同じ事を続けていれば面倒くささも無くなるのだろう。

彼は無機質な目を吸い込まれるかのような灰色の景色に向けながら、一定の歩幅、速度で廊下の奥深くに向かっていった。

核抑止力の名の元、ただがむしやらに核保有数を増やし続けたアメリカ合衆国とソビエト連邦、その両国を見て核抑止力における財政面での弱点を知った日本政府は、冷戦終結後に必ず起こるであろう世界の揺籃を見越して海上自衛隊の派生組織として対人、対陸上兵器戦闘を重視した特殊な揚陸部隊を組織した。

専守防衛が基本となっている自衛隊では有事の際に防衛しか出来ず、迫り来る脅威に攻撃する術は無く、防衛だけを行っていたれば必ず息切れを起こし、その隙を突かれてしまえば極東の島国など一瞬で沈められてしまう。

それを防ぐ為に敵国の重要施設に揚陸して、圧倒的な戦闘能力で施

設を無力化する、つまりは相手の指揮系統、頭脳にあたる部分をピンポイントで破壊する事が新設された強襲揚陸部隊のコンセプトだった。

無論、攻撃能力のある部隊を新設するこの案は、日本という国を一國平和主義にしがみつかせている憲法第九条に阻まれるかのように多くの議員や政治家を敵に回す事になったが、それを上回る政治に携わる大多数の人間が承認した事により、強襲揚陸部隊の設立は国民に知らされる事無く承認された。

何故、平和主義国家において他国を攻撃することが可能な戦力が承認されたのか？、答えは簡単だ。

冷戦という静寂を保った巨大な国家間戦争を行ったアメリカ合衆国という同盟国、日本の首脳陣は完全に疲弊しきった彼らに国防を任せておけなかったのだ。

20世紀においてアメリカという国は全世界に軍事的なプレゼンスを持つ程の超軍事大国だった。

だが、1990年代にその軍事的な力の根幹を揺るがす大きな自体が発生した。

冷戦の終結

それまで冷戦という一つの言葉で軍備増強を正当化し、核の増産や無駄な軍備拡張を続けてきた二つの大国はその出来事で一気に我に返った。

果てしない軍備の拡張による牽制、消費無き戦争は互いに利を生ま
ずに害だけを増やす。

その事を良く理解していた両国だからこそ、経済の破綻を目前にし
て冷戦状態を解除したのだろう。

冷戦状態解除という事実は、それまで膠着戦に巻き込まれていた世
界に大きな揺籃を生んだ。

例えばゴルバチョフ大統領の辞任から始まったソ連の崩壊や、冷戦
終結により戦略的価値を失ったキューバの経済危機、そして日本も
例外では無かった。

冷戦終結前までの日本は日米安保条約の元に、軍事大国アメリカの
軍を抑止力として使う事ができた。

一章

沖縄に駐留する米海兵隊という形で。

良く言えば軍事同盟、悪く言えば親の保護を求める子供といったその関係は、互いに利を生む事で冷戦という世界の混乱の中を生き長らえてきた。

だが、冷戦終結と共にアメリカ合衆国は全世界に広がった軍事プレゼンスを縮小せざるおえなくなった。

そう、果ての無い核増産と膨大な兵器の配備によって、超大国アメリカのスタミナは完全に尽きていたのだ。

だからアメリカは今まで拡大を続けてきた軍事力を縮小し始める、すなわち“世界の軍隊”の衰退である。

世界の軍隊の衰退により世界中におけるアメリカの軍事プレゼンスは縮小し、世界を支配する軍事力はその力を見失おうとしていた。

今までアメリカの強大な抑止力に守られていた日本は、その軍事プレゼンス縮小の影響を受ける可能性が出てきたのだ。

アメリカから見れば日本は対ソ作戦の重要な役割を担う拠点だったが、冷戦終結と共にその意味を失った。

戦略的価値を失った拠点は存在する意味も無く、早々に放棄される。

そして、放棄された拠点は敵国に蹂躪され、一瞬にして地獄絵図が

出来上がるだろう。

もしそうなった場合、復興し再び繁栄の道へと戻るには途方もない年月を要する。

その事を当時の政府首脳陣は良く理解していたのだ。

冷戦終結後の揺籃という特異な環境の中、自国を蹂躪される恐怖を感じた政府首脳陣は、だからこそ国民に知らせる事無く強襲揚陸部隊設立案を可決した。

規定の条件を満たした採用枠、つまりは三つの入隊条件を殆ど満たした人間だけで構成された実働部隊。

強襲揚陸戦用に特殊な改装が施された数年前に一線から退き、練習艦に配属されていたうずしお級潜水艦いそしお。

日本国内では到底手に入れる事の出来ない他国の優秀な小銃。

隊員に与えられる過酷な訓練と、烏合の衆と精鋭を振り分ける為の実戦を想定した模擬戦。

設立された強襲揚陸部隊は首脳陣の考えたコンセプト通りに成長を続け、対人特殊戦闘部隊、PSFという略称通りの戦力を保持するに至った。

対人、対陸上兵器、そして強襲揚陸戦に特化した戦闘部隊に、近年のコンピュータ技術やインターネットの普及によって現れた新しい戦争の形、インフォメーションウォーに対抗する為の情報戦部隊。

日本が冷たい外界から身を守る唯一の術、“新しい抑止力”は、そのような二つの部隊を主力としていた。

強襲揚陸戦、陸上戦において世界の中でも最高水準に近い陸戦部隊を、諜報や敵の指揮拠点へのサイバー攻撃を主眼に置いた情報戦部隊で指揮する。

そんなP S F部隊の運用方針は、空挺又は強襲揚陸からの重要拠点の迅速な占拠というコンセプトと相まって、恐らく実戦においても高い有用性を誇るだろう。

しかし、今はまだ核抑止によって世界は支配されており、2010年現在、P S F部隊の主な働きは他国に対する抑止効果と不意に発生した戦闘への対処、国家内で発生した問題の処理とされている。

特に国家内での問題の処理業務は多々発生しており、政治的に大きな障害になってくる人間を始末、あるいは情報操作によって失脚させる時や、来日した他国要人の秘密裏での警護、社会に潜んでいる工作員を検挙する時には戦闘・偵察能力の高さから、大概の場合はP S Fが実働部隊の任を請け負っていた。

国家の問題、いわゆる雑用を部隊がいつ請け負うようになったのかはわからないが、その業務を請け負う事でP S F部隊が辛うじて組織として成り立っているのは事実だ。

元々、P S F部隊は秘匿された確固たる戦力であり、その存在が明るみになれば憲法第九条に違憲する事になり、全世界と自国民からバッシングを受ける事となる。

もしそうなれば、部隊に捜査のメスが入る事は当然、そこから関係

者が芽づる式に割り出されたとすれば、上は政府首脳陣から下は桜田門や公安関係者といった多方面の人間が損害を被り、各業界に多大な影響を与えるのは避けられない。

では何故、彼等はそんなリスクを背負いながらもP S F部隊の存在を容認してきたのか？

そう、それは外敵から身を守る確立した抑止力の整備という基本概念の裏に、彼等が自分達の私欲を満たす方法を見出だしたからだ。

桜田門や公安ならば凶悪犯の搜索や殺害、この国に浸透している間諜の検挙、政府首脳陣ならば敵対勢力の排除やスキャンダル防止、世論の操作といった、その業界で生き残ってゆくのに必要な仕事がいくつか存在している。

だが、そういった仕事は一樣に危険が伴ったり特別な技能を持った人間や、一定の準備が必要だ。

そんな、実行に移しにくいが確実に必要となってくる仕事を渋々行ってきた彼等は、自身の代わりにそれらの仕事を行える機関を知らず知らずの内に探していた。

一章

そんな彼等の目に飛び込んできたのが、法案として秘密裏に国会に浮上してきたP S F部隊の存在だ。

世界最高水準に迫る戦力に、強襲揚陸や空挺から敵拠点に攻め入れるだけの機動力、インフォメーションウォーを想定した情報戦部隊、そして、戦場で多数の死や地獄を目にしても正気を保てる屈強な精神力。

ヘリ空母の導入だけでも自国民と他国の非難を浴びるお国柄の事、当時のP S F部隊設立案は、無論、憲法第九条という戦争放棄の足枷に大きく違憲する物だっただろう。

しかし、深く考えてみるとどうだ。

世界最高水準の戦闘能力は凶悪犯や工作員の検挙、政府に敵対する者や害を与える者の排除、インフォメーションウォーを想定した情報戦部隊は世論の操作や、様々な情報の書き換えを可能にする。

なおかつそこに秘匿された部隊という秘密裏に動かしやすい集団という機動力が加わるとなると、“新しい抑止力”の案として提出されたP S F部隊は、当時の政府首脳陣や桜田門と公安上層部から見れば、実行に移しにくいが確実に必要となってくる仕事の格好の担い手となる。

何故なら、対象の殺害やサイバースペースからの情報の書き換えを、秘密裏にかつ迅速に行える組織、それが彼等の求める求職条件と完全に一致しているからだ。

国民に知られること無く行われた深夜の国会議事堂での緊急審議、その中で議案に上がった強襲揚陸部隊設立法案は初めこそ非難の嵐を浴びたものの、部隊設立で生まれる大きな利害を見出だした政治家達は、最終的な決断を下したのだろう。

P S F 部隊設立を容認し、それを自衛隊傘下の戦力ではなく自分達の下に直接配置する事を。

そう、P S F 部隊設立法案を可決して、容認をし続ける彼等が負うリスク、それをP S F 部隊が行う特別な業務で打ち消す事で、互いに利害関係を持つことでP S F 部隊は存続を続けているのだ。

部隊が関係者との利害関係で存続しているという事実は、そこで活動する人間に様々な価値観を与えている。

ある者は両方に利がある正当な利害関係と判断するかも知れないが、ある者はここまで堕ちてきながら、所詮は国家の犬にして所有物であり、発射されたら二度と銃口に戻れない銃弾と自身を悲観するかもしれない。

人の価値観というものは個人によって大きく変わってくる物だ。

ある者が好きな音楽が、他の個人からすれば雑音や嫌いな旋律となることなんて日常茶飯事であり、価値観の対立が互いに嫌悪という人間関係を生む。

そんな人間の不変な真理、それは社会から隔絶されていても、あくまで人間の集団の集まりであるP S F 部隊でも同じ。

しかし、灰色のコンクリートが覆い尽くす廊下を歩き続ける纏から
言わせてみれば、他人の価値観なんてどうでもよかった。

俺は部隊でひたすら厳しい訓練と殺害を繰り返す自分に対し、誰か
に同情してほしいなんて微塵にも思った事が無いし、自分の罪を踏
み倒す為に選んだ道なのだから、任務中に死亡しようが精神的に参
って自殺に走ったとしても仕方が無い。

どうなったとしても自分の考えと共に心中するだけだ。

つまりは、信じれる物は自身の能力と手にする武器だけ。

灰色の道を歩き続けて数刻、暗い灰一色に統一された壁の中に、報
告の時はいつも目になっている木製の扉を見つけた天城 纏は、そう
いう考えの持ち主だ。

そんな彼は木製の扉の前で歩む足と考察を止めると、手慣れた様子
でその扉を三回ほどノックする。

「識別番号00、天城纏だ」

自分は六年前のあの時から、頑固に一人で生きてきた。

だが、俺以上に頑固で、しかも面倒見のいい奴がいた。

よく考えてみると、俺は知らず知らずの内に、そいつの力を借りて
生きているのかも知れないな。

心中でそう呟いた纏は、「おお、纏か。入れよ」という聞きなれた低くてどすの効いた返事を聞くと、茶色の扉に取り付けられたドアノブを左手で掴んで、一息に扉を引き開ける。

そして、扉の奥に広がる執務室、低い声の主の仕事場であるその部屋へと、纏は足を進めて行つた。

*

「いつもながらの事だが、緊急の呼び出しによく対処してくれた」

先程までの静寂をそのままにして、夜の凍てつく風が温風に変わった執務室で纏は一人の男と執務机越しに対峙していた。

短く切り揃えられた角刈りに、がっちりとした体躯、ドスの効いた低い声は数年前と全く変わらないが、歳を追うごとに厳つくなる顔はヤグザを通り越して鬼神のような迫力になっている大男に対して、纏はゴルフバックを肩にかけたままにしながら、表情筋を全く動かす事なく立ち尽くしている。

一章

「この仕事柄上、計画的な人間の清算以外、殆どが緊急を要する事案となるが、ここ最近では察庁やら防衛省上層部からの依頼が本当に多い、部隊を統制するこちら側としても目が回りそうだ」

「俺としては全く問題ないです」

口元を吊り上げ、厳つい顔なりの笑顔を浮かべながら話す大男とは対照的に、纏は全く表情を変える事なく硬質な声を返していた。

その流れで、彼は左手に携えていたA4サイズの茶封筒を執務机に置く。

「これが、今回の事案に関する報告書です」

そう言って普段なら一礼した後に執務室を出て、そのまま自宅待機で次の仕事に備える筈だった。

だが、「おう、受け取っておこう」と机の上に置かれていた茶封筒

を引き寄せた大男を目の前にして、纏は後方のドアに向かう事なく直立の体制を保っている。

「それで、永川さん。俺に今日の事案以外の用事があるって一体何ですか？」

不意に放たれた纏の言葉に、椅子に巨大な体軀を収める大男、永川義人は「まで、今からそれについて話す」と言っと、執務机に置かれた内線電話を手にとった。

組織という物は指示を与える人間と指示を受けて動く人間の二つで基本的には構成されている。

しかし、組織という物は厄介で、その存在が大きくなればなるほど、多くの支部が増えるほど、指示の伝達速度も遅くなる。

巨大な組織、特に重大な事案を承る組織という物は情報の伝達速度の低下は盲点になりかねない。

それなら、指示を与える人間と指示を受けて動く人間の間に情報を伝達する指揮役を挟みこめばどうなるだろうか？

指示を与える人間の司令を中間に立つ人間が末端まで伝え、末端の情報に彼が指令を与える人間に伝える。

中間に立つ指揮役がそういう風に働くことができれば、はからずとも素早い情報伝達が可能になるだろう。

無論、P S Fにも首脳陣の意向を末端まで伝える中間管理職のような役職がある。

そんな通常の組織でいう中間管理職を務めているのが、目の前で受話器片手に通話が繋がるのを待つ永川だ。

「すまん、今から俺の執務室に来てくれ」と繋がった電話相手に対してそう吹き込んだ彼は、右手の受話器を置きながら左手で報告書の入った茶封筒を引き寄せる。

その茶封筒から数枚のレポート用紙を取り出しつつ、永川は「ちょっと話をするまでに時間がかかるから、その辺に座っててくれ」と纏に投げかけた。

その投げかけに無言のまま頷きで応じた纏は、肩からゴルフバックを降ろしつつ、執務機の左に位置する応接セットのソファアに座り

込む。

柔らかすぎず固すぎずといった適度な感触のソファーに座った瞬間、それまで動かしっぱなしだった体から緊張が抜けてゆく感覚が纏の全身を襲った。

ふと横目で確認した右腕でゴツい外観を見せるデジタル式腕時計の液晶は、午前六時二十三分の文字を表示している。

仕事の呼び出しから凡そ五時間半。

さらにその間を緊張の糸を極限まで張って過ごしてきたのだ。

緊張の抜けた身体へ急激な疲れが襲ってくるのも仕方がないことなのかもしれない。

そんな疲れの溜まった体をソファーに鎮座させたまま、纏はテーブルともう一つのソファーを挟んだ棚に鎮座する棚に置かれたテレビに目を向ける。

デジタル放送移行の煽りを受けて、液晶やプラズマテレビブームとなったこの時代にそぐわない、大きく、若干古めかしいブラウン管テレビの画面には、バラエティー番組でもドキュメンタリー番組で

も無く、評論家を招いた討論番組が映し出されていた。

通常のテレビニュースに使われるセットを転用した背景に、クリアム色の面を見せる直方体の長机。

そこに準備された三つの椅子に鎮座するのは二人のアナウンサーと一人の評論家だ。

黒縁メガネにワックスで整えられた髪の真面目そうな若手アナウンサーと、常時笑みを絶やさない女子アナ、そして、深い黒のサングラスをかけた厳つい評論家、彼等は後方の液晶パネルに資料を展開しながら、テレビ画面右下のテロップに表示された一つのお題について討論を行っている。

表示されている討論のお題は、安保条約の必要性と、日本の今後の防衛政策といった万人うけしなさそうな話題だった。

そんな、忙しい朝方を生きる人間が望まないような話題に、二人のアナウンサーと恐らく軍事評論家であるサングラスの男、彼等は放送局側が設定したそれに対して律儀に討論を行なっている。

社会生活や仕事前の準備が大切になる時間帯、そこに編成された討論番組というのは殆どの人間が興味を向けようとしないうだろう。

そう、こんな早朝に起きている人間がテレビ画面に目を向けているとすれば、今日や昨日の出来事を探るためのニュースに目を通して
いる筈だ。

一章

早朝という時間が相まって意図的に見ようと思わなければ他局番組のCM時間をつぶす程度しか役に立たない討論番組。

その討論番組が放映されている時間が時間ならば、話題も話題だった。

安保条約の必要性と、日本の今後の防衛政策。

それは、他国民から平和ボケした国民の集まりと称される日本国民から見れば興味が沸かない話題。

つまりは、自称今を楽しく生きる若者や、仕事の立場を少しでも拳げる為に努力する中年からすれば、日米安保や防衛政策などどうでもいい話なのだ。

確かに、全ての日本国民が自国の国土のことをどうでもいいと考えていると決めつけたら嘘になるかもしれない。

だが、少なくとも彼らが日常の中で巨大な世界の版図から日本という地名が消え去る事を本気で考えたことは無いだろう。

そう、現代の日本という国の国民達と政府首脳陣、彼らは自国の存亡が危うくなるような外交、世界情勢、そして戦争を想定していない。

攻めにくく守りやすい、起伏が激しく上陸が困難な地形と超大国アメリカの後方からの抑止力。

対国外戦闘の悲惨さと恐怖が刻み込まれていない日本人の遺伝子は、自然とそういった事実以身を委ね、防衛力について思考することを放棄しているのだ。

「日米安全保障条約、通称安保条約と呼ばれているこの条約についてまず初めにお聞きしたいんですが、この条約は一体どのような背景で締結されたのでしょうか？」

相も変わらず堅い表情を浮かべる男性アナウンサーが、腕を組ながら椅子に鎮座する厳つい軍事評論家に質問を投げ掛けたのは丁度その時だった。

日米安保条約、男性アナウンサーが投げ掛けたそれに関する基本的な質問は、後に行われる長つたらしい議論の触りの部分となるだろう。

そんな男性アナウンサーからの問いに、組んだ腕をそのままにした軍事評論家は、見かけによらない柔和な語勢で彼の問いに答え始めた。

「日米安全保障条約、これは1951年に締結されたサンフランシスコ平和条約の裏に日米間で結ばれた条約です。当時の世界は第二次世界大戦後から冷戦初期の時代へと入る混沌とした時代でした。無論、この日本も例外ではありません。第二次世界大戦の敗戦国の一つであるこの国は、連合軍から間接統治を受けるという形でGHQ、連合国軍総司令部が置かれ、復興へと足を進めていました。ここまでなら直接戦勝国の統治を受けず、領土の分断や圧政という最悪の事態を回避できた幸運な敗戦国と日本の事を世界は評価するでしょう。だが、現実は違いました。私達が日々の生活を送っているこの国は、あの時世界中から一つの巨大な拠点として注目を集めていました。音の無い兵器で静かな戦争が始まったが為にね」

第二次世界大戦、それは全世界を巻き込んだ大きな戦いであり、人類がもつ醜惡な闘争本能が成熟した瞬間でもあった。

数隻から十数隻に渡るUボートの群れによる商船への無制限攻撃、爆弾を抱えた航空機や炸薬搭載の特殊潜航艇による体当たりといった狂気じみた攻撃を行なった特攻隊、地球上最大の破壊力と汚染効果を持つ悪魔の発明原子爆弾。

互いに闘争を行なって潰し合う事にしか自国の価値を見出だせなくなっていた列強各国は、各自が持てるだけの力を暴力的な破壊をもたらす兵器や戦争行為に費やしていた。

その結果として、イタリアとドイツ、そして日本が名を連ねる枢軸国側が戦いに敗れ、主にアメリカとイギリス、ソ連で構成された連合国が戦勝国の栄光を勝ち取っただけの事。

その後の世界に残るのは、各地に残る弾痕と復興に向かって歩き出す各国、そして戦勝国の支配を受ける敗戦国が存在する筈だった。

しかし、当時の世界は第二次世界大戦では飽きたらず、時代は新たな戦争を望み、欲していた。

そう、一般的には冷たい戦争、冷戦と呼ばれた二つの超大国の睨み合いを。

「冷戦初期、丁度朝鮮戦争が始まった辺りでしたか。その時から日本国内の復興が急速に進み始めました。それも、今までとは比べ物にならない速度でした。これは、世界大戦後に発生した冷戦と名の大国の睨み合いの賜物と言えるでしょう。当時の世界はアメリカ合衆国を中心とする北大西洋条約機構と、旧ソ連を中心とするワルシ

ヤワ条約機構にほぼ二分された世界、殆どの国はそのどちらかの機構の傘下に入っていました。そんな中で敗戦国日本はその両者の機構を牽制できる、地政学的にも戦略的にも非常に重要な地点に位置してました。そんなこともあって、第二次世界大戦戦勝国のアメリカは、日本を自身の元で間接統治という形を使い支配し、同時にソ連とアジアを同時に牽制できる対ソ用の一大拠点、反共の防波堤として位置づける条約を結んだのです」

そこで、軍事評論家は長口舌を一度止めて一休止いれる。

一章

「それが現在の安保条約の元になった旧安保条約ですね？」

短い一休止、一瞬の言葉の途切れで声を発したのは、今まで頷くことしかしなかった女子アナだった。

話を再び切り出そうとした瞬間に投げ掛けられた言葉に若干の戸惑いを感じたのか、喉まで出かけていた言葉を飲み込んだ軍事評論家は、代わりに「ええ、そうです」と女子アナに応じた。

先ほどの言葉から一拍後、表面上に浮かんだ若干の戸惑いを押し隠した軍事評論家は、その流れで再び話を続ける。

「この日米安保条約というのは、戦後間もないこの国を復興へと集中させるために、国家の存在を守る防衛力をアメリカが請け負うという物でした。敗戦後、軍隊を完全に撤廃せざるを得なくなった日本にとって、間接的に支配を続けるアメリカからのその条約は粹な計らいとして捉えられるでしょう。何故なら、自身の国土の中にアメリカの支配下である基地を置くという小さな損失で世界の警察を詠う強大な軍隊を防衛力として使えるのですから。当然、当時のアメリカからは、防衛力を日本に提供する日米安保条約は日本側に有利すぎるのではないのかという意見が下院議員から出たこともあり

ました。だが、アメリカは日本に防衛力を提供してもお釣りが来るほどの利を安保条約で得ることに成功しています。冷戦下におけるアジアとソ連を牽制する事ができる一大拠点、それは、安保条約反対派を黙らせるには十分すぎる利点でした」

日米安全保障条約

現在は日米同盟とも解釈できるこの条約の締結には、第二次世界大戦後から冷戦へと戦闘の場を移そうとする特異な世界が一役をかつていた。

第二次世界大戦という世界中を巻き込んだ狂乱の戦争、それは終結後の世界に二つの副産物を生みだした。

そう、戦勝国と敗戦国との支配関係と、戦勝国である二つの超大国同士の新しい戦争の可能性だ。

第二次世界大戦の敗戦により、アメリカの支配を受けながら復興に足进行ける日本。

第二次世界大戦の戦勝により、後に同じ戦勝国であるソ連との冷たい戦争を控えたアメリカ合衆国。

日米安保条約はそんな大きな戦争の間という揺籃の世界だからこそ成立したのだ。

何故なら、当時の日本は本土の復興の為に防衛力に回す資金など殆ど無く、自国を守る為の力を完全に見失い、さらに戦勝国アメリカは大戦後に発生するであろう大国同士の睨みあいの為にアジア全土を牽制する一大拠点が必要としていたからだ。

本来なら日本に防衛力を与える日米安保条約、今となつては単純に日米間の軍事協力に関しての取り決めの意味を持つその条約は、冷戦真つただ中の20世紀の世界では別の意味合いを持っていた。

敗戦国である日本を反共の防波堤、対ソ作戦の要になる一大拠点に仕立てあげるという意味合いを。

敗戦から数年が経過してもなお、本土の復興や1946年に施行された平和主義憲法である日本国憲法の条文により、自身が作つた一国平和主義憲法により国家の身体能力である防衛力を退化させた日本は、成熟を迎えた大人から手のかかる赤子へと一気に姿を変えた。

そんな、大人並の頭脳で思考することが可能なくせに、自身の退化した身体に気がつかない日本の姿を見たアメリカ、ソ連との世界を賭した超大国同士の軍備増強戦に望む彼等は、当時の情勢から軍備を殆ど持たない元列強である日本に、ある優位性を見出だした。

ソ連とそれらに追従する共産主義の進行を止める反共の防波堤。

アジア地域全体を牽制できる一大拠点。

つまり、彼等が当時の日本に見出したのは、冷戦を有利に進める事ができる戦略的優位性だ。

「共産主義と社会主義の対立である冷戦、それは敵国より優れた兵器の開発、配備や、間諜や偵察兵器を使用した偵察、そして、敵国を核弾頭搭載の弾道弾の射程範囲におさめることができる拠点による牽制合戦、つまりは脅し合いと言ってもいい戦争で、実際に両軍が矛を交えた大規模な戦闘は数える程の回数しかありませんでした。核搭載の弾道弾という一撃必殺の兵器、そんな最終兵器が蔓延した戦争だからこそ、目にもとまらぬ電撃作戦や、多数の空母や艦載機による空爆、戦艦による野砲千門にも匹敵する艦砲射撃よりも核弾頭を確実に敵国に打ちこめる拠点の確保確保が急務となったのでし
よう」

一章

「核兵器の戦略的有用性、敵国の上空に運びさえすれば一撃で戦局を大きく変えることができる兵器としての特性を考えた上で、ソ連とアメリカ両国は、敵国の領土を核搭載の弾道弾の射程におさめられる拠点の確保や、長射程弾道弾の開発、敵国沿岸部に近づける戦略原子力潜水艦の配備を始めます。その過程でキューバを初めとする様々な国が冷戦の拠点として両国の支配を受けました」

そこで軍事評論家は一端話を切り、長口舌により酷使した喉へ長机に置かれていたペットボトルの水を流し込む。

「その国の中に、私達が今を生きるこの日本もある意味では含まれていました。安保条約が締結された当時は、1950年に勃発した朝鮮戦争の停戦過程が同時進行で行われていました。この朝鮮戦争はその頃まだ発足して間もなかった大韓民国へと朝鮮民主主義人民共和国が奇襲を加えた事により勃発した戦争で、現在も38度線を境に実質停戦とはいえ戦闘は継続されています。そんな、第二次大戦終結から数年後に勃発し、今現在まで休戦という形で生き長らえてきた戦争である朝鮮戦争、この戦争は韓国と北朝鮮間でのイデオロギーの違いから発生した戦闘という側面の他に、もう一つの顔を持つ戦争でもありました。二つの超大国に操られ戦う衛星国。まるで、将棋の盤上に散らばる駒と動かし方を考える棋士との関係、代理戦争という顔二つ目の顔を」

そう話しながら隣に座る二人を一瞥した彼は、先ほどまで口につけていた水のキャップを閉めると、それを元の位置へと静かに置く。

「そういえば、お二人は代理戦争という言葉をお聞きになった事はありませんか？」

水の入ったペットボトルを机の上に置く、その動作を終えた軍事評論家は再び話を続けようとするが、不意に思い出したように彼は続きを話すのをやめて、さっきから頷いたり相槌を返していたアナウンサーにそう問いかけた。

突然投げかけられた問いに対して、若い女性アナウンサーは「言葉自体は聞いたことがありますか……」と言葉を詰まらせる。

そんな女性アナウンサーの対応に、討論内容について何でこのアナウンサーは事前に調べてないんだと、ただ何となく討論番組に目を向けていた纏はそう心中で呆れながら呟く。

それから彼は一度テレビから目を離し、首を後ろに向けて執務机に座る永川を見るが、まだ話を始めるのに少々時間が必要なのか、永川は先程受け取った報告書に目を向けたままである。

話を始めるのにまだ時間がかかるのならいつそのこと少し寝ていようと、纏はテレビ画面に視線を戻さずに目を閉じようとする。

「ええ聞いたことがあります、朝鮮戦争やベトナム戦争、イラク侵攻といった対戦国のバックに米ソがついた戦争。つまりは冷戦時に米ソ間での全面戦争を回避するためや開発した新兵器の試験といった目的で、衛星国の戦争に睨みあう米ソが介入するといった新しい形の戦争だと聞いたことがあります」

目を閉じようとした丁度その時、タイミング悪く耳に届いたのは軍事評論家の声では無い男の声、すなわち今まで黙っていた男性アウンサーの声だった。

閉じかけた目を再び開き、ブラウン管テレビに再び向けると、発言した男性アウンサーに対して軍事評論家は「大体そんな感じですね」と感心した様子で相槌を返す場面が映し出されていた。

「この代理戦争というのは第二次世界大戦を経て生まれた米ソという二つの超大国、それが軍備、特に核の増産と研究により睨みあう事で生まれた新しい戦争の形でした。世界大戦中に生まれた最終兵器である核兵器を主体として強大な軍事力を持った米ソ両国、その両国は互いに総力をかけた全面戦争を行いませんでした。強力な力

を持った超大国同士の戦争は無論、両軍に大きな損害を生みますし、それも核兵器を使用した全面戦争を行えば両軍だけではなく、そこに住む人々は死に絶えて、上空には死の灰が降り注ぎ、両国は甚大な被害を被り国家として存亡することはできないでしょう。しかしながら、戦争行為を行わないと開発した新兵器を実戦投入する事もできずに、軍需産業に割く予算と利益のバランスが崩壊し、両国は膨大な軍事支出に耐えれずに経済的な崩壊へと足を進めることになります。そこで両国は全面戦争を回避しつつ適度に軍需支出と利益のバランスを保てる代理戦争という新たな戦争の形を実践しました。この代理戦争というのは、超大国に追従する衛星国、これが起こした戦争へ介入したり、資金援助や圧力をかけて戦争をしざる状況に追い込み、それによって発生した戦争に介入することにより、強大な大国同士の全面戦争を避ける戦争の方法です」

一章

「この、代理戦争という方法により、米ソ両国は核や大軍同士による全面戦争を回避しながら、冷戦を続ける為の原動力である膨大な軍需と世論の賛成を得ていたのです」

そこで切られた評論家の言葉に、彼の声に真面目に耳を傾けていた女性アナウンサーは小さく頷く。

「核や大軍同士による大規模な殲滅戦、両国が巨大な戦力のぶつかり合いにより破滅へと向かう選択肢は、代理戦争によりその可能性を薄れさせていました。だがしかし、両国が核兵器と大軍を保持している限り全面戦争の可能性は消えません。もし、代理戦争から転じて大規模な核戦争や殲滅戦になった場合、核搭載弾道弾と強襲揚陸部隊をすぐさま送りこめる拠点が必要となります。そこで、先ほど述べた通り米ソ両国は核弾頭や大軍を持ちこめるキューバ等の拠点を死に物狂いで獲得し、それを運用する事に努めました。その結果、アメリカは日米安保条約によりアジア一帯を牽制できる巨大な拠点、日本を手に入れることになったのです。この、日米安保条約というのは日本とアメリカ双方の利害が一致したことにより締結された条約です。当時の日本は第二次世界大戦時に行われた連合軍の戦略爆撃により国内の工業都市や主要港、主要都市の殆どを破壊されていました。そこから戦前以上の水準まで都市を回復させるには第二次世界大戦につき込んだ戦費以上の資金と労力を必要としたでしょう。下手をしたら数十年の時を費やしても、戦前の水準へと戻

することはできなかったでしょう。しかし、現実には我が国は朝鮮特需と高度経済成長期という未曾有の特需景気の助けを受けて1960年代には東京オリンピックといった国際大会を開くまでの余力をもつようになりました。それは、ひとえに日米安保条約の利害関係があつたおかげなのです。自国の国土を米軍基地、つまりは米軍領土として扱う安保条約第六条の基地許与により、日本は領土内に米軍の戦力を持つことになりました。自国領土を米軍基地化し、ソ連を基幹とするユーラシア、アジアの社会主義勢力をせき止める反響の防波堤になる代わりに日本はアメリカからある代償を支払われました。それは、防衛力と戦争特需です。当時、いや、今もその能力の増減はあるとはいえ、ほぼ全世界に軍事プレゼンスを展開できる米軍の戦力は間違い無く世界の頂点に鎮座しています。そんな、大国にして超軍事国家であるアメリカ合衆国の抑止力、強大な力の一部を日本は国内に小さなアメリカ合衆国を抱え込むと言う事で手にしたのである。世界一の強大な軍事力に守られていれば、より多くの予算を国土の復興にあてられるという訳です。それと同時に、冷戦勃発から数年後立て続けに起こった代理戦争、先ほどお話しした朝鮮戦争やベトナム戦争において、破損した戦闘車両や航空機の修理や戦争に使用する武器の増産を日本が請け負う事で大きな特需景気が訪れ、これもまた、日本の急速な復興を手伝ったのです。このように、日米安保条約というのは日本とアメリカ双方の利害が一致したことにより締結された条約です。世界の警察の名のもとに汎アメリカ主義を掲げながら、社会主義の奔流を根絶やしにしたかったアメリカ合衆国、彼らはソ連とアジアに蔓延る社会主義をせき止める防波堤を必要とし、第二次世界大戦時に受けた戦略爆撃、原爆投下を基幹とした焦土作戦で国を維持できる体力を失っていた日本は、飢えをしのぐ食料と弱り切った自身を守ってくれる保護者を必要としていた。国力云々の話は別にして、互いに冷戦以後の世界をうまく生き抜くためのピースが欠けた両国だからこそ、この敗戦国と戦勝国間の軍事同盟に近い異例の条約は結ばれたのです」

そこで話す内容がひと段落ついたらしく、数分ぶりに軍事評論家の声がスピーカーから途絶える。

「なるほど、それではこの日米安保条約という条約は、戦後の極貧状態から脱出しようと思死にもがき苦しんでいた日本と、ソ連との冷戦構造に少しでも有利になろうとしていた大国アメリカ合衆国。互いに必要としていた力を両国間の結びつきで手に入れようとした結果ということですね」

途絶えた評論家の声の代わりに、次は難しい顔をした女性アナウンサーの声が電波から音声に変換され、ブラウン管と一緒に内蔵されたスピーカーから纏の耳に到達した。

「では、今日の討論の議題である日米安保条約の必要性、これについてお話していただけますでしょうか？」

彼女は更にそう言葉を続け、軍事評論家に話すように促す。

わかりましたと言っかのように彼は小さく頷くと、再び口を開いて話を始めた。

一章

「双方の利害が一致したことによって結ばれた日米安保条約は、締結からしばらくはその機能を存分に発揮していました。アジア・中東地域で起きる数々の代理戦争や武力介入、それに戦力を投入する為に日本は中継基地として大きな役割をし、冷戦構造下において反共の防波堤としての機能を完全に果たす事ができ、同時に代理戦争による特需景気は、乾ききった日本の身体を潤します。しかし、その日米安保条約が利害関係のある、本当の意味で条約として機能していたのは冷戦が続けられている世界の中だけだったのです。大戦争というのは飽くなき消費戦です。戦争によって儲かるのは軍需産業、つまりは造船や製鋼、航空機や兵器生産に携わっていたり、軍部との関わりが深い一部の大企業だけで、資源や国民は過剰な徴用で枯渇され、国庫は軍需産業に資金を吸い上げられ疲弊し、国土は敵国の戦略爆撃や艦砲射撃で破壊しつくされるでしょう。それを考慮すれば、いくら世界を支配できるほどの強大な国力を持った巨人といえども、その力には限界があることがわかります。核の増産が主な牽制の手段となっていたこの冷戦にも、国家の限界は訪れました。それが、1889年のマルタ島での冷戦終結であり、交戦国の片割れであるソビエト連邦の解体です。長期にわたるこの冷戦という戦いは、過去に起こった大戦争と比べても謙遜の無いほど国力を消費した戦いだと私は認識しています。そんな、下手をすれば世界が破滅しかねない核戦争の可能性、それが消えた事により、世界の緊張は一気に緩和されました。だが、それと同時に日米安保条約の利害関係に大きな綻びが生じ始めたのです。

「日米安保条約は先に話したように、豊富な国力を持ちながら、共産主義の蔓延を防ぐ防波堤を求めていたアメリカ合衆国、地政学的に冷戦状況下で大きな戦略的拠点となりうる可能性を秘めながら、

第二次世界大戦敗戦により国力を失っていた日本。この両者の利害が一致したことで締結された条約です。しかし、冷戦の終結は、その両国の利害関係を大きく崩す事になったのです。冷戦状態の時は資本主義と社会主義、この二つの主義に世界は殆ど二分され、資本主義国の親玉であるアメリカ合衆国と安保条約を結んだ日本は、アジアやソ連を牽制するための一大拠点としての機能を発揮し、同時に、代理戦争で破壊された兵器の修理を請け負う事で国内は大きな特需景気によって潤う事になりました。そうして日米両国は、反共の防波堤と戦争特需という互いに一番欲していた物を、冷戦によって手に入れることができました。しかし、ひとたび冷戦が終結してしまえばどうでしょうか。敵国として認定していた社会主義国会であるソビエト連邦は膨大な軍事支出と冷戦の緊張に耐えきれず解体の道を歩み、冷戦下ではアジア全域を抑えることができる一大拠点としての能力を持っていた日本は、一気にその価値を失いました。すると、日本を反共の防波堤に仕立て上げるという主旨を持った日米安保条約は、冷戦の終結により、日本に防衛力を与えるだけの条約と変化します。これにより、対等な利害関係を保っていた安保条約は、アメリカにとって非常に不利な条約となりました。何故なら、それまでソ連やアジアを牽制する為に駐留していた米軍海兵隊は、冷戦終了で余剰戦力になり下がり、その余剰戦力の維持にアメリカは疲弊しきった国庫から資金を割かなければいけなかったのですから」

そこで、女性アナウンサーが「すいません、質問をしてもよろしいでしょうか」と話を途切れさせる。

その申し入れに評論家は柔和な表情を浮かべると、「ええ、私で答

えられることであれば何でもどうぞ」と答えを返した。

「冷戦が終結したことにより、微妙な利害関係により釣り合いが保たれていた安保条約が、一気にアメリカ側に不利になったのはわかりました。では、何故アメリカはこの安保条約を改訂や破棄するなりして、少しでも自国の負担を少くしようとしないのでしょうか？」

女性アナウンサーの問いに「いい質問をしましたね」と返した評論家は、その流れで話を続ける。

「冷戦が終結した事で、日本の戦略的な優位性は半減し、日米安保条約はその名の通り日本に防衛力を貸し与える条約となりました。それではアメリカにとってこの条約は、国庫の首を絞めるだけの無駄な条約です。特に、冷戦終結後のアメリカは、果ての無い生産競争にその強大な国力を奪われつつありました。現在でこそ世界一の超大国としてこの世に君臨していますが、冷戦終結後の世界では、疲弊しきった国庫のお陰で、彼らなりに苦汁を舐めた事でしょう。そんな辛い世界状況の中、日米安保条約を自身に再び有利な物に改訂するか、安保条約そのものを破棄してしまえば、海兵隊の維持費も削減され、戦後の大きな負担も幾分か楽になったでしょう」

一章

「でも、彼らは沖縄に駐留する海兵隊、本国から見れば余剰戦力となり下がったそれを、日米安保条約の改定、破棄により本国に呼び戻そうとはしませんでした。何故、わざわざ負担として残った日米安保条約を改訂、又は破棄しなかったのか？ それは、冷戦後の世界情勢と国内世論が大きく関係しています。確かに長期的な見方で考えれば、戦略的優位性を失った日本に駐留する在日米軍は本国にとって大きな足枷となります。それでは逆に、安保条約破棄に伴い、この在日米軍を本国に呼び戻すことになれば、どういった事が起きるでしょうか？ 在日米軍を本国に呼び戻すことができれば、今まで日本まで補給しに行っていた装備、燃料は必要なくなり、それだけでアメリカの軍事的な負担は減り、それと同時に国民への負担も軽微ながら軽くなるでしょう。しかし、在日米軍を本国へ呼び戻すには、予想されるいくつかの問題を解決する必要があります。まず一番に問題となってくるのは、在日米軍を本国へ戻す為の費用です。凡そ四万を超える巨大な在日米軍、それを本国へ呼び戻すには輸送機や輸送艦を何度も往復させる必要があるうえ、沖縄には多数の航空戦力と艦艇が存在しています。それらを本国へ戻すとすれば、その燃料費や人件費といった輸送にかかるコストは莫大な物になることが容易に予想できます。冷戦終結後のただえさえ景気が落ち込んだ世界でそれを実行していたとすれば、アメリカの各地では重税に対する住民による反対運動が起き、下手をすれば政権が崩壊する程の大暴動が発生していたでしょう。それに加えて、沖縄や横須賀から帰還した在日米軍のその後が大きな障害となります。日本に常駐する四万を超える在日米軍、冷戦という極度の緊張下では反共の防波堤の実質を担った彼らですが、いざ冷戦が終結してしまえば、本国に十分な戦力が保持されており、なおかつ財政状況が厳しいとなれば、如何に強大な軍組織であろうとも余剰戦力として見る他あり

ません。そんな余剰戦力を、何の考えも無しに本国へ戻したとしたら一体どうなるのか？ 冷戦終結の煽りを受けた事により、世界的な軍事プレゼンスを徐々に低下させる米軍ですが、本国を守るのに陸海空軍共に十分すぎる戦力を保持しています。そのような中で在日米軍を本国に呼び戻せば、余剰戦力として考えられている彼らは解体され、同時に本国の米軍は大きな編成改変を開始する事になるでしょう。その際に軍に残れた人間はいいかもしれませんが、四万の巨大な戦力の編入に伴って、米軍の中からは本国軍、在日軍関係なく多くの失業者が出ることになります。何故なら、経済情勢が非常に不安定な中で在日米軍が戻って来たとしても、彼らに与えるポストや役職が非常に少ないからです。そうして、国に見放され、不況の世の中という極寒の大通りに閉め出されることになる多くの米軍兵士は一樣にして吐き捨てるはずです『この国は用済みになれば平気で国民を見捨てるのか？』とね」

先ほどまで静かな口調を続けてきた軍事評論家、それとは違い、今の彼の言葉は若干語気が強められていた。

「そうやって解雇された軍人の中から、自身の都合だけで職と階級章を奪った政府を恨む人間が生まれるでしょう。そんな彼らが、重税に反対する勢力、しかも過激派に参入したとすれば考えただけで恐ろしい話です。解雇されたとはいえ彼らは軍人、軍で正しい銃の使用法や、対人格闘術を教え込まれています。それとアメリカの銃社会が相まって、市民のデモは暴動へ、そして下手をすれば、暴動が解雇された軍人によるクーデターになりかねない。そうなった場合、憎しみの対象である在日米軍を呼び戻す事を決定した人間、す

なわち大統領とその取り巻きは、暴動を鎮圧するか静観するかの一択から行動を決定せねばなりません。暴動を静観すれば、暴動者達によって彼らは権力者の玉座から引きずり下ろされるでしょうし、鎮圧を断行すれば、国内世論は暴動を起こした人達の真意に気づき、次の大統領選では指示を得られない可能性があるでしょう。政局の大きな変化、それを恐れるが為に、アメリカは沖縄をはじめとする在日米軍を本国に戻そうとしないのです」

軍事評論家が、これから熱弁を振るおうとした丁度その時、永川の執務室に、扉を叩く軽い音が三回ほど響き渡る。

突然響き渡ったノックの音に、纏は今まで見ていたテレビ画面から目を離し、体ごと後方を向いて執務室のドアに目を向けた。

「おう、入れや」

そのノックにそう反応しながら、永川は手にしていた報告書を机の上に放り、代わりに手にとったリモコンでテレビの電源を落とすと同時に、ブラウン管に送られる映像信号が消え失せ、電源が落ちる気の抜けた音が耳に届いた。

一章

複数の分隊を統括する中間管理職を担う永川、彼の執務室を訪れる者といえば、彼の上官である部隊幹部が、事案に関する情報提供者。今まで纏が目にした来客者から考えればその程度だった。

その過去の記憶と永川の話し方から、今回の来客者は上官では無く、情報提供者か内通者と判断した彼は、一応の礼儀としてソファーから立ちあがろうと足に力を込める。

その瞬間、先ほど自分が入ってきた木製の扉が勢いよく開いた。

開いた扉の奥からまず飛び込んできたのは、肩にかかるかかからな
いかの茶色がかった黒のセミロングの髪、そこから覗く穏やかで柔
和な二つの目だった。

穏やかそうदैいて何処か勝ち気な色を浮かべる目、その中心から伸
びる鼻は線が細く、柔和な顔立ちを引き締めているようにも見えた。

そして、すうつと結ばれた形のよい艶のある唇は、全体的に幼さが
残る顔立ちに少々の人つぽさを加えていた。

身長は恐らく百六十センチあるかないか、全体的に少し細めな身体

のラインに、美人の平均があるとすれば間違えなくその上に位置するであろう整った顔を備える少女。

ドアを開けて執務室に入ってきたのは、纏の想像した人物像とは全く真逆の人物だった。

黒いスーツ姿の彼女は、軽く一礼すると、執務室の扉を両手で閉めて永川の机の前まで歩いてくる。

「お前もこっちに来い」

永川の手招きと呼びかけに、一応は立ちあがる準備をしていた纏は、程良い反発のソファから腰を上げて、机の前に立つ少女の隣に足を進めた。

その際に少女が笑顔で軽く会釈をしたので、社交辞令ということでも纏も無愛想な表情ながらも、体を傾け会釈を返す。

会釈が済み、二人が並んでから一拍ほど間を置き、永川が口を開き、話し始めた。

「紹介しよう、情報戦部隊の方から転属になった風間明日香一曹だ。今日からお前と安川の班へ情報統括兵として配属する。もしかしたらお前の観測手として仕事をしてもらうかもしれん。仲良くしてやつてくれ」

そう言った永川は、机の上にあつた書類の山の中から上層部からの辞令らしき書類を取り出し、それを、机を挟んで対峙する明日香へと手渡す。

永川の話す情報統括兵、これは近年部隊内で進んでいる兵装近代化による影響で新たに考案された兵科だ。

非公開ではあるが、恐らく数百人は存在しているであろう対人戦闘舞部隊は、基本的に二人から十人構成による多数の分隊に分けられている。

その分隊を、昔は一線を張れる程度はあつた体力が減少し、代わりに長いPSF部隊勤務で戦略的な見方ができるようになった三十代の構成員や、防衛大学を出たキャリア組が指揮することにより、今まで部隊は一定の行動をおこなうことができた。

しかし、近年の軍装の電子化、近代化と、部隊に引き込める人間の

減少により、複数の分隊を一人の指揮官が指揮し、指揮能力が年を追うごとに低下しているのが現状となっている。

そこでP S F部隊幹部は、そういった状況を打開するために複数の分隊の状況を一人の指揮官に伝える情報統括兵の配備を進め始めたのだ。

情報戦部隊から選抜された情報戦技術と身体能力の高い者に対人戦闘部隊に近い戦闘訓練と、高度な暗号作成技術を叩き込み、最新の小型で高出力な通信装置とノートパソコンを配備された情報統括兵は、前線部隊の刻一刻と変化する状況を逐次伝える指揮官の目として機能させることを目的とされ、2010年現在、P S Fの一部の分隊にのみ配備されているらしい。

永川が明日香に辞令を手渡すその間に、纏は彼の話に出てきた情報統括兵に関する少ない記憶を脳の奥底から取り出し、心中で反芻していた。

ということとは、俺の隣にいるこいつは、情報戦部隊の中でもかなりの実力を持っていた人間か……。

今まで適当な場所に向けていた視線を隣に立つ風間明日香と名の少女に向け直してみたが、外見だけ見れば、情報戦部隊の一員という

よりも、街を友人としやべり歩き、青春を謳歌している女子高生程度にしか見えない。

外見で人を判断する事は愚行と、部隊に入ってから耳にたこができるほど教えられてきたが、風間明日香の割と細身な身体は、やはり、戦闘と情報統括の二色を塗りつぶす情報統括兵のイメージとは全かけ離れていた。

「風間明日香です、今日からよろしくお願いします」

こいつが本当に戦闘と情報統括の二役を務められるのか？、と永川に目で問いかける中で、辞令を受け取った話題の中心人物は、纏にそう言つと、右手を差し出して握手を求めている。

一章

あまり人とは関わらないことを信条としている纏だが、流石に握手を拒否するのは後々空気を悪くし、話をかえって長引かせると考えたのか、「ああ、よろしく」という抑揚のない声と共に、差し出された手を軽く握り返す。

彼女の手を軽く握った時、指先が軽く手の甲に触れた。

細く、強く握ったら壊れてしまいそうなその手は、芯に確かな温かみを宿しており、それは、明日の容姿と相まって、彼女の温厚な性格をよく表わしているように思えた。

それから少し顔を上げると、丁度、正面に立つ明日香と目が合う。

優しそうな色を見せる彼女のその目は、やはり、戦闘と情報処理を同時にこなす兵士というよりも、普通に日常生活している少女の物としか思えない。

目の前に立つこの少女が、本当に情報統括兵として機能するのかという一抹の不安が浮かぶ中、纏は彼女から目を離し、永川に話を続けさせようとする。

だが、その動きは明日香が不意に浮かべた笑みによって止められた。

社交辞令なのか、自分に対する好意で浮かべられたものなのかかわからなかったが、浮かべられた笑みに、纏は永川に移そうとしていた視線を無意識に彼女へと戻す。

浮かべられた屈託のない笑み、それを見た瞬間、今まで一定のリズムを保っていた心音が一気に跳ね上がるのが自分でもわかった。

純粹で魅力的な微笑み、明日香の見せるそれに、無感情な心の根底が揺り動かされる未知の感覚を味わった纏は、自分の耳の辺りがほんのり熱くなっていることに気づいた。

「永川さん、一つ質問してもいいですか？」

急に襲われたその感覚を振り払うように明日香から目を離し、握手に使った左手をすぐさま体の左側に戻した纏は、少々紅潮した頬を必死にいつもの無表情に戻そうとしながら、永川にそう語りかける。

対して永川は、いつもの軽い調子で「おう、何だ？」と返事していた。

「近年始まった部隊再編で、他の部隊で配備の進む情報統括兵がうちの分隊にも配備されたのはわかります。しかし、隠密行動を身の上とし、独自の指揮下に入ってるうちの第0分隊にとって、情報統括兵は情報の漏洩の可能性を高めることになりませんか？」

そう言った纏の、情報統括兵に対する懸念は最もだった。

P S F 部隊に現在進行形で配備が行われている情報統括兵、これは、複数の分隊の指揮を容易にして作戦行動を迅速に行えるというメリットがあるが、同時に通信時の電波等から、部隊の位置や存在を悟られる可能性が出てくる事が予測される。

現在は、P S F 部隊が紛争や戦争に出向いて実戦を行う世界情勢では無いので、部隊の位置や存在が露呈したとしても、小銃で銃弾の雨を浴びせられて殺害されることも、駆けつけた爆撃機編隊から絨毯爆撃を受けて爆死することも無い。

だが、その代わりに情報統括兵が行う膨大な情報は、一般社会から隔絶されたP S F 部隊の露出範囲を広げる可能性を大きくするだろう。

何重もの暗号化が行われた情報統括兵からの通信や電子メールが、分隊の行動範囲にいた何者かに傍受され、更にその通信を傍受した人物が、暗号や情報システムに精通している人間だったら？

通信を傍受した人間が世間的に有名なジャーナリストで、高度に暗号化されたそのファイルを不審に思ったら？

意図的に配置された他国の間諜、彼もしくは彼女が、傍受したそれを本国に送り、相応の処理能力を持ったコンピュータでの解読を始めたとしたら？

情報統括兵を配備することで大きくなる部隊の露出と、世間への発覚の可能性、それは、一様に憲法第九条に違反する戦闘集団の世間への露呈と、そこから始まる大きな清算の嵐という結果を体现させるだろう。

恐らく組織上層部は、そういった事態を起こすことが無いように、傍受されにくい通信方法や、配備されるPCの自己破壊機能、選抜された情報戦部隊の隊員に対する訓練はぬかりなく行われている。

そこから、普通の分隊に配備する程度ならば、情報統括兵は最低限のリスクで大きな指揮能力を得られるだろう。

だが、そんな恩恵が得られるのは通常の分隊まで。

纏をはじめとする対人戦闘部隊の中でも最高クラスの戦力を持った人間、彼らが集められた第0分隊においては、その事情は違っている。

有事の際の特殊潜行艇を使用した強襲揚陸作戦や、空挺からの降下作戦、P S F部隊の中でも、そういった孤立無援の状況下で動く事を前提とされた第0分隊は、最高クラスの戦闘能力と、自分の考えで作戦を遂行できる確固たる意志を保持している。

その能力は、指揮官がもし死傷して指揮をとれなくなったとしても、単独で各々が次にとるべき行動を考え、作戦行為を続行できるほどだ。

一章

そんな圧倒的な戦力と、下命だけで全てを遂行できる自己完結性を兼ねそろえた部隊にとって、情報、通信を統括する機構が必要か？
答えは否だ。

情報統制や要人の護衛程度ならば、もし情報統括兵の不手際で部隊の内情が知れ渡ったとしても、然るべき処置や、「自衛隊の人員を使った訓練」等と言ってしらを切り通す事で、何とか情報の漏洩を防ぐことができる。

何故なら、災害支援やイラク戦争への派遣により多少なりとも株は上がったものの、この国で日常生活を送っている人間達にとって、自衛隊はまだ遠い異国の情勢みたいなもので、全くといってもいいほど関心が持たれていないからだ。

自国の安全保障にすら興味を示すことができない日本国民、然るべき情報統制や口封じが行われれば、欺瞞されたメディアから、正しい真実を見つけたすことはほぼ不可能だろう。

だが、行われた作戦行為の内容が殺人だと話は違ってくるだろう。

もし情報統括兵がへまをやらかして、通信や電子メールが何者かに傍受されたでしょう。

急に飛び込んできた隠語だらけの会話を不審に思った傍受者、彼もしくは彼女が、電波の発信源を探れるような設備を有していて、それを使い、射殺または刺殺の現場を目にしてみうかもしれないし、傍受された電子メールが公開され、プロテクトが何十にもかけられたそれが怪しまれるかもしれない。

そこから、今まで行ってきた情報統制や暗殺の露呈という綻びができる事で、アメリカに装備を合わせただけで安保の帳尻を合わせたつもりになっている国民、その中に点在する“目の肥えた”人間達は、部隊の存在に気付き始めるだろう。

そして、部隊の存在を完全に掌握した“目の肥えた”人間達は、部隊の存在を気にもかけない人々に情報を漏らす火種となってゆく。

普段は安保に対して全く興味を持たない癖に、ただえさえ脆弱な軍を軍縮することと、持論の一国平和主義を頑なに守ることに定評のある彼らは、いわば“戦える自衛隊”が起こした暗殺事件という高温の発火源を知った瞬間、可燃性のガスのように燃え上がり、部隊の存在もろとも燃やしつくそうとしてしまうだろう。

それどころか、彼らの非難は、芽づる方式で発覚する今まで暗殺や情報統制を指示してきた政府首脳陣や部隊創設に関わった人間達にも向いてゆく事が容易に予想できる。

それはつまり、秘匿された部隊情報の世間への露呈であり、部隊に対する口封じ、清算の対象となる事故となる。

二重三重にも情報漏洩に対する防護策を講じていることで、そういった致命的な事故が起こる確率は非常に低くしているが、それが起こる可能性はゼロではない。

ただええ難易度が高く隠密性が重要になってくる、要人の暗殺を始めとする標的の死が約束されている任務、それらを優先的に回される第0分隊にとって、いくら指揮能力が向上しても、情報の露出が増える事は大きなデメリットにしかないだろう。

その事を永川も一応は懸念していたのか、「確かにその可能性はある」と、彼は小さく頷きながら纏の問いに言葉を返していた。

「だが、今回の第0分隊への情報統括兵の配備は部隊上層部の意向でな、今から話す次の事案の内容にもそれが関係してくる」

横目でちらりと見た明日香の持つ辞令には、普段は分隊長クラスの人間のサインが入る場所に、『本部勅命』の四文字の赤いインクが刷り込まれていた。

普通は分隊長間の話し合いで決定する部隊の人事、それが部隊上層部に動かされ、さらにはその人事が次の事案の布石となる。

永川の話と、風間明日香の持つ本部勅令の辞令から読みとった情報を元に考えると、次の事案は自分の所属する第0分隊が部隊上層部の指揮下に入ることが予想できた。

自立した指揮系統で、与えられた事案に対して常に最良の方法を考えながら行動する第0分隊、日本の中で唯一、確立された自己完結性を保持するその部隊が、部隊上層部から細部に至るまで指図を受けるのは恐らく初めてのことだろう。

現有している中で最高の戦力を、上層部が直々に指揮しなければいけない事案、それは、今までのような生易しい事案では無い筈だ。

そう、今までのような一方的な狙撃や非武装対象との交戦ではない、もっと強大で複数のターゲットを相手にしないといけない可能性、永川の話と辞令から、次の事案の内容について予想を立てようとしていた脳裏に浮かんできたのは、大規模な戦闘の可能性だった。

「新顔との対面も済んだことだ、次の事案について少し話しておこう」

永川が発した話の発端となる言葉、それが聞こえてきたのは、次の
事案に関する問いを彼にぶつけようとした瞬間だった。

一章

彼はそうとだけ言うと、キャスター付きの椅子を滑らせながら、執務机の右隣に移動する。

執務机の脇に乱雑に重ねられた書類の山、それよりも少し遠い机の右脇に置かれた鍵付きのアタッシュケースの持ち手を引き寄せた永川は、机の一段目の引き出しに片づけられていた鍵で、その施錠を解除した。

それから、机の上でアタッシュケースを開いて見せた彼の太い腕の中から覗いたのは、ケースと同じ表面を見せる黒塗りのファイルだ。

作戦計画書の原本、それが偶然だったとしても、外部からの閲覧を許そうとはしない排他的な黒の表面、実際にその現物を見るのは初めてだった。

普段はUSBや電子メールといった様々な手段で画像データとして送られてくるそれが、スキャナーで電子データに変換する時間を惜しんで、アタッシュケースに納められて送られて来たという事実。

それは、次の事案が早急に解決すべきものという事を裏付けていた。

危険で、それでいて迅速に解決しなければいけない巨大な事案、その内容が納められているであろうそれを、纏はただじっと見つめていた。

そんな纏とは違い、黒色の作戦計画書を手に取った永川は意外にも楽天的だった。

硬い無表情が張り付いた能面の彼とは裏腹に、「因みに、俺もまだ中身を見てないんだ」と話しながら明日香に笑いかけた永川は、手にしたファイルの黒い表紙を静かに開くと、状況と作戦目標が記されているであろう一ページ目に目を通し始める。

纏としては、一刻も早く遂行されなければいけないであろう事案の内容と、作戦の遂行日時を理解して、そのまま帰路について酷使した体と精神に安眠を与えたい所だった。

だが、一応は第0分隊の指揮官である永川を差し置いて作戦計画書を読む気はさらさらないし、もしそれをしたとしても、格闘戦では部隊の中では右に出る者がいない彼の拳骨が、一瞬で顔面の何処かにめり込んでることだろう。

むしろ、そうした方が一発で眠気が晴れていいかもしれないと一瞬思いはしたものの、訓練兵時代に何度か顎に食らったその痛みを思い出せば、そんなことは行動に移せなかった。

思い出された昔の痛みに苦虫を噛み潰したような表情で顎を擦る纏に、黒い作戦計画書を前にしながら笑みを浮かべる明日香と永川。

傍目から見れば、何処かシニールな執務室での光景、ゆったりとしたその空気が一気に急変したのは、永川が言い放った「冗談はよせよ……」という言葉だった。

彼が吐き捨てるように言い放った短い言葉、それに反応して向けた視線には、作戦計画書を目にし、あからさまに表情を曇らす永川がいた。

「どんな内容なんです？、永川さん」

もう永川の指揮下に入って数年は経っていたが、彼が作戦計画書にそんな表情を向けたのは初めてかもしれない。

永川の苦い表情を目に入れながらも、彼から黒色のそれを奪い取る口実を言葉で作った纏は、永川に寄こせと言わんばかりに左手を突きだしていた。

纏の動きに、永川は「読めばわかる」と、不機嫌そうに作戦計画書を閉じて渡す。

その内容を記録しているとはいえ、実行した時に動く命や情報一つの重みも無い計画書を受け取った纏は、そのままそれを自分の方に引き寄せ、表紙を開き、白紙の一枚目を摘んだ。

いつも画像データとして送られてくる作戦計画書は、必ず一枚目に作戦目標と、状況についての簡単な要約が書き込まれている。

その事を知っていた纏は、一ページ目に納められた白紙を開くと、まずは簡易的にも作戦内容がまとめられているその文字列に目を通し始めた。

明日香が両手を後ろで組み、隣から計画書を覗き込む中で、彼はきちんと整列した文字列を速読し、その内容を頭に記憶してゆく。

作戦計画書を読む纏と、横から覗き込む明日香、彼らに対峙する永川が無言になることで、執務室は完全に音響が失せていた。

「某国工作員、今回の標的は武装したうえにそれなり以上の訓練を積んでいる相手。厄介ですね」

数十秒後、印刷された文字列の上部に位置する作戦目標、そこに刷り込まれていた『某国工作員が盗み出した機密情報の奪還、または破壊』という項目について言及する言葉が短い沈黙を破る。

手渡された計画書、そのページ目に視線を向けた時にまずはじめに飛び込んできたのが、今、言及したそれだった。

奪取された情報の内容や、情報を奪った某国工作員の目的については全く示されておらず、ただ、部隊に依頼を出した者のエゴしか記されていないのはいつも通りだったが、標的が武装した複数の人間というのは久しぶりだった。

一章

ついさつき始末した防衛省に侵入したスーツの男をはじめとする標的、中には何処で手に入れたかは知らないが、粗雑なコピー品のトカレフ拳銃やダガーナイフといった銃器で武装していた者もいたが、その殆どは自動小銃やボルトアクション式ライフルといった“戦争に使用する銃”で射程外から容易に射殺できた。

だが、今回の作戦計画書に記された標的は、今までの者とは比にもならない戦力を持っている。

力量がどうかは別として、自分と同程度位かそれ以上の訓練と経験を積んでであろう工員複数に、今まで相手にしてきた玩具とは比べ物にならない強力な武装、少なくともAKシリーズのデッドコピー品や自動拳銃程度は所持している筈。

恐らくこの事案で対峙する相手は、こちらと比べても謙遜の無い戦力を遺憾なく発揮してくるだろう。

「厄介なのは戦力だけじゃないぞ」

数ヶ月前、警官から奪ったりボルバー拳銃片手に遁走した凶悪犯の頭を、勝者が始まる前からわかつていた銃撃戦の末に撃ち抜いた以来の実戦の可能性にも、ただ無表情に立ち尽くす纏。

彼にそう投げかけた永川の言う通り、問題は相手の戦力だけでは無かった。

「お上はどうやら事を穏便に進めたいらしくな、今回の事案に関して動かす部隊は、風間がこの間まで配属されていた第1情報戦部隊と、俺らの第0分隊だけらしい。それも、標的の工作員の人数や武装、国籍、潜伏先すら割れてない始末だ」

そう、本当に厄介なのは標的となっている工作員の力量でも武装でもない、相手にする標的の情報が非常に不足しているという点と、動かせる人員の数がべらぼうに少ない点だ。

通常、情報統制を行うにしても、殺害前提の口封じを行うにしても、事前に送られてくる作戦計画書には、標的の情報が差し支えない程度に書き込まれている。

それは、始めに立てられた作戦計画が何らかのミスで頓挫したとしても、事案に従事する各々がその情報に基づいて考えることで、クライアントが望んだ帰結へと無理矢理にでも近付けるための物であ

り、その情報がある事で、作戦遂行中に起きた想定外の出来事にスムーズに対応できていた。

だが、部隊上層部から送られてきた事案の計画書には、敵の数や武装、国籍や名前さえも記載されていない。

標的のリーダー格の男を混雑した人混みの中で盗撮した不鮮明な写真、それが、申し訳程度にクリップで留められていたが、このだっ広い関東地区に潜伏している工作員集団を探すには、お守り程度の役にしか立たないだろう。

それでもって極めつけは、動かせる部隊数の限定だ。

今回の事案で動かせる部隊は明日香の古巣である第1情報戦部隊と、第0分隊の二部隊のみ。

二部隊と言っても、今回実働部隊として動くことであろう第0分隊は、お上の差し金で転属になった明日香を合わせても総勢四名。

少人数だが、纏を始めとする構成隊員の全ては対人戦闘において突出した能力を持っており、使用火器も状況に応じて様々な物が使用できる権限を与えられているし、同時に事案に関わる第1情報戦部隊は、極秘裏に打ち上げられた偵察衛星やサイバースペースといった無数の目を持っている。

が、絞り粕のような情報しか手元に無い現状においては、そんな強大な戦闘能力も効力を持たないし、情報戦部隊もいくらサイバースペースでは広大な索敵網を持っているといっても、精々十人程度でのサイバースペースの監視や、軌道が合っていないとその地点を観測できない監視衛星での索敵では自ずと限界が出てくる。

本気で情報を持ち逃げした工作員を発見して、盗み出されたそれを奪還したいのなら、大きなマンパワー、すなわち対人戦闘部隊を全て動かして、関東一帯を風漬しに索敵するのが一番可能性が高いだろう。

今出来る最前の選択を行わなかった部隊上層部、彼らが今回のような成功率の低い作戦を送りつけてきたのには恐らく訳がある。

情報統括兵の実戦における働きを調べる目的、工作員が入手した情報がクライアントを揺るがす一大スキャンダル、あるいは、厳固な砦で守りを固める防衛省のサイバースペースから情報が盗み出された事実そのものを隠匿したかったのか。

現状で予想を立てるには、あまりにも考えられる可能性が多すぎた。

「俺が幹部クラスだったら、公安や桜田門の知り合いに話をつけて

協力を促すことができるんだがな……」

いくらその業界に太いパイプや信頼できる知り合いが居たとしても、上層部が事案に関わる人間の数を制限する理由が明確でない時点で、独断でそれらの力を動かす事は危険だ。

一章

そうやって独断で他の勢力を動かすとなると、検問やデータベースとの照合といった協力を依頼された公安警察や警察庁上層部の知り合いは、相手が武装した工作員という事を知れば、信頼できる同期や部下と協力してそれらの要請に当たる事になる。

その際に、多少は流出してしまう事案の内容が、知られるとまずい人間や機関に渡ってしまったとしたら？

事案に関わった彼らが、まだ詳しくわかってはいない某国工作員と交戦になり、銃創や切創をこしらえてしまったとすれば？

某国工作員集団のリーダーの顔写真や、彼らが逃走に使用した車両の車種やナンバー、普通に業務を行っていたればまず負う事の無い銃創や切創、それらは、それだけではさして意味を持たない情報の一つだが、丁寧に隠匿された事案の概要を知る為の糸口にもなりかねない。

そんな、小さな糸口から、今回の防衛省データベースからの情報漏洩というクライアント側の破廉恥が、痛い腹の内を知ろうとしている人間に渡れば、それを盾にして様々な要求をしてくるだろう。

ただえさえ政府首脳陣の半強制的な採決で設立され、クライアント

側の支持が無ければ平和主義という宇宙と同じ無酸素状態の中に放りだされるであろうP S F部隊にとって、その失敗は大きな損失となる。

下手をすれば生命線であるクライアントを一つ失いかけない愚行、それが一分隊長の独断による行動となれば、更に事態が重大になってくる事が容易に予想できる。

永川が部隊上層部の人間ならば少し話が違ってくるのだろうが、情報漏洩を最低限までに抑えた今回の事案に関しては、彼も独断での協力要請は危険だと考えているのだろう。

「悪い、もうちょっと状況について詳しく知りたいから少し時間をくれ」

でかい図体に合うように仕立ててもらった物らしいオーダーメイドのスーツのポケットから、いつも吸っている銘柄の煙草と愛用のジッポライター、それから携帯灰皿を取り出した永川は、「ちよっと貸せ」と言っ、纏から作戦計画書の黒いファイルを奪い取る。

そこから彼は執務机の上に徐にそれを広げると、取り出した白い箱から一本の煙草を引きだし、口に銜えてライターで火をつけた。

永川が愛煙家を通り越してヘビースモーカーぎりぎりのラインまで達しているのは、こうして会うたびに必ず一本は煙草を吸っている姿を目にしている纏や同僚にとって周知の事実だった。

が、執務室にて黒いファイルに目を通しながら白い息苦しくなる煙を吐き出した永川に、纏は何処かいつもとは違う違和感を覚えていた。

「ここって禁煙じゃありませんでしたっけ？」

突如として感じた違和感、それが言葉となって出てくるのにそう時間はかからなかった。

部隊の日本国内での動きを統制する役目がある防衛省付近に建設された司令部、ここは地下施設という環境上の観点に加え、日本中に展開する部隊の指揮を行うという戦略的重要性から、全館を禁煙に指定している。

その為、地下施設内には喫煙所の類は設置されておらず、永川をはじめとする愛煙家達は、何重にも重ねられたセキュリティの認証を受け、エレベーターで保険会社に偽装された一階部分に上がってから、ようやく外で喫煙を楽しむ事を許されていた。

いくつもある電子ロックのかかった鋼鉄のゲートと数人の守衛、わざわざそれらの許可をもらいながら地上に上がり、そこで煙草を吸ってからまた同じ手順で執務室に戻ってくる。

一回の一服に十数分の時間をかけるのが面倒になった永川は昔一度だけ執務室で煙草を吸ったらしいが、天井に設置された煙を感知するセンサーが煙草の煙に反応してスプリンクラーを動かし、打ち鳴らされた警報に同僚や上司が一堂に駆けつける事件に発展したと纏は聞いていた。

その苦い体験に懲りたのか、それから永川は一服をする時は律義に地上まで足を運ぶようにしていたのだが、今の彼は規律に背いて椅子に身を預けながら煙の出るそれを吸っている。

消防設備がきちんと整備されているのにも関わらず、細心の注意を払いたいが為に喫煙所すら設けない上層部が考えたルールを破る事にいちいち口を出すつもりはなかったが、またスプリンクラーや警報機に作動してもらっては面倒と考えた纏は、そう言った後に天井にあるセンサーに目を向けていた。

「大丈夫、俺の部屋の火災報知機はさっき電源を落としたから」

纏の問いかけにそう返した永川は、満足げな表情で煙草を銜えている。

「成程、でも火災報知機のスイッチはこの部屋にありませんでしたよね？」

地下施設の状況は最深部にあるセキュリティセンターが逐一管理しており、施設に侵入者や異常があれば即座に障害を排除できる体制を整えている。

一章

監視カメラの映像や電子ロックの解錠といった危機管理の全てを請け負うそれには、無論、火災報知機のスイッチも組み込まれている。

護衛艦のCIC並の機密性と防弾・防爆性を持つセキュリティセンター、部隊の施設の中でも厳重な警備が施されているそこは、一士官の裁量で出入りできる場所でも無いし、例え入る事が許されたとしても、私欲の為に勝手に報知機のスイッチを落とす事は許されないだろう。

セキュリティセンター勤務の隊員の弱みを握るか、部隊幹部の人間に金品を渡し、その見返りとして彼に鶴の一声をかけてもらうか。

もし、各部屋にかけられている火災報知機を停止させたいのなら、そのぐらいしか方法は見当たらない。

だが、出世に全くと言っていいほど興味が無いのか、末端の一分隊長として冷や飯を食い続けている永川には媚びを売る上司も居なければ、他人の弱みを知ること無い。

そんな永川が、何故嚴重に警備されたセキュリティセンターにある報知機の電源を落とせたのか？

「さつき風間に頼み込んでな、得意のハッキングでセキュリティセンターにアクセスして解除してもらったんだ」

その答えはファイルをいったん開いたままで机の上に置き、両手の指を動かしてキーボードを叩く真似をした永川の言葉と、自分の隣で悪戯な笑みを浮かべる明日香にあった。

「先程、配属先の分隊長にあいさつという事で永川さんの執務室に一度来たんですけど、その時に執務室で煙草を吸えない事をばやいていたんで少し細工をさせてもらいました」

隣でそう言った明日香は、執務机の端に置かれているノートパソコンを指差す。

「一応そこに置いてあるパソコンがこの施設のホストコンピュータと接続されていたんで、それを使って解除しました。セキュリティはかなり厳重だったんですが、システムに消去し忘れていたトラブルドアが残っていたんで、そこに永川さんの部屋の報知機を止める働きをするプログラムを送りこんだんですよ」

更にそう続けた彼女は、白い健康的な歯を見せる笑みを纏に向けていた。

彼女が浮かべた勝ち誇った表情と専門用語だらけの話に、この温厚な少女が一介の技術者であり、同時に第0分隊に配属された情報統括兵であることを初めて認識させられたのはその瞬間だった。

どういった組織でも、例えば米軍のネットワークや大企業のデータベースでも、サイバースペースの守りというのはそれほどまでに強くない。

全身を甲冑のような防護プログラムや最新のワクチンで覆ったとしても、コンピューターウイルスは日を追うごとに新しい種類の物や亜種が生まれており、同時に攻撃や侵入を加える方は現実世界と違い、一人で数千人が攻め込んだような被害を与えることも可能だからだ。

だが、いくら守りの水準が低いと言っても、この地下施設のサイバースペースの警備網は、米軍や大企業のそれに匹敵する。

そういった警備網に気づかれる事無くハッキングし、自作のプログラムを流し込んだという事は、この風間明日香という少女の高い技術が窺えた。

「いちいち一服を入れるのに十何分かかけて外に出るのは面倒くさいからな、本当に助かったよ」

改めて目を通していた作戦計画書から少しだけ目を離して明日香の方を向いた永川は、笑いながら感謝の言葉を述べていた。

「ばれないようにして下さいよ。セキュリティセンターの連中に知れて事情聴取とか厄介事に巻き込まれたくないですから」

始末書や事情聴取、場合によっては謹慎処分、まるで高校生に与える罰と同じような処分を澄まし顔で煙草を吸う永川を見て予想したのか、纏は少々あきれた表情で呟くように彼に釘をさしておいた。

だが、その言葉の後に「大丈夫ですよ、バレるようなへまはしてませんから」と自分の肩を叩きながらそう言う明日香や、「お前はやつぱり心配性だな」と返事を寄こした永川を見ていれば、やはり胡散臭さは消えなかった。

まあ、バレても直接的な処分は俺には及ばないだろう、と考えた纏は、ひとまずその考えで胡散臭さを紛らわす事にした。

「よし。大体一通り計画書の内容が理解できたから、今の状況について俺が理解した範囲で説明する」

そんな中、計画書を読み終えたと同時に言い放ったその言葉に、「すまん、立たせたままで」と付け足した永川は、吸っていた煙草を携帯灰皿の底に押し付け、それとライターと煙草の箱を脇に押しのけながら話し始める。

一章

「まず、今回の事案の目的についてだが、防衛省データベースから盗み出されたとある情報、それを某国工員から奪還、または破壊する事が今回の目的だ。因みに盗み出された情報に関しては全く内容が公開されていないものの、流出すれば国家の威信を大きく傷つける代物らしい」

作戦計画書を片手に口を開いた永川は、しっかりと目を通したであらう。それを元に説明を行っていた。

「そんでもってその情報はサイバースペース、つまりはインターネットを通してのハッキング行為で持ち出されたものらしく、盗み出した犯人の痕跡は殆ど残っていない」

「ちょっと待ってください」

手にした黒いファイルをめくりながら、そこに書き込まれている情報だけを頼りに説明する永川の声を止めたのは、突然疑問の声を上げた明日香だった。

「防衛省内の機密情報が保存されているサーバールームともあれば、情報流出に関しては何十もの防護策が施されている筈です。ファイアウォールの敷設や様々なコンピュータウイルスに対するワクチンの準備、巡回プログラムによる監視は勿論の事、職員のない夜間帯はサーバーをスタンダアローン状態にしている事が考えられます。スタンダアローン状態によって外部との接続を完全に経たれた防衛省データベースには、ハッキングの類で進入することは不可能ですし、仮にスタンダアローン状態が解除されていても、何十もの防壁に護られた情報までたどり着くには、高い技能を持ったハッカーでも難しいと思います。それなのに何故、インターネット経由で防衛省サーバールームから情報を盗み出されたんですか？」

様々な専門用語を並び立てた彼女は、先ほどまでとは違う真剣そのものの表情で残り二人に対して意見や同意を求めるべく立ち尽くしている。

「スタンダアローン状態？」

そんな彼女とは違い、情報分野の知識は一般人程度しか持ち合わせていない纏にとって、専門用語の入り交じった明日香の話は難解な技術書と同義に値する物らしく、珍しく疑問の色が入った声を差し向けていた。

「スタンドアローン状態、プログラムであれば、他のプログラムや機器に依存せずに作動してる状態にあるプログラムのことで、パソコンだったらネット回線を繋がずに、一つの電算機として作動している状態のことだ。この状態になっっている端末やパソコンは、インターネット経由でアクセスすることが出来ず、情報の改変や持ち出しを行うには直接機器を操作する必要がある」

意外にも纏の疑問に答えたのは、半ば作戦計画書に目を向けている永川の低い声だった。

問いに答えながらそんな事も知らないのかと言いたげな表情を見せる永川、もう三十半ばに差し掛かる彼が情報分野についての知識がある事は意外だった。

そんな事実になんか驚いた様子を見せる纏を他所に、永川はそこから更に話を続ける。

「確かにスタンドアローン状態にしておけば、他の機器やプログラムに依存することがないから、ネットからの接続を絶った状態で情報を保持することが出来る。だが、この状態ではサイバースペースからの進入は防いでも、直接的な進入を防ぐことは出来ない」

スタンドアローン状態にあった防衛省データベース、そこに行われた直接的な進入に、纏は心当たりがあった。それは永川も同じらしく、彼は今まで手にしていた黒いファイルのあるページを纏達に向けて来た。

今時流行らない七三分けの髪から覗く、年齢よりもずっと老け込んで見える横顔に、脂をため込んだメタボ予備軍といったような図体。

そう、工員集団のリーダー格の男の顔写真と同じ要領でクリップで留められたそれには、先ほど防衛省に侵入し、機密情報を所持して出てきたところを自分に射殺された男の姿が撮されていた。

「さっきお前が仕留めた防衛省への侵入者、彼が持ち出したUSBメモリを検分したところ、盗み出されたデータの他に、あるプログラムが忍び込んでいた痕跡が見つかった」

そう言い終えた永川は、先程射殺された防衛省幹部、斉藤宗雄の生前の姿が張り付いたページから更に数枚めくり、彼に持ち出されかけたデータの詳細等がかかれた項を探し出す。

防衛予算の使い道や購入された兵器といった予算関係の情報ばかり

がそこに書かれている事から、この斉藤という男は予算に関係する何らかの汚職について暴きたかったのが想像できた。

だが、今重要なのは失敗した斉藤の計画ではなく、市販のUSBメモリの奥底に潜んでいたプログラムの方だ。

一章

「どうやら斉藤の使用したUSBメモリに新種のワームが潜んでいたらしくてな。それがサーバーからの情報の引き出しの際に流入し、その機能でスタンドアローン状態を解除したみたいだ」

対象のコンピューターにとりつき、事前にプログラミングされた進入経路と侵入方法に従ってシステム中枢部に入り込み、外部からの指令を必要とせず、自立して破壊活動等を行うコンピューターウイルスの親戚。

引き出してきたワームに関する知識、それを考慮すれば、大容量で処理速度に優れ、更にセキュリティが厳重なコンピューターといえども、進入経路と方法さえ熟考されていればシステム中枢に入り込む事は可能だ。

「この資料によれば、スタンドアローン状態をまず解除したワームは、その次の一手として防衛省データベースを民間のインターネットに接続、そこからハッカーが侵入し、今回の事案の火種となっているとある情報を盗み取ったらしい」

永川の話とお上が寄越した申し訳程度の状況に関する情報を聞く分

には、先程射殺し、今頃は死体収容用の袋に入れられながら霊安室への旅を体験している斉藤と名の幹部は、作業員集団と何らかの繋がりを持っていたことが考えられた。

作業員集団の理想に共鳴し、財政関係の情報を盗む振りをして、彼等が作成したワームを流し込んだ狡猾な狐。

それとも、彼等に計画を知られ、情報を抜き取る為のUSBにワームを仕掛けられ利用された無能で鈍純な豚か。

どのみち、彼が生きていれば作業員集団について何らかの情報が引き出せたのは確かだろう。

「直接侵入した人間の方は罔で、本命はネット回線を使って侵入した奴の方だった訳ですか」

こんな事になるんなら頭じゃなくて、足や腹を狙って生かしておけばよかった、と短く舌打ちをした纏だったが、その苛立ちもすぐに表情から沈み込み、「それで、今回のハッキングを行ったのが、計画書に留められていた写真の男なんですね？」と言葉を返す。

「ああ、一応はな」と返事をした永川、彼の表情がその言葉を放つ

た瞬間険しくなったのが見ててわかった。

「この計画書を軽く読んだ分には、さっきの写真の男は国内に潜んでいる工作員、それもこちら側が把握している中で最も情報分野に精通してる男の写真らしい。だから、まだそいつが実行犯とは断定できねえんだ」

そう言った言葉に「お上は俺らにはぐれ刑事の真似事でもさせる気らしいな」と悪態を付け足した永川、彼の気持ちを纏はよく理解が出来た。

いつもならば入念に練られた計画と、失敗をしても新たな考えで打開できる程の情報量、それがあいまる事で難しい事案を難なく帰結まで進めれた。

だが、今回ばかりはかなり状況が違う。

乏しい情報の中で、老練な工作員と小銃や自動拳銃の組み合わせと戦う事になるであろう今回の事案、それは、ポーカーのルールを知らないまま、自分の命を金に換えて賭博をする事と同義に近い。

たとえば、手札に 10・ジャック・クイーン・キング・エースの

組　み合わせが揃っていたとしても、ルールを理解していなければそれがロイヤルストレートフラッシュだと気がつくこともなく、無視されたそのチャンスは失策へと姿を変え、敗北という事実を作り出したそれは、賭けられた自分の命を容赦なく奪う。

それと同じで、動きを制限する足枷を取り付けられ、人数分の小銃を持たされて、そのまま人混みの中に身を投じ、顔も人数も割れていない工作員集団を相手にする事はいつも以上に身に危険が及ぶ確率が高いだろう。

それも、相手が大口徑拳銃や自動小銃辺りを持ち出してくれば、いくら防弾チョッキやボディーマを着込んでいても、銃弾を確実に防ぐことは出来ない。

命中すれば身体に大きな傷害を与え、下手に頭や心臓、その他重要な臓器に向かって飛んでくれば漏れなく即死か出血多量での死亡かを選ばせてくれる銃弾。

久しぶりにそれが空を切り裂き、死を伝える音を思い出した纏だったが、表情に変化はなく、やはり無表情な能面が愚策ばかりが詰め込まれた黒いファイルに向かっていている。

自分が永川の立場だったら、計画書を送りつけてきた部隊幹部の口に銃口をぶち込んででも情報を引き出したい衝動に駆られていただろう。

ただ、
纏には現在の状況の中でそれ以上に気になっている事があった。

一章

そう、それは顔も見えないし声も聞こえないサイバースペース、1と0の羅列が並ぶその世界の中で、何故ハッキングを仕掛けてきた人間が某国工作員だとわかったのかという点だ。

犯襲撃されたサーバーに何らかの痕跡が残されていたり、犯行声明が然るべき機関や組織に出されていれば、サイバースペースから忍び込んだ場合でも、犯人像はおおよそ理解できる。

だが、永川が今のぞき込んでいる作戦計画書を見る限りでは、情報を奪った工作員集団は犯行声明は疎か、サーバーに侵入した痕跡や経路すら割れてはいない。

そういった相手の情報が一切わからない状況、それも事件の発生からそう時間が経っていない中ではどんなに高度な調査を行ったとしても、襲撃者の外見や境遇を知ることが出来る筈がない。

何故なら、サイバースペースからの侵入に関しては、相応の技術があればインターネットにおける住所であるIPアドレスの偽造や進入経路の隠匿も出来るだろうし、たとえIPアドレスを改変せずに侵入してきたとしても、そこから現実に存在する襲撃者の居城を割り出すのには時間がかかるからだ。

確かに、防衛省に侵入して情報を盗み出した男のUSBに、データベースのスタンドアローン状態を解除するだけのワームが紛れ込んでいたのは偶然とはいえない。

防衛省幹部の斉藤は罔、あくまでもサイバースペースからの侵入を成功させるための鍵とほぼ断定できる今の状況ならば、そのワームは意図的に組み込まれた物と判断できるだろう。

しかし、スタンドアローン状態のサーバを解放するためだけのワームを忍び込ませる程度なら、作戦計画書に張り付けてあるアジア系の顔立ちを見せる工作員の他にも、興味本位でデータベースに侵入を試みようと考えている自称ハッカーのような連中にも可能だろう。

にも関わらず、上層部が寄越してきた黒いファイルの中には、アジア系の顔立ちを見せる一人の工作員の不明瞭な写真のみが堂々と張り付けられていた。

事件の発生から数時間、少ない情報と僅かな痕跡のみしか掴めていない現状、侵入してきた連中のIPアドレスすら掴めていない現状で、何故、犯人が某国工作員だと目星をつけることが出来たのか。

無言で立ち尽くす纏にとって、それは大きな疑問の種となっていた。

「取り敢えず協力できる第一情報戦部隊の方にＩＰアドレスの解析を頼むから、それが割れるまでは俺らは待機だ」

ひとまず今はお手上げといった様子で作戦計画書を机の上に放った永川は、同時に「風間、ちょっと来い」と手招きする。

それに呼応した明日香は、突然に呼ばれたせいか少々戸惑いながらも「はい、何ですか？」と、柔らかく答えると、執務机を左側から回り、永川を正面にした所で足を止めた。

足を止めた彼女にそう言った永川は、足元に置いてあった計画書が納められていた物とは別の、もう一つのアタッシューズの持ち手に手をかけていた。

「お前に渡しておかなければいけない物があった」

それからそのアタッシューズを持ちあげ、執務机の上に置くと、徐に二つある留め金を外し、静かに上蓋を開く。

開いた銀色の上蓋の奥、そこからまず姿を現したのは9mmパラベ

ラム弾が十発装填された二本の予備弾倉、そこから少し離れた所に部品の殆どが強化プラスチックで構成された小型の拳銃、グロック26の黒い外観を窺うことが出来た。

それぞれがぴつたりとはまるように寸定カットされた灰色のスポンジに納められたグロックと予備弾倉は、あまりの小ささから、さながら玩具のようにも見えたが、弾倉に装填されている9mmパラベラム弾は、非防弾対象なら致命傷を与える力を持っている。

そんな殺人のために造られた道具を目の前に、明日香は「これは……？」と永川に問いかける。

「今回の事案は恐らく突発的に標的との戦闘が起こる可能性が高い。それに対応するために一応持っておけ」

やはりこの職場に何年居座っても慣れない殺人の可能性に、複雑な表情を浮かべた永川は、机の上に置いたアタッシュケースをそつと明日香の方に押した。

それを黙って自分の方に引き寄せた彼女は、取り出しやすいように切られた隙間に細い指を入れると、今まで防護材に身を預けるだけだったグロックを握る。

携行性を高めるためか、既存の拳銃より一回りも二回りも小さく制作されたグロック26だったが、華奢な明日香が所持するのにそれは丁度いい大きさだった。

一章

小型で軽量といえども確実に人間を殺傷する事が出来るせい、グロックを握る明日香の右腕には必要以上の力がかかっていた。

まるで、これから射出されるであろう9mmパラベラム弾が奪う命の重さまでもを持ち上げようとするかのように。

濁り始めた執務室の空気、無言の空間を消し去りたかったのか、グリップ左に配置されたマガジンリリースボタンを押して弾倉を抜いた明日香は、「どうです？ 様になってますか」と、セーフティーのかかったグロックを構えて見せた。

細部には気になる所はあるものの、だいたいは形が整っていることから付け焼き刃程度の訓練は受けたんだと判断した纏は、「銃を使った経験はあるのか？」と、確認の意味を込めて言葉を投げかける。

「一応、訓練用の標的相手には何回か撃ったことがありますよ」

グロックをゆっくり下に降ろしながら馬鹿にしないで下さいと言いたげな顰めっ面でこちらを睨みつけてきた明日香だったが、「十発

中命中弾が平均二、三発っていう結果だけは少しいただけないがな」と、素早く彼女の情報が記された資料に目を通しながら笑う永川に、その表情は一変させられた。

「まあ、何回か撃った事がある程度でそんなくらい当てれば上出来だ。大丈夫、何とかなる」

顔をうつむけながら表情を赤らめる明日香にそうやってフォローを入れる永川だったが、肩にかけたゴルフバッグを背負い直した纏の表情はにこりともしなかった。

動かせる部隊の制限に情報の秘匿、そういった制約の代わりに上層部が差し向けてきたのは対人戦闘に関しては素人に毛が生えた程度の情報統括兵。

そこに、作戦計画書の中に見えた上層部への疑問と眠気が混じれば表情も自然と険しくなるのだらう。

「情報戦部隊の連中が何か痕跡を見つけるまでは待機。それで行くんですね？」

深夜に叩き起こされた事と緊張の糸が切れたのが相まったせいか、これ以上世間話で時間を間延びさせられてはたまらないと考えた纏は、腕時計に目を通してながらそう永川に投げかけていた。

「ああ、その方針で行くと上層部に伝えておくつもりだ」

纏の腕時計を覗き込む動作から、彼が帰りがたっている事を理解した永川は、話残した事が無いか計画書を手早くめくりながら十数秒ほど黙りこむ。

「それじゃあ話残しも無いし今日はもう下がっていい。何か情報が入ったら折り入ってまた連絡する」

今の状況ではもう話すことは無いと判断したのか「今から帰りの車を手配するから、一階に上がって待っていてくれ」

と繋げると、作戦計画書を脇に放り、内線電話の受話器を持ちあげた。

「わかりました、それでは失礼します」

車を手配する為に受話器を取った永川に、踵を合わせて切れのいい敬礼を見せた纏は、そのまま回れ右をして後方にあるドアに向けて歩き出す。

手にしたグロックに再び弾倉を装填してアタッシュケースにそれを納めた明日香は、「それでは私も失礼します」と声を発し、纏に続こうとするが、「風間は少し残ってくれ」と言う永川の言葉にその足は止められた。

ドアを開けて執務室を後にした纏を背にしながらアタッシュケースをその場に降ろした彼女は、執務机を挟んで自身を呼びとめた永川と対面する。

「永川だ。今からうちの人員が二人ほど一階に行くから送りの車を用意してやってくれ」と受話器に吹き込んだ彼は、用済みのそれを元の位置に戻すと「配属されてからまだ少ししか経ってないが、どうだ？ やっぱ情報戦部隊にいた時よりも勝手は違うか？」と、明日香に話しかける。

「はい、あそこにいた時とはかなり周りの様子が変わりましたよ」

「いい意味で、ですけどね」と付け足して返事をした明日香は、口元を緩めて細い笑みを形成した。

「ほう、具体的に言うと」

「一番大きく変わった事と言えば、人との付き合いが大幅に増えた事ですね。情報戦部隊にいた頃は情報の伝達も暗号化された電子メールなんかでやり取りしていましたが、人と顔を合わす機会があまり無かったんですよ」

踵を返すように聞こえてきた永川の声に明日香はそうやって返すと、昔を思い出しながら話を続ける。

「私は自分の事をかなり話し好きな性格だと思っていますから、あまり人との交流の無い情報戦部隊での勤務は結構精神的に堪えましてね、丁度そんな時に二、三回しか合ったことのない上司に情報統括兵への転属を命じられました。そこから今日初めて対人戦闘部隊の本部に来てみてみたらびつくりですよ。事案に対する対策や計画を立てる時も直接顔を合わせながら相談するんですね。情報戦部隊にいた頃じゃ考えられない光景ですよ」

一章

「情戦（情報戦部隊）の連中は無愛想な連中ばかりだからな。確かに違うない」

そう言った後に、永川はまるで友人と馬鹿話でもするかのように声を出して笑っていた。

無愛想な上司や同僚に囲まれていた事で、会話や感情表現の少ない仲間が当たり前だと思っていた明日香。

そんな事もあって、急に目の前の厳つい顔の中年が子供のような笑みを浮かべた時、彼女は戸惑いを見せたものの、一瞬後には永川と同じく屈託のない笑みを浮かべていた。

「無愛想と言えば纏だ。あいつの態度のせいで気分を害してしまったかもしれない、すまん」

そこから思い出したようにそう言い、申し訳なさそうに肩をすばめた永川、それを見た明日香は先に早々と彼の執務室から退出した天城纏の姿を頭に思い浮かべてみた。

すらりと伸びた長身に耳にかかる程度の黒髪、そこから覗く彫りの深い顔。

その中でも特徴的だったのは鋭く冷たい眼光を放つ吊り目と、殆ど常時維持している無表情。

確かによく考えてみれば、無駄な事で話を間延びさせるのを嫌う合理的な性格は情報戦部隊にいた時の仲間達に酷似していた。

そんな彼の特徴に気づかなかったのは、久方ぶりの仕事での仲間との交流に気分が高ぶっているせいだろう。

纏の見た無愛想な態度も特段気にならなかった彼女は、「いえ、特に気にはなりませんでしたよ」と笑顔を漏らす。

「そうか、それなら良かった」

その笑顔に、巨体を相変わらず回転椅子に預ける永川は、複雑な表情を浮かべながらほっと胸を撫で下ろしていた。

「お前も部隊の選考試験と環境適応訓練を受けているから分かると思うが、この世界に足を踏み込んで来る奴らは殆どが何か後ろめたい過去を持っている。纏もそんな過去がなければ痛みから逃れる為に、自分を偽ることなく全うな人生を歩んでいたんだがな……」

痛みから逃れるため？、と問おうとした明日香だったが、その言葉は後ろめたい過去や自分を偽る人生といった永川の話の端々に浮かび上がる単語によって、寸前で飲み込まざるおえなかった。

孤児、ヤクザの下足番、終いには犯罪者といった、一般社会に身を投じるにはいささか不利になるであろう後ろめたい過去、一般社会の型枠には適合しないものの、血と硝煙の臭いに染まるこの世界では有利に働く経歴。

就役期間満了時にそれを帳消しにしてやると嘯くりクルター達に集められた部隊の大半の人間は、なにかしらそういった後ろめたい過去を心中に秘めている。

恐らく、鉄面皮を維持しながら執務室を後にした彼も。

そして、今ここで新しい上司と世間話をする自分も。

リクルーターを介して支払われた幾らかの契約金で購入した黒いスーツ、その下に今も存在し、今後も一生消えることがないであろう無数の傷。

切創や小さい火傷といった様々な種類が入り交じるそれが、濃い黒の布地の下にある肌に残っている事を再確認させられれば、恐らく自分と同じような境遇をたどっているであろう彼の深層に踏み込む気は失せてしまった。

「確かに冷静さや判断の速さは“戦える自衛隊”と同義に等しい部隊の人員にとって一番必要な資質だ。だから俺はリクルーターとしてあいつの元に出向き、部隊に引き入れると共にその長所を伸ばしてきた。だが、あいつは俺の想像以上に冷静になりすぎた」

笑みが消え、代わりに一抹の戦慄と悲しみが入り交じった表情を浮かべる明日香と同じで、話を続ける永川の表情にも先程の笑みを見出すことは出来ない。

「冷静を通り越してもはや怜悯さまで感じさせるようになったあいつは、確かに兵士としては非常に有能だが、独立した一個人として社会を生きて行くには、いずれその性格は大きな障害となる」

断言してもいいと口にしながら、永川は数刻前に纏が提出していった茶封筒を引き寄せる。

一人の人間を社会不適合者へと育て上げてしまった自分への怒りか、それともいずれは必ずやってくる除隊、その後、彼が歩み出す一個人としての人生への不安だろうか、彼の表情は悲哀と憤りが入り交じった複雑な物へと変化してゆく。

「指定された任期が満了して娑婆に戻ったとしてもだ、今のあいっでは一般社会の人間とうまく関係を築いてゆくことは出来ない。恐らく、社会に定着できずに再び部隊へと戻ってくることになるだろう。俺の部下にも退任後に社会に定着できず、気苦労がないという理由で再び部隊に再雇用を望んだ奴が何人もいる」

引き寄せた茶封筒、糊でしっかりと封がされているそれを手にした永川は、机の上に無造作に置いてあったペーパーカッターでその封を断ち切りながら話す。

一章

「過酷な訓練と様々な技能の習得、分隊に配備する前に行われる数ヶ月に渡る樹海での戦闘技術習得キャンプは、まだ世間の青臭さが漂う少年少女を兵士に変えるだけでなく、罵声を浴びせる事と肉体を極限まで追い込む事で感情を徹底的に破壊し、人道に反する事案に対して情を挟ませず、ただ怜悯に与えられた命令をこなす機械に彼等を変えることを目的としている。なんせ今の部隊は数年前に起きたとある事案により指揮官クラスの人員が多く不足している状態だ。新たに新規で人員を補充するよりも、出て行く人間を意図的に社会復帰出来ない状態にして呼び戻した方が得策、というのが上層部の意向らしい」

全く反吐が出る話だ、ペーパーカッターで口を開いた封筒から何枚かのレポート用紙を取り出した永川、自身もそんな部隊の汚濁に関わっていることに嫌気がさしているのか、ただえさえ厳ついその顔には顰めっ面が体现されていた。

厳しい訓練キャンプによって突出した身体能力を得ると共に、自我を極限まで押し込めて情を挟む隙を無くす。

確かに訓練キャンプで行われる行程は、秘匿された強大な戦力を作り出すには理にかなった方法だ。

アスリート並の身体能力はナイフを始めとする武器での近接戦闘を容易にしたり、銃器での命中率を向上させるだろうし、情や自我を押し込める術を学べばターゲットが死亡するような事案だったとしても、死を一つの結果として受け止め、殺害前提の任務を躊躇なくこなすことができる。

そういった社会性や倫理観を無視した教育によって生まれた人間は、躊躇や一抹の感情論が自身の生死と事案の成功の命運を決めるこの世界においては非常に高い能力として評価されるだろうが、退役後に一般社会で生活してゆくには、部隊で教え込まれたことは逆に不利になってゆくだろう。

高卒の資格や偽造された経歴を用意するのは簡単なことだろうが、部隊で徹底的に叩き込まれた伶俐さや残酷さはそう簡単に消えることはない。

そういった訓練キャンプでの教育が一般社会に適合できずに部隊に戻る事を期待して組まれていたというのなら、本当に反吐が出るような話だった。

「確かに水面下での行動を身の上としているP S F部隊での活動にとって、非道な事案を思わず躊躇ってしまう感情は一番必要ない物かも知れない。だがな、感情を完全に消し去って、人の死という対峙しがたい事実から無表情で伶俐になる事で逃れ、真面目に人の死と対面しないのは人間として間違った道に進んでいると俺は思っ

いる」

訓練キャンプでの性格矯正、意図的に上層部が組み込んだであろうそれを真つ向から否定した永川は、何処か遠くを見据えるような目を見せている。

「正直な話をする、俺は自分の生き方をこの部隊だけに見出してほしくない。俺みたいな中年と違って若い連中にはまだまだ可能性がある。その気になれば、後ろめたい過去を消し去って自分の望む未来を体现することも可能だ。俺はそんな人間としての可能性に生き方を見出してほしいと思ってるんだ。今まで世話をしてきた部下も、事案をただ淡々とこなすだけの纏も、そして、今日俺の部下となつたお前にもだ」

遠方に向けていた目を明日香に向け直した永川は、少しくさいセリフを吐いた口を黙らせたかったのか、先程脇に追いやった煙草とライターに手を伸ばしていた。

「すまん、中年のくだらない話に付き合わせてしまつて」

セキュリティを切断した事で気兼ねが無くなったのか、マイルドセブンの銘柄が印刷された小さな箱を開けると、中から本日何本目かもわからない煙草をとりだし、口に銜えて火を灯す。

「いえ、素敵な話でしたよ」

永川の言葉にそう返した明日香は、一点の曇りも無い笑みを浮かべていた。

そんな笑みに彼は一瞬だけ目を丸くしたが、一拍後には「そうか、そう思ってくれたんなら良かったよ」と明日香に釣られて笑みを浮かべていた。

「纏は人間不信の塊みたいな奴だ。お前に対しても冷たい態度をとるかもしれないが、同僚としてでも友人としてでも良いから仲良くしてやってくれ」

浮かべられた屈託のない笑みにそう切り返すと「それじゃあ送りの車を一階に呼んであるから、それで帰って待機に入ってくれ」と投げかける。

「はい、それでは失礼します」

背筋をぴんと伸ばして上半身を傾け、形の整った礼をした後に、一瞬だけ微笑みを浮かべた明日香は回れ右して執務室の扉に足を向ける。

一章

ドアノブを捻り、華奢な体軀を見せながら室外に出る明日香、その後ろ姿を確認しながら永川は提出された報告書に目を通し始めた。

吸い込んだ白い主流煙を口から吐き出しながら。

*

レギュラーのガソリンを喰い、気化させたそれを空気と混合しシリンドラ内で爆発を起こすことで推進力を確保するエンジン。

ハイエースのそれから発揮される最大出力5600rpmの以上の回転が、自在継手を介してプロペラシャフトに伝えられる振動を感じながら、纏は厚い疲れが残るその身体をシートに預けていた。

いつもなら殺害前提の事案を終えた後は、リクライニングの利くそれを適度な角度に倒し、右手で両目を覆って深い眠りに入っているところだったが、今日ばかりはそういった行動をとれそうに無かった。

「へえ。纏さんって私と同年だったんですね」

何故なら、先程から黙ることを知らないといった様子で次々と質問を繰り返す明日香への対応に彼は追われていたからだ。

本来なら夜通しの事案が終わり、家路について自室でゆっくりと休めることに素直に喜べるはずだった。

だが、隣に居るこの少女の質問責めに、その表情は疲れが数段厚塗りされたようになっていた。

そういった表情を作り出す一因となっていたのが、彼女が繰り返してくる質問の内容だ。

最近の天気やニュースといった適当な世間話なら一文で終わる短い相打ちを打つだけで済むだろうが、明日香が言い放ってくる質問は年齢や趣味を始めとする自分の素性に迫る物だった。

普通に應對するならそういった質問でも然るべき答えを返していれば、割と円滑に会話を進められるだろう。

しかし、自分の素性に迫られることを極度に嫌う彼にとって、そういった質問は逐次襲ってくる眠気と相まって、苛立ちの材料となっ

ていた。

隣で先程執務室で見せたものと同じ微笑、興味と好機が入り交じったその表情に、「ああ、そうみたいだな」と適当に返答した無表情は、刻一刻とその姿を変えてゆく外の風景へと目を向けた。

ドアにはめ込まれた大きなガラス越しに見る外、高層ビルの長身が立ち並ぶ外には、陽光で地上を照らし出す朝日が既に昇り始めていた。

そんなガラス越しの弱い太陽光を上体に受けつつ、纏はまだ話しかけてくる明日香の声を無視して、先程永川から知らされた事案の内容、それに対して浮かんだ疑問について整理し始めた。

今回の説明を聞いて感じた疑問、それは、何故全く人相を識別できないサイバースペースからの攻撃において、襲撃者がアジア系の外見を持つ某国工作員と判断できたのか、という一点に尽きた。

どんなに優秀なセキュリティを敷いても、何重にも渡るファイアウォールを設置したとしても、よくある刑事ドラマのように襲撃してくる相手側の素性を掴むことはできない。

何故なら、情報戦。陸、海、空、宇宙空間に次いで新たな戦場になると予想されているインフォメーションウォーでは、一人の襲撃者

が何百、何千の兵士として攻め込むことができるからだ。

元来の戦場では、小銃を抱えた兵士や戦闘機に座乗した兵士、それから数千の人員が乗り込んだ戦艦や軌道上に打ち上げられた偵察衛星といった、一人もしくは大人数でしか操作することの出来ない兵器による戦いが現在でも横行している。

だが、二十世紀最大クラスの発明と言っても過言ではない、人では到底不可能な速度で高速演算を行うコンピューター、その誕生が端を発しているインターネットでの戦闘ではその限りでは無い。

様々な指令を宿主が不在のまま淡々とこなす各種プログラム。

進入経路さえ支持してしまえば自立した行動により様々な破壊活動を行ってくれるウイルスやワーム。

そういった指示通りに行動を行う多種多様な兵士を、PCのスペック分だけ半ば無制限に展開できるサイバースペースにおいて、攻撃する人間が例え一人だったとしても数百、数千に匹敵する戦力と破壊力を持つことが出来る。

今回の防衛省襲撃事件においても、斉藤が切り開いた進入経路からサイバースペースに侵入した襲撃者は、事前に人間を使いスタンドアロンを解除するワームを送り込むことで、そういったサイバー

スペースでの攻撃側の優位性を利用して目的の情報を奪取した事が予測される。

IPアドレスの欺瞞をはじめとする様々な捜査の妨害工作を織り込んだ襲撃ともなれば、いくらうちの情報戦部隊の連中がそれなり以上の能力を保持していたとしても、襲撃者が使用した端末の検索にはかなりの時間を要する。

一章

それでもって、襲撃者の使用した端末がネットカフェに置かれた物だったり、何処からか無断借用された物であれば、たとえ使用した端末を特定できたとしても襲撃者の人相や素姓を判別することはできない。

しかし、上層部が送りつけてきた作戦計画書には、鮮明では無いにしろ被疑者であるアジア系の某国工作員の画像がクリップで挟まれており、更に今回の襲撃が某国工作員集団によるものと示唆する文章を見つけることができた。

襲撃からまだ五時間と経ってなく、攻撃も足がつきにくいサイバースペースからだ。

そういった悪条件が重なっているのに何故、上層部は今回の襲撃が某国工作員によるものだという見解を示したのか？

そもそも、盗み出された情報がそれほど重要度の高い物なら、首都圏の精鋭部隊から全国に散らばる末端の部隊員まで動かしても襲撃者の動向を探り、奪還する筈だ。

防衛省のサーバールームに納められている情報、その中でも『流出すれば国家の威信を大きく傷つける代物』と位置づける情報となれ

ば、世間への流出を是が非でも止めなければならない。

それなのに、上層部は情報流出を避ける為という曖昧な理由で、動ける部隊を第0戦闘部隊と第1情報戦部隊に絞り、事案に当たらせる意思を見せつけてきた。

よほど自分達のことを買いかぶっているのか、それともクライアントである以前にPSF部隊の飼い主である防衛省が情報流出という破廉恥を知れ渡らさせるのを拒んだのかは知る由も無いが、国家を転覆させるほど重要な情報を野放しにしておくのがどれほど危険なことか。そして、いくら戦闘能力に優れているとしてもたかだか一個分隊程度の人員と、搜索網はサイバースペースに限られている情報戦部隊では襲撃者を探し出すには人手が足りないことも、彼らは百も承知しているだろう。

そういった事実を認識している筈なのに、あくまでも部隊上層部は少ない人員と少ない情報のみで事案を遂行する腹を決め込んでいる。

何故、サイバースペースからの攻撃なのに襲撃者の素姓を割る事ができたのか？

何故、今できる最大限の努力、全部隊を動かしてでの搜索活動に当たらないのか？

今まではどのような事案にも的確な戦力、的確な作戦計画を提示していた部隊上層部。

それが今回は打って変わってあまりにも無謀な作戦計画書を寄こしてきた。

もしかすると今回の事案、何か大きな裏があるかもしれない。

恐らくは上層部の人間にしか伝えられていない、何か大きな意思による裏が……。

「纏さん。私の話聞いてますか？」

窓から差し込む斜陽、右方に位置する何処かの企業の巨大なミラービルから反射されることで強みが増したそれが眠気を孕む目を刺激すると共に、隣から聞こえてきた不機嫌そうな声で纏はそこで考えるのをやめた。

その流れで疲れが浮かぶ流し眼で左を見ると、膨れっ面と上目使いでこちらを睨む明日香の姿が確認できた。

風間明日香一曹。情報統括兵として情報戦部隊から転属してきた彼女は、元々航空自衛隊の女性士官として航空システム通信隊に配属されていたらしいが、その情報処理能力と視野の広さから部隊のリーダーに引き抜かれたらしい。

ちなみに趣味はスポーツ観戦とヴァイオリンだとか。

聞いてもいないのに来歴を散々話した揚句、「好きなスポーツは何ですか?」「へえ、野球が好きなんですか。すると、好きな球団は?」「よく聞く曲とがありますか?」等と長閑な質問を繰り返して話を全くやめようとはしない。

初めは適当に当たり障りのない返答を相槌を打つかのように返していた纏も、十数分も濃密な質問の弾幕が続けばいい加減嫌気がさし、窓の外に目を向け、物思いに耽っていた。

こいつは黙ることを知らないのか? そう心中で呟きながら「すみん、聞いてなかった」と多少は申し訳なさそうにその膨れっ面に応じると、今度こそ彼女をこれ以上喋らせないためにも目を再度車外へと向けようとする。

「纏さんって、何か考え事してる時は他の事が目に入らなくなるみたいですね」

その動作と同時に聞こえてきたのは、上目づかいでこちらを覗き込む明日香の声だ。

彼女が不意に言い放った質問、普段の生活では考えたことも無い自分の癖に関するその問いに、その動作は止められた。

急に明日香から差し込まれた問いかけに纏は、俺にそんな癖なんかあったか？と顎に手を当てて数秒考え込む。

一章

確かに俺は度々考え込む時があるかもしれない。

でも、人の呼びかけに対して反応できない程、物思いにのめり込む事があったか？

だが、自分では全く自覚しておらず、更に追及をされたことも無い自身の癖は、どれだけ日頃の生活を振り返っても思い当たる節を見出せず、纏は窓に向けようとしていた身体を彼女の方に戻し、「そうなのか？」と意外そうな声を返していた。

「絶対にそうですよ。一度窓の外に向き直して難しい顔をしてからは、何回話しかけても反応が無かったんですから」

不機嫌そうに両手を胸の前で組みながら、再びシートに身を預けた明日香は、「本当に私の父親にそっくりですよ」とぼつりと呟いた。

親父……か、そういえば俺にも一応はそう呼べる存在が居たんだな。

明日香が置くように言い放った言葉は、纏の脳裏の奥から消えかけていた一人の人物の姿を思い出させていた。

短く切りそろえられた金髪に、刺青だらけの太い腕を見せ、その目にはいつも威圧的でありながら何処か取りつく島も無いような焦りを孕んだ光を持つ男。

自分から見て親父と呼ぶにあたるあの男が多額の借金を背負い始めたのは、俺が虐待を受け始めたのと同じくらいの時期だった。

*

天城纏は東京都の中にある数少ない田舎、町田の山間部の小山田でその幼少期を過ごしていた。

トルネード投法から投じられるフオークボールで一躍有名になった野茂英雄がメジャー挑戦を表明するさなか、大きな被害をもたらした直下型地震阪神淡路大震災が発生し、オウム真理教主犯の元、地下鉄サリン事件が決行された頃だった。

周囲は膨大な量の緑と田園に囲まれており、電車すら通っていない小山田は観光客は元より、車も人も疎らにしか見つけることのできない過疎地域であり、ブラウン管に映し出されるニュースの映像だけが時代の流れを知る唯一の手段であるその僻地で、彼は他の世界を全く知る事無くそこで育った。

家族構成は父と母と纏の三人家族で、母は水商売、父はとび職やトラックドライバーなどといった様々な職を転々としていた。

耕し手の居なくなつた農地に建設された家賃の安いアパートに住む家族を訪れる者はおらず、そういった事実を不自然に思つたり、不満に思つたりしなかつたのは、他の家庭を覗き見る機会がなかつたからであり、人気の少ない過疎地の住民が、定職についていない人相の悪い父と、夜の商売をしている母との間にできた子供と自分の子供とが遊ぶのを歓迎しなかつたせいだろう。

二人合わせても余裕がない稼ぎを切り詰めた金で、確か六歳か七歳の誕生日の時に買つてくれたグローブ、それを左手にはめ、整備された農道を使つて父とキャッチボールをするのが、纏の有意義な時間の使い方だつた。

高校時代は途中まで野球部に在籍し、聞くには将来有望な投手だつた彼は、まだぎこちない投げ方しかできない纏に投球フォームを教えてくれた。

両親の経歴の事を親から聞き、その言葉の意味も知らずに馬鹿の一つ覚えのように辛辣な悪口を浴びせかけてきた同級生とは離別し、毎日野山を駆け巡つて遊んでいたことにより下半身がすっかりとれていたのか、周囲を田で囲まれている農道では、一つの暴投がボールを泥まみれにして貴重なキャッチボールの時間を失うのを嫌つていたのか、グローブを買つて二カ月も経つ頃には父親が構えた場所に百発百中の精度で投げ込めるようになっていた。

当時の纏はどんなに学校で悲惨な悪口やいじめを受けても、「お前のコントロールなら甲子園。いや、プロ野球で沢村賞もとれるかもしれないぞ」と興奮した様子で褒めてくれる父の笑顔を見れば、原因となっている彼の経歴を攻める気も瞬時に消え失せていた。

それと、毎月二十日に訪れる母の給料日、その日の帰りに母が材料を買ってきて作ってくれるカレーライス。

市販のルーに隠し味としてはちみつが加えられたそれは母の一番の得意料理であり、同時に一月の中で最も贅沢な食卓が、学校での悪口にただ頑なに耐える理由となっていた。

自分の成長を素直に褒めてくれる父と、水商売のせいで家を留守にすることが多かったが最大限の愛を注いでくれた母。

それさえあれば、纏は他に何もいらなかった。

どんなに貧困でも、どんなに孤独でも、どんなに悲しくても、それさえあればその全てに耐え抜くことができた。

実際に纏はそういった親との生活と野球だけが全てだったので、周囲が自分をどう思っているかはどうでもいい話だった。

一章

同級生がどんなに悪口を浴びせても完全無視といった様子で全く取り合おうとせず、無感情な目で相手を睨みつけ、相手に飽きが来るまで待つ。

一度だけ激怒し、青ざめた顔をした教師が慌てた様子で止めに入るまで相手を殴りつけてしまったのは、トイレで用を足してる最中に、母親が作ってくれた弁当にチヨークの粉をぶちまけられた時だ。

経済的な負担の関係からチームに所属さえしていないものの、それなり以上の練習と、一人で山の中を遊び回っていたお陰でかなり体が鍛えられていたのか、殴った相手の腕にヒビが入るうが、顔面を腫らして号泣する彼を許しはしなかった。

午後5時頃には市街地へ仕事に出かけてゆき、明け方の四時頃に疲れきって帰ってくる母親が、重い体に鞭を打ってまで作ってくれた弁当。

眠気が襲う目を擦りながら母が作ってくれた弁当を滅茶苦茶にされたのが相当腹が立ったのだろう。

纏は両親に無駄な心配をかけ、さらに相手の腕の治療費を出す経済的な負担をかけてしまったことを激しく悔い、未然に事態を防げず感情的になってしまった自分を情けなく思っていた。

両親は自分を養っていくので精いっぱいなのだから、必要以上に迷惑や心配をかけてはいけない。

どんなに悲しく惨めな思いをしても、それ以上の辛い思いをして両親は自分を育ててくれているのだから。

そう言い聞かせながら生きてきた時間は、纏にとって少なくとも充実した時間だった。

確かに学校では様々な苦労に見舞われたが、家族と過ごす一瞬には、そういった負の感情を圧倒的に上回る幸せが存在していたのだ。

だが、そんな幸せな日々はそう長くは続かなかった。

彼が小学五年生に進学した頃、父親の様子がおかしくなり始めたのは丁度それと同じ頃だった。

もう何度目かもわからない父の失業、長距離トラックドライバーをクビになった時、彼は禁断の快楽に手を染めてしまった。

インターネット取引で手に入れたそれを初めて服用している所を見

たのは、深夜にリビングの襖の隙間をこっそり覗いた時だ。

僅か数センチの隙間、そこから差し込む細い電灯により目を覚ました纏は、てつきり母親が帰って来たものと思い、その隙間を覗き込むが、弱くも寝起きの目にはきつい光に右目を細めながら覗く先にあつたのは、仕事から帰って来た香水の匂いでは無く、とてつもなく濃いアルコールの香りだ。

それと同時に目に飛び込んできたのは、夥しい量の酒の瓶と何か薬のような物を取り出し、それをコップの水で飲み込む父親の姿だった。

父親の服用した薬、それがMDMAという名の覚せい剤の一種であることを理解したのはそれからかなり経った後だったが、白く小さいその錠剤が破滅的な効果を生産させるのにはそれほど長くはかからなかった。

トラックドライバーの職を失い、三十手前の年齢と高校中退の経歴と大型免許以外の資格が全くないことが足を引っ張り、再就職の目処が全くと言っていいほどたたなかった父親は、少ない収入を切り詰めて積み立てた預金をも切り崩し、知りあつた売人から禁断の快樂を買い漁る。

それと同時に段々とその長さを増していった禁断症状に陥る時間は、

彼の性格を極めて暴力的な物に変え、その矛先は抵抗する術を持たない息子の纏へと一挙に降りかかったのだ。

心に突き刺さる暴言や殴る蹴るの暴行は勿論の事、煙草の火を押し当てられたり熱湯をかけられたり、何処から入手したのかもわからないサバイバルナイフで切りつけられた時は病院に駆け込み、額を何針か縫う怪我を負っていた。

それでも医者に額の切創が偶発的な事故によりできた物と言い張ったのも、禁断症状が発生している時に振るわれる暴力にただ黙って耐えていたのも、父親の禁断症状が起こり始めると真っ先に理由付けして家を留守にした母親を黙認したのも、再び覚せい剤を服用し、禁断症状がおさまった時に真っ先に泣きながら謝る父親の姿を目にしていたからだ。

厳つい顔をぐしゃぐしゃにし、涙で目を濡らしながら「すまない…… すまない」と、うわ言のように唱え続ける父親、魔の薬に全身を蝕まれつつも、まだ彼の中にキャッチボールをした時の優しさが残っていると信じていたからだ。

まだ彼が正気に戻る可能性を信じて、否、彼に正気が戻ることを望んで、纏は“あの日”まで生活を送って来たのだ。

そう、全ての希望が一挙に絶望へと転換した“あの日”までは。

六年前の十一月十五日、纏が十二歳の誕生日を迎えた夕方だった。

体力づくりの為に近所の山中を走り込んだ帰りだ。

アパートのドアを開いた時に纏は妙な違和感を感じていた。

禁断症状の時には暴言を全身から絞り出し、覚せい剤の効果が持続している時は身を襲う快樂に上機嫌になる。

一章

そつやつて寝るとき以外は何かと生活音とも雑音ともつかない音声を常に放っていたアパートの一室だが、その日は珍しく人の気配を感じさせないほど静かだった。

そんな静けさに纏は両親が出かけているのではないかと推測し、いつも通りの足取りで短い廊下を進み、リビングへと足を踏み入れようとする。

その瞬間、見慣れた父親の背中が目に見え込んできた。

てつきり出かけているのかと思ひ込んでいたので、リビングにしゃがみ込むそのまゝい背中を見た時から遅れること一拍、禁断症状が覚せい剤の効果が出てる時間かを判断しようとする神経が働き出していたが、何年間も父親の出方を窺う事で鍛えられたそれは、あの日だけは答えを出すことは出来なかった。

もしもの時を考えて、父親が繰り出す暴力に身構えながら彼に近づく纏、しかし、その動きは目の前の昔に比べて酷く小さくなった背中が振り上げた右手によって止められる。

振り上げられた右手に握られている鈍色の大振り of 刀身を見せる物体、それがだいたい前に纏を傷つけたサバイバルナイフだと気づく頃には、彼の右手は勢いよく床に振り下ろされていた。

畳に突き刺さる軽快な音の中に混じった何か他の物を貫通する音、
そういった異音を耳にした次の瞬間には父親は突き立てたサバイバ
ルナイフを思いっきり右へと振り抜いてゆく。

同時に何かが引き裂かれる嫌な音が響き渡り、振り抜いたナイフの
切っ先に刺さる見覚えのある茶色の破片を見つける事が出来た。

使い古されてぼろぼろになった茶の生地、それが親父が自分に買い
与えてくれたグローブである事に気づくにはそう長い時間はかから
なかった。

正気が戻ると信じていた父、そんな彼が自分との思いでが詰まった
グローブを切り裂いているという事実。

全身に駆け巡ったその情報が脊髄を通り、神経を介して脳細胞に染
み渡ってゆく中で、纏の希望は絶望へと瞬時に裏返ってゆく。

もう目の前にいるこの背中が再びあの優しさを取り戻すことは無い
し、自分のストレートを褒めてくれることも無い。

この男に残っているのは麻薬中毒者の肩書と、快楽と禁断症状との
狭間で生きる人生のみだ。

目の前に存在している“これ”は、もはや自分の父親ではない。

それが間違った思考だったのかそうでないのかを判断する余裕は纏にはなかった。

何故なら、当時の彼の脳内は突如として噴出した絶望に支配されており、脳の中枢を支配したそれが目の前の“それ”を排除するように既に命じていたからだ。

グローブを切り裂く事で精いっぱいだったのか、後ろに迫る殺意にまだ気づくことが出来なかった背中を余所に、纏は台所に無造作に置かれていた包丁を手に使っていた。

何故、職を失ったくらいで……

何故、家族に相談してくれなかったのか？

何故、自分だけをこんなにも痛めつけたのか？

しゃがむ背中に投げつけられる疑問、それに彼は一切答えることは出来なかった。

それは纏の心中を飛び交った言葉であり、実際に彼はその問いを口から出していなかったからだ。

自分の問いに“これ”は答えてくれない。

そう理解した瞬間、機械的に彼は左足を大きく前に踏み込んでいた。

肋骨の隙間から突き入れられた包丁、肺にまで達したその切っ先が軽くひねられると同時に、纏の父親だった“それ”は悲鳴も怒号も上げる事無くこの世からその存在を霧散させていった。

恐らくは禁断症状に陥った父、彼がナイフを持ち出してきた事によって部屋の端で腰を抜かしながら震えていた母も同じ末路を辿ったのは言うまでも無い。

何故、父の変調に気づけなかったのか？

何故、自分を助けられなかったのか？

先程と同じ問い、まるで自分に言い聞かせるかのように心中に放った問いと共に、彼女の胸から少量の血液が吹きだした事は、まだ纏の記憶に色濃く残っている。

自分を部隊の人間として留めさせている足枷として、あるいは両親だった二つの命を容赦なく握りつぶした戒め。大罪として。

部屋に転がった二つの肉塊、それを見下ろす纏に今後のことは何一つ予想できなかったが、また昔のように父とキャッチボールを出来ない事と、母の作るカレーライスを食べることが出来ない事だけは、彼にも理解できたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2626n/>

刹那の瞬間

2011年12月26日21時50分発行